

あさくさばる  
朝草原遺跡  
おだてだい  
尾立第3遺跡

Asakusabaru Site  
Odate 3 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 42

2007

宮崎県埋蔵文化財センター

あさくさばる  
朝草原遺跡  
おだてだい  
尾立第3遺跡

Asakusabaru Site  
Odate 3 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 42

2007

宮崎県埋蔵文化財センター



大師山と朝草原遺跡、尾立第3遺跡、朝倉遺跡（南から）



朝草原G遺跡（C区）土層断面



尾立第3遺跡土層断面

# 序

宮崎県教育委員会では、平成11年度から東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地の埋蔵文化財の発掘調査を実施しており、本書はその発掘調査報告書となります。

本書に掲載した朝草原遺跡は、山裾と山裾から広がる台地に位置し、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺構・遺物が確認されました。特に、縄文時代草創期から早期と思われる薄手の無文土器が出土したことは、県内での該期の土器を考える上での貴重な資料となりました。

また、尾立第3遺跡は、朝草原遺跡とは山を挟んで反対側の山の中腹に位置します。遺跡の面積は決して大きくありませんが、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺構・遺物が多数確認されました。特に、傾斜地で小規模な範囲からも礫群10基や集石遺構2基が検出されたということは、今後、当地域の旧石器時代・縄文時代早期の人々の生活を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成19年2月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉

## 例　言

1. 本書は、平成 17 年度に実施した、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う朝草原遺跡・尾立第3遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団から委託を受け宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成 17 年 10 月 1 日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本道路公団として記載する。
3. 発掘調査の期間は、以下のとおりである。

朝草原遺跡	平成 17 年 9 月 1 日から平成 17 年 12 月 22 日
尾立第3遺跡	平成 17 年 9 月 1 日から平成 17 年 10 月 26 日
4. 現地での実測は、朝草原遺跡は井上美奈子、河野康男が、尾立第3遺跡は井上、河野、渡辺美幸、石津晴菜が行った。
5. 空中写真撮影については、(有)スカイサーベイ九州に、基準点設置については(株)新藤測量設計事務所に委託した。
6. 現地での写真撮影は、井上、河野が行い、出土遺物の写真撮影は、井上が行った。
7. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレイス等は井上が行い、一部石器の実測図及びトレイスは、(株)大成エンジニアリングに委託した。
8. 本書で使用した周辺遺跡分布図は国土地理院発行の 1/50,000 図を利用した。また、遺跡周辺地形図等は、日本道路公団宮崎工事事務所から提供の 1/2,000 図を基に作成した。
9. 土層断面及び土器の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局／監修『新版標準土色帖』に拠った。
10. 本書で用いた標高は海拔絶対高であり、方位は座標北 (GN) を基本とするが、遺構実測図などの一部に磁北 (MN) を用いた。座標北 (GN) は「N」と表記する。
11. 本書で用いた遺構の略号は、次のとおりである。

S C = 土坑	S I = 瓦群、集石遺構
----------	---------------
12. 両遺跡で実施した樹種判定、放射性炭素年代測定は、(株)古環境研究所に委託した。
13. 本書の執筆・編集は井上が担当した。
14. 出土遺物・その他諸記述は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

## 第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査概要	1
第3節 立地と環境	2

## 第Ⅱ章 朝草原遺跡の調査

第1節 調査の経過と方法	8
第2節 紹序	10
第3節 A区の調査記録	14
第4節 B区の調査記録	28
第5節 C区の調査記録	33
第6節 まとめ	38

## 第Ⅲ章 尾立第3遺跡の調査

第1節 調査の経過と方法	43
第2節 紹序	45
第3節 尾立第3遺跡の調査記録	47
第4節 まとめ	64

## 第Ⅳ章 おわりに

石器の選別間接合～おわりに代えて～	68
-------------------	----

# 挿図目次

第1図 朝草原・尾立第3遺跡周辺分布図 (S = 1/50,000)	5
第2図 朝草原遺跡周辺地形図 (S = 1/1,000)	6
第3図 尾立第3遺跡周辺地形図 (S = 1/1,000)	7
第4図 確認調査遺物実測図 (S = 1/1, 1/2)	8
第5図 確認調査トレンチ配置図 (S = 1/2,000)	9
第6図 朝草原遺跡グリッド配置図 (S = 1/600)	12
第7図 A区土層断面図 (S = 1/40)	13
第8図 A区表探石器実測図 (S = 1/1)	14
第9図 A区遺構分布図及び石器分布図 (S = 1/400)	15
第10図 土器分布図 (S = 1/600)	16
第11図 A区出土石器実測図 (1) (S = 1/1)	16
第12図 A区出土石器実測図 (2) (S = 1/1)	17
第13図 A区出土石器実測図 (3) (S = 1/1)	18
第14図 A区出土石器実測図 (4) (S = 1/1)	19
第15図 A区出土石器実測図 (5) (S = 1/1)	20
第16図 A区出土石器実測図 (6) (S = 1/2)	21
第17図 A区出土石器実測図 (7) 及び土器実測図 (1) (S = 1/2)	22
第18図 A区出土石器実測図 (8) (S = 1/1, 1/2)	24
第19図 A区出土土器実測図 (2) (S = 1/2)	25
第20図 A区出土土器実測図 (3) (S = 1/2)	26

第 21 図	A区検出土坑実測図（S = 1/20）	27
第 22 図	B区出土表採石器実測図（S = 1/1）	28
第 23 図	B区・C区遺構分布図及び遺物出土分布図（S = 1/400）	29
第 24 図	B区礫群実測図（S = 1/20）	30
第 25 図	B区出土石器実測図（1）（S = 1/1）	31
第 26 図	B区出土石器実測図（2）（S = 1/1、1/2）	32
第 27 図	C区土層断面図（S = 1/20）	35
第 28 図	C区集石遺構実測図（S = 1/20）	36
第 29 図	C区出土石器実測図（S = 1/1）	37
第 30 図	C区出土土器実測図（S = 1/2）	37
第 31 図	確認トレンチ配置図（S = 1/1,000）	43
第 32 図	尾立第3遺跡グリッド配置図（S = 1/300）	44
第 33 図	土層断面図（S = 1/60）	46
第 34 図	表採土器（S = 1/2）	47
第 35 図	遺構分布図（S = 1/200）	48
第 36 図	礫群実測図（1）（S = 1/20）	49
第 37 図	礫群実測図（2）（S = 1/20）	50
第 38 図	礫群実測図（3）及び集石遺構実測図（S = 1/20）	51
第 39 図	散礫のグリッドごとの総重量模式図（S = 1/200）	52
第 40 図	石器出土分布図（S = 1/200）	55
第 41 図	出土石器実測図（1）（S = 1/1）	56
第 42 図	出土石器実測図（2）（S = 1/1）	57
第 43 図	出土石器実測図（3）（S = 1/1）	58
第 44 図	出土石器実測図（4）（S = 1/1）	59
第 45 図	出土石器実測図（5）（S = 1/2）	60
第 46 図	出土石器実測図（6）（S = 1/2）	61
第 47 図	出土石器実測図（7）（S = 1/2）	62
第 48 図	出土接合石器実測図（S = 1/2）	63
第 49 図	遺跡間接合石器実測図（S = 1/2）	66

## 表目次

第1表	朝草原遺跡土器観察表	34
第2表	朝草原遺跡石器計測表	40
第3表	尾立第3遺跡石器計測表	67

## 図版目次

巻頭図版 1	大師山と朝草原遺跡、尾立第3遺跡、朝倉遺跡（南から）	
巻頭図版 2	朝草原遺跡（C区）土層断面、尾立第3遺跡土層断面	
図版 1	朝草原遺跡俯瞰（北から）、朝草原遺跡A区調査区俯瞰（西から）	74
図版 2	朝草原遺跡A区IV層無文土器出土状況（南東から）、朝草原遺跡A区土層断面（南から）	75
図版 3	朝草原遺跡A区検出 SC 1～SC 3断面及び完掘、V層無文土器出土状況、K 3 グリッド土層断面	76
図版 4	朝草原遺跡B区、C区俯瞰、B区北壁土層断面	77
図版 5	朝草原遺跡B区検出 SI 4、SI 5、C区検出 SI 1～SI 3 検出状況	78
図版 6	朝草原遺跡A区出土石器（角錐状石器、ナイフ形石器、細石刃核、細石刃、敲石、石礫、剥片、石核）	79
図版 7	朝草原遺跡A区・C区出土無文土器、B区・C区出土石器（角錐状石器、細石刃核、石礫、剥片、石核）	80
図版 8	尾立第3遺跡俯瞰、北側散礫（西から）	81
図版 9	尾立第3遺跡検出 SI 1～SI 8 検出状況	82
図版 10	尾立第3遺跡検出 SI 9～SI12 検出状況及び断面、完掘、石器出土状況	83
図版 11	尾立第3遺跡出土石器（角錐状石器、ナイフ形石器、台形石器、搔器、二次加工剥片、敲石、細石刃核、石礫、剥片、石核、石核、接合石器）、朝草原遺跡と尾立第3遺跡の接合資料	84

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西都間）は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となった。さらに平成9年12月に建設大臣（現国土交通大臣）から日本道路公団へ施行命令が発令され、公団は翌年2月から事業に着手している。

それに伴い、県教育委員会は、平成10年度に都農～西都間の分布調査を行い、計79遺跡の埋蔵文化財包蔵地の存在を確認した。調査は、平成11年度から宮崎県教育委員会が日本道路公団九州支社の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。

本調査に先立ち、朝草原遺跡は、平成17年2月14日から3月17日と平成17年6月1日から7月27日の2回に分けて確認調査を行った。その結果、鬼界アカホヤ火山灰（以下、KAh）下層の暗褐色土から集石遺構1基が検出され、縄文時代早期の土器や石器、その下層の褐色土からは後期旧石器時代のナイフ形石器、剥片が出土した。尾立第3遺跡は、平成17年6月1日から7月27日にかけて確認調査を行った。その結果、姶良Tn火山灰（以下、AT）より上層の褐色土より後期旧石器時代から縄文時代草創期と思われる剥片が多数出土した。

これらの確認調査を元に、尾立第3遺跡は全調査対象面積を1,000m<sup>2</sup>とし、平成17年9月1日から10月26日まで本調査を実施することとなった。併せて、朝草原遺跡も同年9月1日から12月22日まで4,430m<sup>2</sup>の本調査を実施した。整理作業は平成17年12月から行い、平成18年度に終了した。

## 第2節 調査組織

調査の組織構成は次のとおりである。

【調査主体】宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

平成16年度

所長	宮園 淳一
副所長兼総務課長	大齒 和博
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
調査第一課長	高山 富雄
主幹兼総務係長	石川 恵史
調査第一係長	谷口 武範
主幹兼調査第二係長	長津 宗重

平成17年度

所長	宮園 淳一
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課長	宮越 尊
調査第一課長	高山 富雄
主幹兼総務係長	石川 恵史
主幹兼調査第一係長	長津 宗重
主幹兼調査第二係長	菅付 和樹

平成18年度

所長	清野 勉
副所長	加藤 恒郎
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務課長	宮越 尊
調査第一課長	高山 富雄
主幹兼総務担当リーダー	高山 正信
主幹兼調査第一担当リーダー	長津 宗重
主幹兼調査第二担当リーダー	菅付 和樹

### 【調査担当】

〔朝草原遺跡〕

調査第一課調査第一係主査

安藤 真二

（平成16年度）

調査第二係主査

河野 康男

調査第二係主査 長友 久昭  
調査第二係主事 堀田 孝博  
調査第二係主事 井上美奈子  
(平成17年度)

〔尾立第3遺跡〕

調査第一課調査第二係主査 河野 康男  
調査第二係主事 井上美奈子  
調査第一係主事 渡辺 美幸  
調査第二係調査員 石津 晴菜  
(平成17年度)

【調査報告書作成担当】

調査第一課調査第二係主事 井上美奈子  
(平成17年度)  
調査第一課調査第二担当主事 井上美奈子  
(平成18年度)

なお、発掘調査、遺物整理、報告書執筆に際して、以下の方々より御指導・御協力を受けた（敬称略、順不同）。

【東九州自動車道発掘調査指導委員】

泉 拓良（京都大学）  
小畑 弘己（熊本大学）  
田崎 博之（愛媛大学）  
広瀬 和雄（国立歴史民俗博物館）  
本田 道輝（鹿児島大学）  
柳沢 一男（宮崎大学）

【整理指導・調査指導・調査協力】

清野 孝之（文化庁）  
吉永 真也（都農町教育委員会）  
赤塚 次郎（愛知県埋蔵文化財調査センター）  
野口 淳（明治大学校地内遺跡調査班）  
常松 幹夫（福岡市教育委員会）  
西 哲弘（大分県教育庁）  
綿貫 俊一（大分県教育庁）  
田中 裕介（大分県教育庁）  
塙地 潤一（大分市教育委員会）  
永松 正大（大分市教育委員会）  
宮田 剛（大分市教育委員会）

### 第3節 立地と環境

#### 1 地理的環境

朝草原遺跡及び尾立第3遺跡は、宮崎県都農町に所在する（第1図）。都農町は宮崎県の中央よりやや北寄り、東に日向灘を望み、南の宮崎市と北の延岡市のほぼ中間に位置している。

朝草原遺跡は、標高79～83m、名貫川と都農川支流上町川の間の大師山の東側山裾に存在する（第2図）。また、尾立第3遺跡は、標高95～100mを測り、朝草原遺跡とは山を挟んだ反対側の大師山西側山腹に存在する（第3図）。

両遺跡周辺は、隆起のたびに名貫川と上町川の浸食活動が活発化した結果形成された開析扇状地である。これらの河川の浸食活動により新しい扇状地と古い扇状地の間に段差が生じ、数段の河岸段丘が形成された。本遺跡周辺は約7万年前に形成され、河岸段丘上位に当たる。両遺跡周辺は、唐瀬原、新田原、茶臼原などの洪積台地と同じ成因のものである。

#### 2 歴史的環境

都農町に所在する両遺跡周辺には、遺跡詳細分布調査によって多くの遺跡が周知されているが、発掘調査による詳細な遺跡の解明はほとんど行われていない。

旧石器時代の遺跡は、いずれも表探であるが、尖頭器・石核が出土した黒萩遺跡、剥片が出土した京塚遺跡（第1図4）、又猪野原遺跡の存在が知られている。

縄文時代になると、遺跡は標高20m以上の高地にあり、開析谷によって形成された河川やその支流に近い台地上に所在している。そのほとんどが縄文時代早期に帰属する。

竜ヶ平第1遺跡（第1図13）は、大師山から南東に延びる丘陵とその延長にある標高約94mの台地上に所在し、朝草原遺跡（第1図8）や尾立第3遺跡（第1図10）にも近接している。打製石器や押型文、貝没文、条痕文、縄文、網目撲糸などの文様をつけた土器で、多くの縄文時代早期の遺物が出土

している。舟川中原遺跡は、都農町の北部、尾鉢山麓の一角にあり、標高約85～90mの東へならかに延びる小さな舌状台地上に広がっている。都農町教育委員会によって確認調査が行われており、縄文時代早期の石器、押型文（山形文・楕円文）土器、縄文土器、竹管文土器、無文土器などが出土している。

黒石遺跡（第1図5）は都農町の中央に位置する牧内台地の南麓にあり、そのまま南に緩やかに傾斜する標高約55～58mの丘陵地にある。縄文時代早期の集石遺構3基とともに、打製石器、磨石、石器や押型文、貝殻文、条痕文、櫛描文土器が出土している。

白水遺跡は、牧内台地の南端の標高約160mにあり、黒石遺跡のほぼ真北にある遺跡である。縄文時代早期の集石遺構が7基検出され、押型文、条痕文、無文土器が出土した。

新別府川原遺跡は都農町の南部にあり、名門川の左岸に広がる標高約57mの河畔段丘の南端にある。縄文時代後期の竪穴住居跡が1軒検出され、塞ノ土器が出土している。

弥生時代になると遺跡数も数多く確認されている。発掘調査が行われているのは境ヶ谷第1遺跡（第1図3）、新別府下原遺跡（第1図14）、森遺跡（第1図7）、白水遺跡（第1図2）の4遺跡である。4～5mほどの方形プランの住居跡が白水遺跡を除いて検出されている。

境ヶ谷第1遺跡は、竪穴住居跡2軒と多数の土器が出土した。住居跡の規模は4～5m程度である。遺物は、壺形、甕形、鉢形、高環形の土器、磨石、石錐等が出土している。遺跡の編年時期は弥生時代後期後半とされる。

新別府下原遺跡は、竪穴住居跡が7軒、土坑5基、周溝状遺構3基が検出された。遺物は、磨製石庖丁、両端抉り入り石庖丁、砥石、磨石、鉄鎌片、壺形、甕形、高環形、鉢形土器が出土している。

新別府下原遺跡は弥生時代後期末から古墳時代初期にかけて営まれた集落跡であるが、調査区外から弥生時代中期の竪穴住居跡が5軒、試掘によって確認されていることから遺跡の範囲はさらに広がるものと考えられる。

森遺跡は、時期不明の竪穴住居跡2軒と瀬戸内系の高环の脚部が2点、壺形土器、磨製石錐、砥石がそれぞれ1点ずつ出土している。白水遺跡は、遺構は確認されていない。弥生時代後期と思われる小形の甕形土器などが數十点出土している。

いくつか弥生時代から古墳時代にかけて集落遺跡が存在し、人の生活・活動なども分かるものの、集落規模は通常的に小規模である。

都農町内には海岸部を中心に12基の県指定古墳がある。前方後円墳2基、円墳10基で全て積石塚である。内部主体や副葬品などは不明であるが、積石塚は県内では珍しく、都農町に集中して築造される。この他に、新別府川原、木戸平、舟川中原に円墳が1基ずつ見られる。

古代以降の遺跡はまだ都農町内では確認されていない。しかし、日向国は昔から馬の名産地として知られ、「日本書紀」にも日向の駒を称える記述がある。宮崎県は鉄製品の出土数が全国的に多く、古墳時代後期以降、特に馬具の出土が目立つ。「延喜式」には馬牧の「都濃野」の記述があり、これは正しく都農を示しているだろう。今後の調査により、都農町内から馬牧の存在が確認され、宮崎県における古代馬生産の実態が明らかにされることを期待する。

都農町内における本格的な東九州自動車道関連の発掘調査は、平成17年度から始まったばかりで、朝原遺跡、尾立第3遺跡のほかに、朝倉遺跡（第1図9）、立野第2遺跡（第1図12）、立野第5遺跡（第1図13）の発掘調査が行われた。特に朝倉遺跡は、本報告の朝原遺跡・尾立第3遺跡に挟まれて隣接し、両遺跡と密接に関わる可能性がある。A T下位層から縄文時代早期までの連続した遺構や遺物が良好な状態で多数確認されている。その他、弥生時代後期の甕が廃棄されたと思われる土坑、近世の石組遺構などが検出されており、都農町の通史的な様相を知る上で今後重要な遺跡となるだろう。

立野第2遺跡では、狭小の調査面積の中に15基ほどの集石遺構が、縄文時代早期の無文土器や貝殻文土器とともに見つかっている。

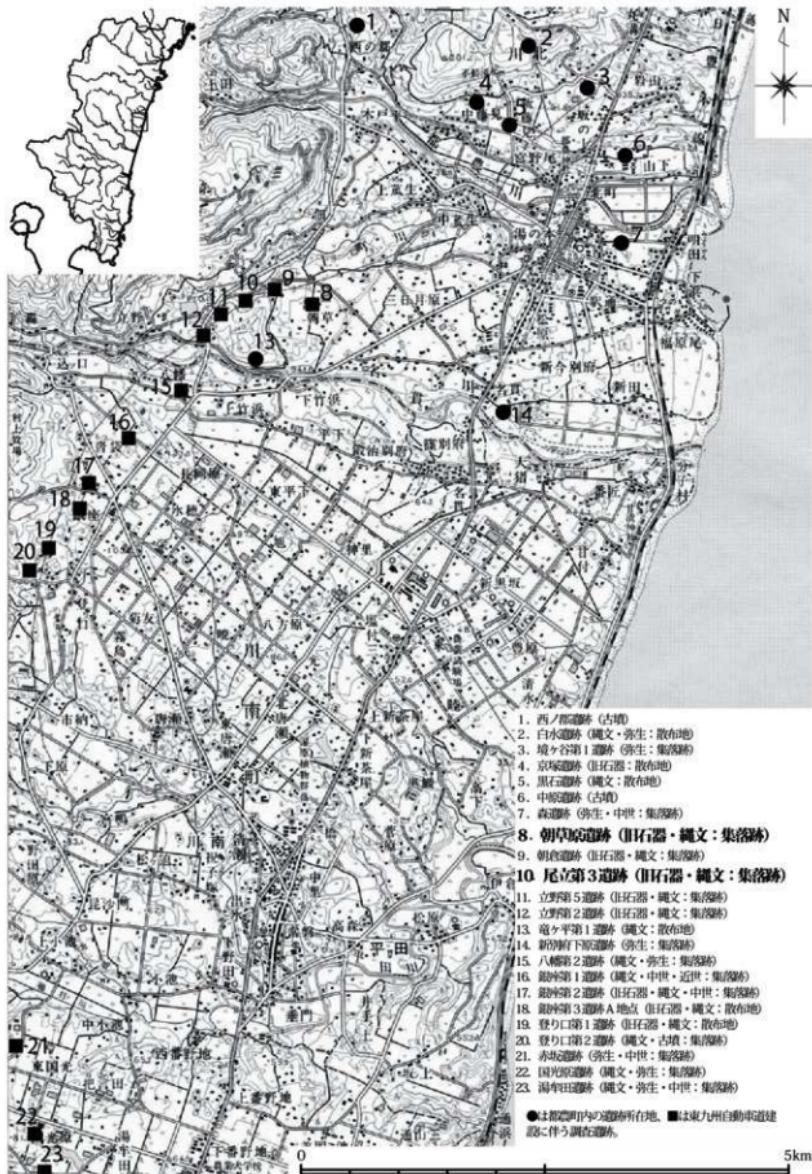
立野第5遺跡は、立野第2遺跡に隣接しており、急斜面地に立地する遺跡のため層位的に安定してい

ない箇所も見られるが、朝倉遺跡と同様に A T 下位層からも遺物が出土している。

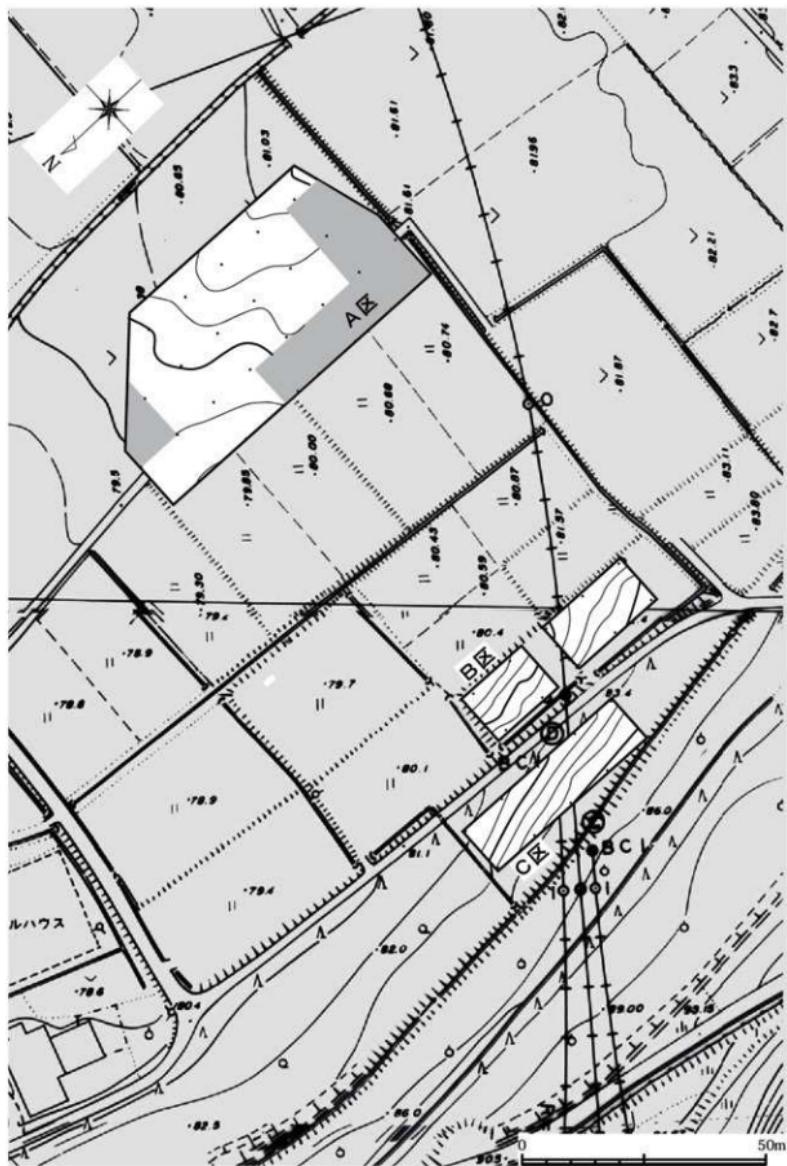
都農町では分布調査や表探資料によって、旧石器時代の存在は確認されていたが、包含層から AT 下位層の遺構・遺物が確認されたのは朝倉遺跡と立野第5遺跡が初めてであり、今後、都農町のみならず宮崎県域の旧石器時代研究に大きな影響を与えることになるであろう。

#### 【参考文献】

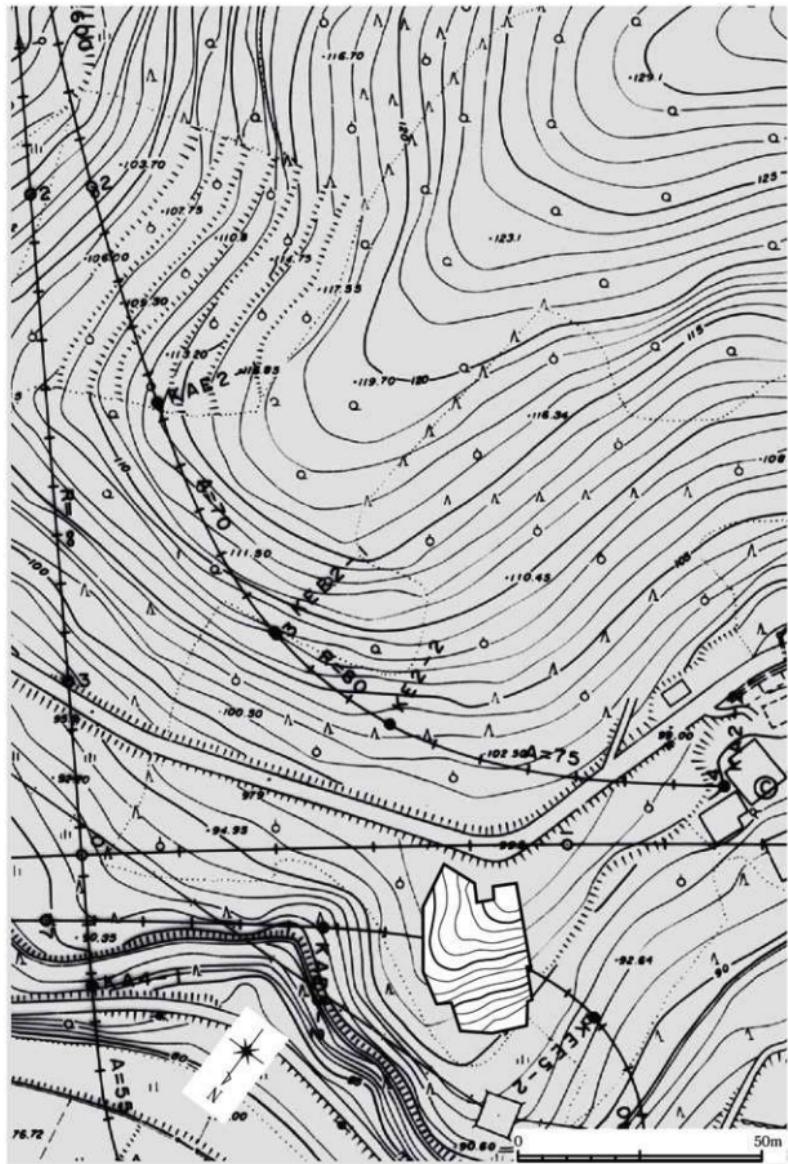
- 都農町 1998 『都農町史』通史編  
長津宗重 / 編 1989 『新別府下原遺跡』都農町教育委員会  
長津宗重 / 編 1990 『新別府下原遺跡』都農町教育委員会  
宮崎県都農町 1983 『国土利用計画(都農町計画)』  
宮崎県埋蔵文化センター 2006 『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書VI』  
吉永真也 1992 『黒石遺跡』都農町教育委員会  
吉永真也 1993 『森遺跡』都農町教育委員会



第1図 朝原原・尾立第3遺跡周辺遺跡分布図 (S = 1/50,000)



第2図 朝草原跡周辺地形図 (S = 1/1,000)



第3図 尾立第3遺跡周辺地形図 (S = 1/1,000)

## 第Ⅱ章 朝草原遺跡の調査

### 第1節 調査の経過と方法

#### 1 確認調査の概要

朝草原遺跡の本調査に先立ち、調査対象総面積12,600m<sup>2</sup>のうち調査区東側の8,900m<sup>2</sup>を平成17年2月14日から平成17年3月17日まで、調査区西側の3,700m<sup>2</sup>を平成17年6月1日から7月27日までの2回に分けて確認調査を行った（第5図）。

一次確認調査では、8,900m<sup>2</sup>に対して15箇所のトレンチ（900m<sup>2</sup>）を設定し調査を行った。特に調査区の中央部は良好なKAhの堆積が見られる。東西とも中央部に向かって徐々にKAhの堆積が厚くなり、最大厚は表土から104cmの深さに位置する。T 13からT 15のトレンチはKAh層辺りから湧水する。T 3からT 5からも湧水し、T 5・T 6辺りが最もKAhの堆積も厚く、検出したレベルも低かったため、かつて調査区中央には緩やかな谷部があったと推定される。小礫や巨礫は確認することができたが、遺構、遺物は確認できなかったため、本調査対象区からは除外した。

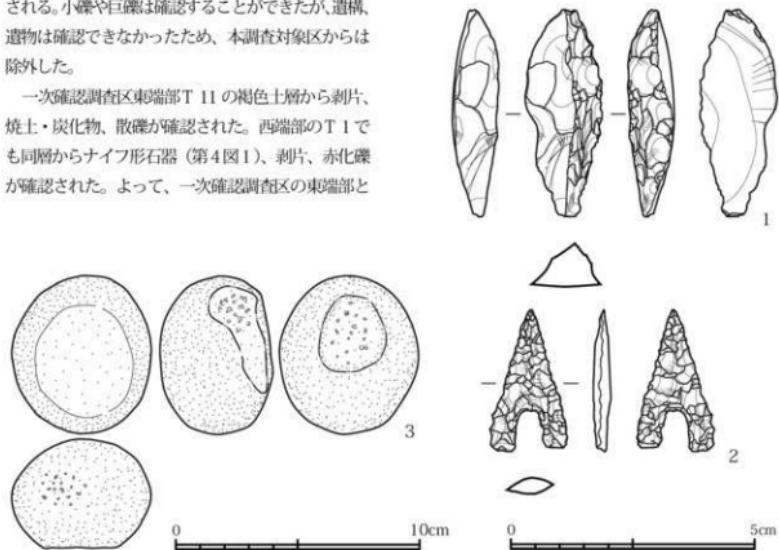
一次確認調査区東端部T 11の褐色土層から剥片、焼土・炭化物、散礫が確認された。西端部のT 1でも同層からナイフ形石器（第4図1）、剥片、赤化礫が確認された。よって、一次確認調査区の東端部と

西端部の計3,500m<sup>2</sup>を本調査対象区とした。

二次確認調査では、3,700m<sup>2</sup>に対して15箇所のトレンチ（235m<sup>2</sup>）を設定し調査を行った。傾斜地に立地しているが、削平により階段状に3段の平坦面で形成されている。

比較的大きなトレンチをそれぞれ各段に3本ずつ設定し調査を行ったところ、下段部のT 3でKAh下層の暗褐色土層から1基の集石遺構が検出され、石錐（第4図2）、黒曜石の碎片、敲石（第4図3）、剥片が出土した。上段、中段のトレンチからは遺構・遺物とも確認されず、後世の攪乱により土層も良好でなかったため、本調査対象区から除外した。よって、下段のみの930m<sup>2</sup>の調査が決定した。

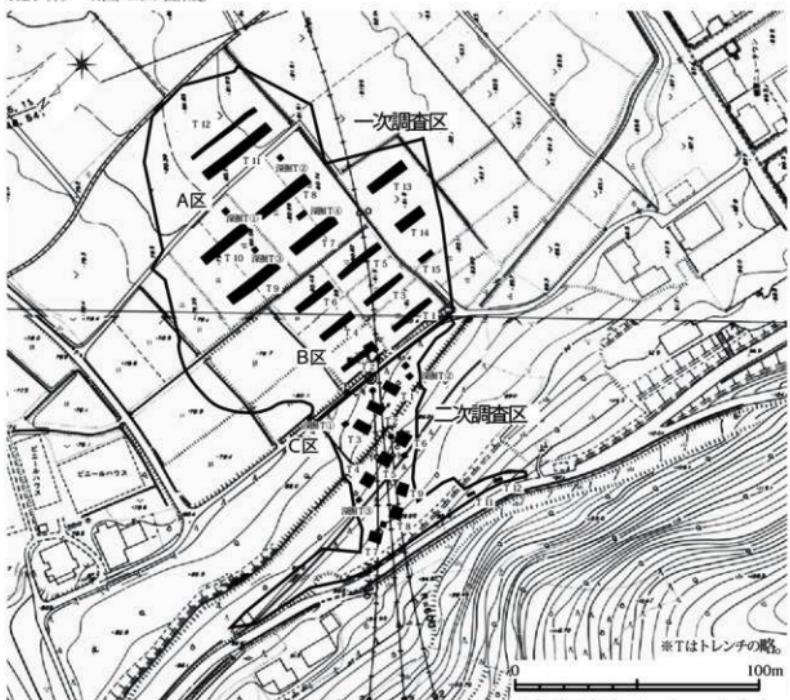
以上、2回の確認調査の結果をもとに4,430m<sup>2</sup>の面積の本調査を行った。



第4図 確認調査出土遺物実測図（S = 1/1, 3はS = 1/2）

### 調査日誌抄 (平成 17 年)

9.15 (木)	現場事務所・駐車場の整地。	11.25 (金)	A区、重機による埋め戻し。 B区・C区グリッド坑の確認。
9.16 (金)	現場事務所・作業員休憩棟などの設営。		C区、調査開始。集石遺構 1 基検出。(確認調査時に 1 基検出しており、合計 2 基となる。)
(9.20 (火) から 10.26 (水) まで)立第3道跡調査中。		11.28 (月)	C区で船島産墨曜石の打製石遺出土。
9.26 (月)	A区、重機による表土剥離開始。	11.29 (火)	集石遺構の写真撮影、実測。
10.11 (火)	人力で表土を精査。 グリッド坑の設定。	12.1 (木)	貝殻多層の無文土器出土。
10.26 (水)	A区 25% 調査。縄文時代早期の無文土器片出土。	12.2 (金)	集石遺構の検出。
10.28 (金)	土坑 1 基検出。周辺から土器片が出土。		B区、人力による表土精査開始。削平が著しく、AT とブラックバンドが混ざり合ったような層が見える。非常に固い。
11.1 (火)	石器、碎片の集中区を検出。	12.7 (水)	礫碎地層。
11.2 (水)	土器片の中出土区が 3 領所となる。	12.8 (木)	B区南側半分はブラックバンドを掘り下さったところ(100%)で、調査終了。剥片が数点出土。北側より断面検出。
11.4 (金)	焼土を含んだ土坑を検出。		写真撮影、実測。トータルステーションによる遺物取り上げ。
11.10 (木)	調査指導委員による調査指導。	12.14 (水)	B区・C区、空中撮影。
11.14 (月)	遺物が全く出土しないグリッドを除外し、100% 調査開始。	12.19 (月)	コンタ図と遺物取り上げ。
11.15 (火)	土器片の出土が広がるため、調査区内にある農道を一時封鎖して調査。	12.20 (火)	C区、土層断面図作成。
11.16 (水)	焼土を含んだ土坑を検出。	12.21 (水)	作業員調査最終日。機材の搬出。
11.17 (木)	遺物の写真撮影、実測、土層断面を記録。		現場勘定戻し。
11.18 (金)	トータルステーションによる遺物取り上げ。	12.22 (木)	現地調査終了。撤収。
11.21 (月)	C区、重機による表土剥ぎ。		
11.22 (火)	A区、空洞部。		
	B区、重機による表土剥ぎ。		
11.24 (木)	A区、コンタ図作成。		



第5図 確認調査トレーンチ配置図 (S = 1/2,000)

## 2 発掘調査の方法

朝草原遺跡は、大師山の東側山裾とそこから広がる台地に立地する遺跡である。確認調査の結果、本来の遺跡範囲の中央部分が谷になっており、本調査対象範囲からははずれたため、便宜上調査区を東からA・B・C区の3区に区分しA区から順に調査を開始した(第6図)。

本調査にあたり、重機で表土・耕作土を除去した後、国土座標を基準に10m間隔の大グリッドを西から東にA～P、北から南に1～9と設定した。その後、大グリッドを5m×5mで4分割し、グリッド内の北西を小グリッド1、北東を小グリッド2、南西を小グリッド3、南東を小グリッド4と名称した。

A区の調査では、まず小グリッド1である大グリッドの1/4を掘り下げ(以下「25%調査」という)、遺構・遺物が確認されれば、2/4(50%調査)、3/4(75%調査)、4/4(100%調査)と広げていった。

B区、C区の調査も同様に小グリッド1を先行して調査していく、徐々に50%調査、100%調査へと進行していった。

## 3 整理作業及び報告書作成

整理作業は平成17年12月から開始し、平成18年10月に終了している。遺物の整理については本センターにて、礫の整理については川南整理作業棟にて行った。礫は計測と接合を行った。

整理作業に時間的余裕を見つけられたので、朝草原遺跡と尾立第3遺跡から出土した石器類の遺跡間接合を試みた。期待した結果を得ることはできなかつたが、朝草原遺跡から表探した剥片と尾立第3遺跡の遺物包含層から出土した剥片が接合するというものが3個体得られた。これについては、第IV章で若干述べる。

報告書作成にあたっては、本年度より本センターで取り組むデジタル入稿の方法をとった。使用OSはwindows2000professionalである。

遺物・遺構平面図等のトレースについては株式会社アイシン精機の『遺構くん』と、Adobe社のIllustratorを使用し、eps形式で保存、レイアウトを

行うという形をとっている。拓本等の画像の編集にはAdobe社のPhotoshopを用いた。編集・レイアウトについてはAdobe社のInDesignを用いた。入稿に際してはInDesign形式での入稿を行っている。

写真については従来どおりフィルムで撮影を行い、版下による入稿を行った。

## 第2節 層序

A区は本来、谷地形であったところを耕作地に改変しているため、現在は平地であるが掘り下げていくにつれ、調査区中央に向かって落ち込み、それぞれの堆積層が厚くなる(図版3:A区K3グリッド土壌断面写真参照)。A区の東側では、一部小林軽石が含まれると想われる層が堆積する。上層は大幅な削平を受けており、表土を除去すると本遺跡基本層序の第IV層である黒褐色土層から始まる。

B区は、大幅な削平により一部第VI層が見られる部分もあるが、第IX層や第X層から始まるところが大部分のため、土層の記述は缺れなかった(図版4:B区北壁土壌断面写真参照)。

C区は耕作地ではあるが土層の堆積状況が最もよく、本遺跡の層序の基礎となる。東九州自動車道基本層序のML1に相当する層が3層に分かれている。

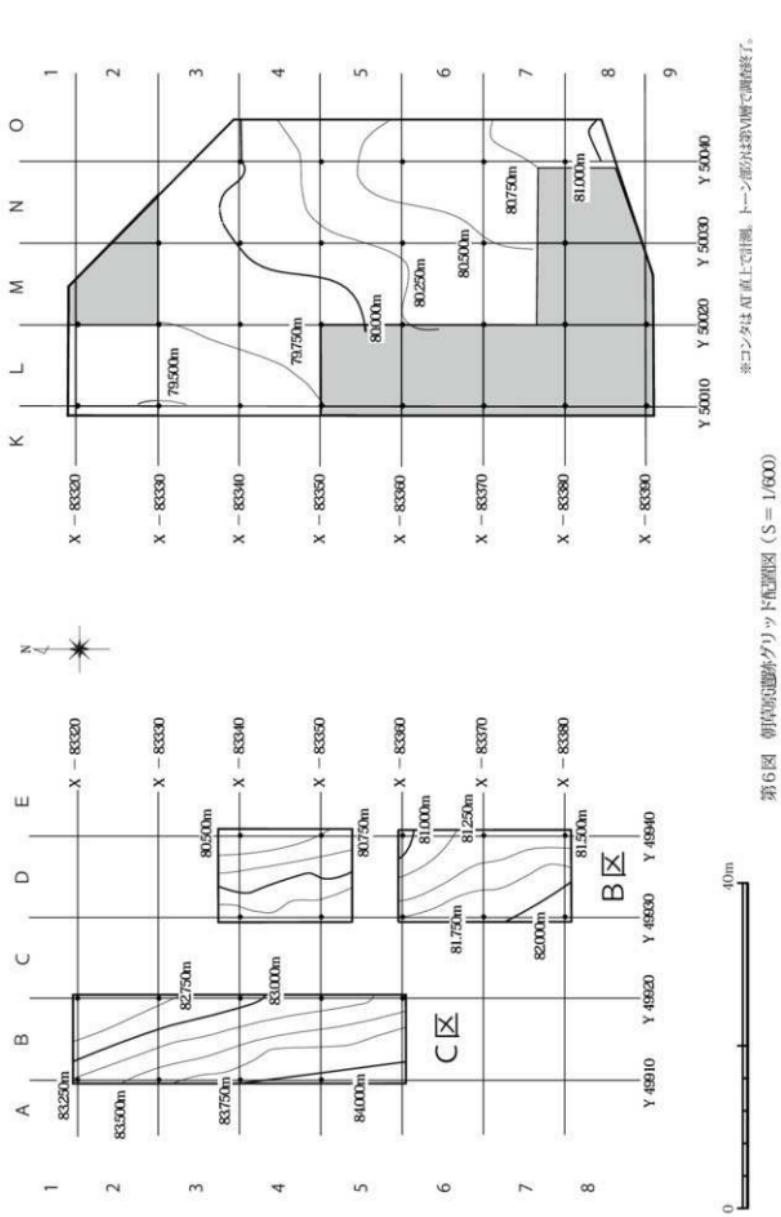
本遺跡における基本層序は以下に示すとおりであるが、東九州自動車道(都農～西都原)の調査においては基本的に認められるテフラやローム層、黒色土帯について共通の略称を用いており、文中のMB0やML1などがこれにあたる。ただし、本遺跡が所在する都農町は宮崎県の県北にあたり、これまで共通認識として捉えられてきた東九州自動車道基本層序に多少そぐわない土層が確認され始めていることも事実である。

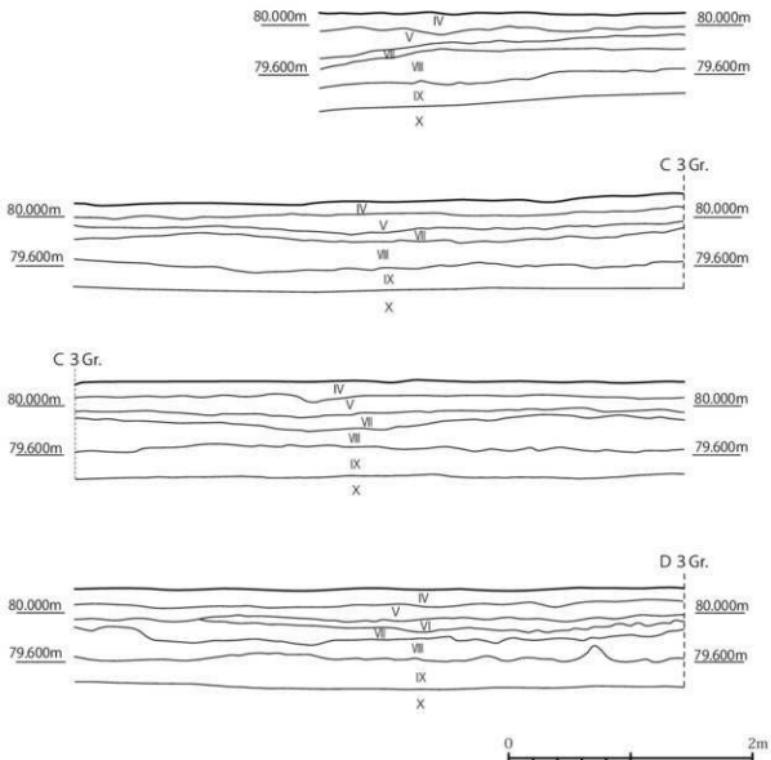
註)

1 宮崎県埋蔵文化財センターでは、東九州自動車道開通の遺跡調査に際して、新富・高鍋町域の発掘成果をもとに基本層序を作成し、遺跡間の共通理解を図っている。

- ①第Ⅰ層 表土（耕作土）
- ②第Ⅱ層 黒色土 (Hue25Y 2/1)  
クロボクに相当する。軟質土でしまりはない。粘性は強い。
- ③第Ⅲ層 鬼界アカホヤ火山灰 (KAh)  
(Hue10YR 黄褐色 5/8、Hue10YR 褐色 4/6、Hue10YR 暗褐色 3/3)  
2~3mmの白色、黄橙色の火山ガラス質を含む。硬質で粘性はない。
- ④第Ⅳ層 黒色土 (Hue10YR 2/1)  
1mm以下の細かい白粒子を含む。固くしまり、やや粘性がある。縦文時代早期の包含層。東九州自動車道基本層序のMBOに相当する。
- ⑤第V a層 黒褐色土 (Hue10YR 3/2)  
固くしまり、粘性が強い。東九州自動車道基本層序ML1の上部に相当する。
- ⑥第V b層 暗褐色土 (Hue10YR 3/3)  
固くしまり、第V a層よりもさらに粘性が強い。東九州自動車道基本層序のML1の中部に相当する。
- ⑦第VI層 褐色土 (Hue10YR 4/4)  
ややしまる。第V b層よりもさらに粘性の高い粘質土。東九州自動車道基本層序のML1の下部に相当する。
- ⑧第VII層 褐色土 (Hue10YR 4/4)  
粘性は高く、しまらない。斑点状にふい黄褐色土 (Hue10YR 5/4)と黒褐色土 (Hue10YR 2/3)を含み、黒褐色土の中に細かい白粒子を含む。Kr-Kbを含む層か。
- ⑨第VIII層 始良Tn (AT) 火山灰二次堆積  
(Hue10YR 褐色 4/4、Hue10YR 黄褐色 5/6)  
白色とオレンジの粒を多量に含む。固くしまり、ブロック状になる。C区は、⑨と⑩が混在しており分層不可能である。東九州自動車道基本層序のML2に相当する。
- ⑩第IX層 始良Tn (AT) 火山灰 (Hue10YR 黄褐色 5/6)
- ⑪第X層 暗褐色土 (Hue10YR 3/3)  
粘性が強い、固くしまり、クラックが発達している。東九州自動車道基本層序のMB2・MB3に相当する。
- ⑫第XI層 明褐色土 (Hue7.5YR 5/6)  
固くしまる。粘性が非常に強い。小石、赤褐色の礫を含む。
- ⑬第XII層 黄褐色土 (Hue10YR 5/8)  
粘性は第XI層よりはない。非常に固くしまる。シルト質で巨礫を多数含む。

	層序	土色	略称
①	I	表土・耕作土	
②	II	黑色土	
③	III	黄褐色土	K-Ah
④	IV	黑色土	MBO
⑤	V a	黑褐色土	ML1（上部）
⑥	V b	暗褐色土	ML1（中部）
⑦	VI	褐色土	ML1（下部）
⑧	VII	褐色土	Kr-Kb か
⑨	VIII	褐色土	ML2
⑩	IX	黄褐色土	AT
⑪	X	暗褐色土	MB2, MB3
⑫	XI	明褐色土	
⑬	XII	黄褐色土	





第IV層 黒褐色土 (Hue10YR 3/2)

固くしまり、粘性が強い。

第V層 喰褐色土 (Hue10YR 3/3)

固くしまり、第IV層よりもさらに粘性が強い。

第VI層 褐色土 (Hue10YR 4/4)

ややしまる。第V層よりもさらに粘性の高い粘質土。

第VII層 褐色土 (Hue10YR 4/4)

粘性は高く、しまらない。斑点状にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5/4) と黒褐色土 (Hue10YR 2/3) を含み、黒褐色土の中に細かい白粒子を含む。

Kr-Kb を含む層か。

第VII層 始良 Tn (AT) 火山灰二次堆積 (Hue10YR 褐色 4/4, Hue10YR 黄褐色 5/6)

白色とオレンジの粒を多量に含む。固くしまり、ブロック状になる。C 区は、⑨と⑩が混在しており分層不可能である。

第IX層 第X層 始良 Tn (AT) 火山灰 (Hue10YR 黄褐色 5/6)

暗褐色土 (Hue10YR 3/3) 粘性が強い。固くしまり、クラックが発達している。明褐色土 (Hue7.5YR 5/6) 固くしまる。粘性が非常に強い。小石、赤褐色の礫を含む。

第7図 A区土層断面図 (S = 1/40)

### 第3節 A区の調査記録

#### 1 概要

A区の調査対象面積は、2750m<sup>2</sup>である。耕作地であったため、現在は平坦に整地されているが、AT層まで掘り下げるとき東から西に向かって緩やかに傾斜している（第7図）。A区とB区の間の調査除外区となったところは湧水するので、当時は谷部であったことが推測される。土層断面は、B3グリッドの半分からD3グリッドまでの北側を記録した。東側では、一部小林軽石が含まれると思われる層が堆積する。後世の削平によりアカホヤ火山灰層も確認できず、表土を除去すると第IV層の暗褐色土層となる。そのため、表土中からは第8図のような石器が表採された。4は青色チャートの石礫未製品と思われる。また、6のような緑泥変岩製の磨製石礫の未製品や、図化していないが風倒木の搅乱中から古代の土師器片が出土しており、この地にも元は弥生時代以降の遺跡が存在していた可能性を指摘できる。

遺構・遺物の包含層である第IV層から第VI層までは20～25cm程の堆積しかなかったが、調査中の

所見から、層位的安定性は保たれていることが見受けられた。

A区では、3基の土坑と、106点の石器類（第9図）、5個体分の無文土器（第10図）が確認された。

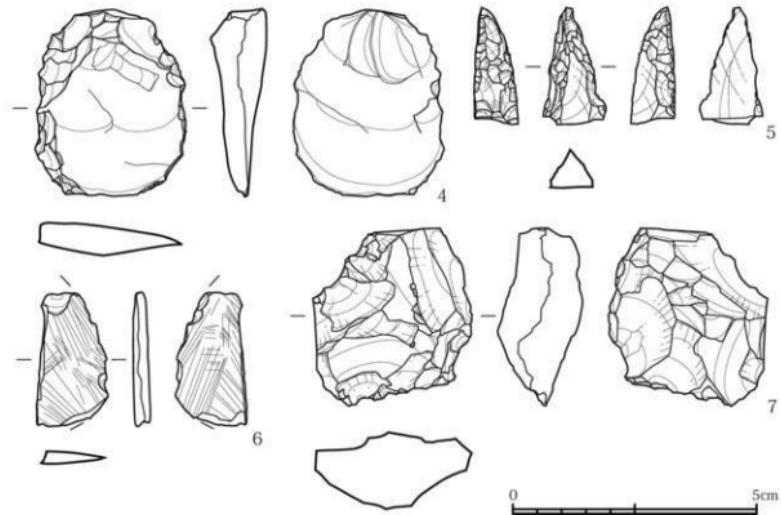
本節での報告は土層の上下関係を基準としているが、堆積層が薄いため、遺物の器種によっては同層から出土した遺物であっても、時期的に区分しているものもある。大別すると、第VI層～第V層出土遺物が旧石器時代終末期、第V層出土遺物が縄文時代草創期、第V層～第IV層出土遺物が縄文時代早期に相当すると思われる。

#### 2 旧石器時代終末期の遺物

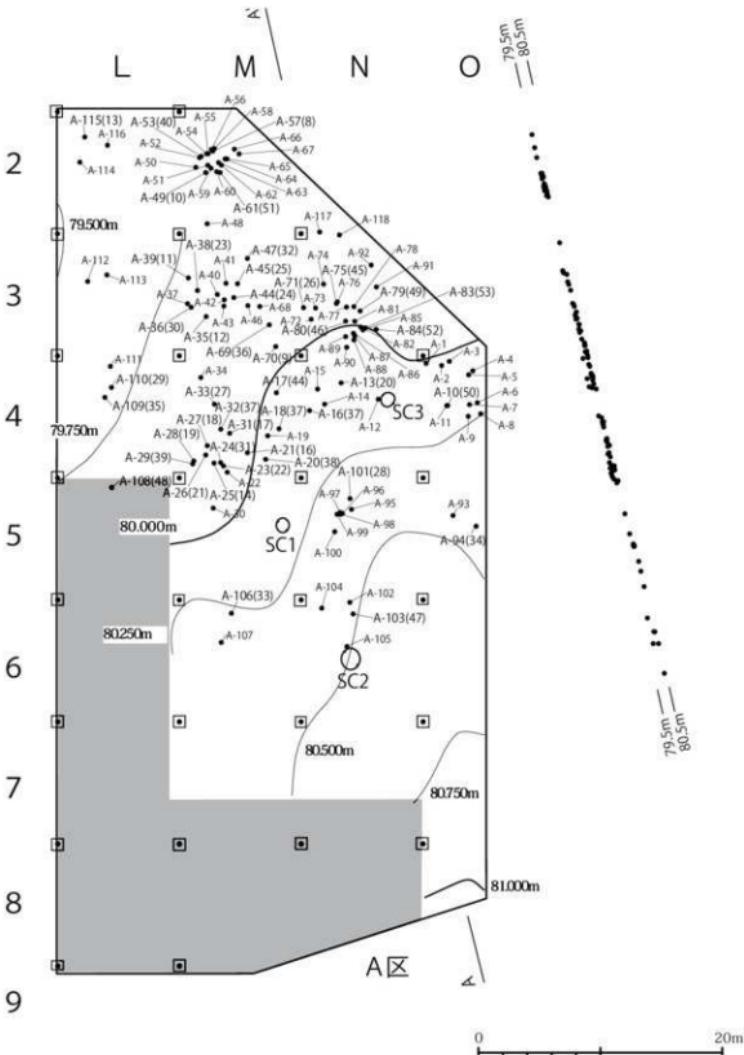
角錐状石器4点、ナイフ形石器2点、敲石2点などの製品が見られる。石材は、黒色流紋岩、灰色流紋岩、茶色流紋岩、白色流紋岩、黒色頁岩、ホルンフェルス、尾崎山酸性岩類である。

##### 角錐状石器（第11図8・9、第12図10・11）

先端部もしくは末端部のみの出土、未製品を含めて4点出土している。全て瀬戸内括法によって剥離された横長剣片素材から製作している。8は正面に



第8図 A区表採石器実測図 (S = 1/1)



第9図 A区遺構分布図及び石器出土分布図 (S = 1/400)

植物番号は調査時の取り上げ順。石炭測定表の「植物 No.」に対応する。括弧の数字はレイテ No. トーン部分は第VI層で調査終了。)

剥離面を残す黒色頁岩の角錐状石器である。10と11の石材は、同母岩と思われる黒色流紋岩である。

#### ナイフ形石器（第12図12・13）

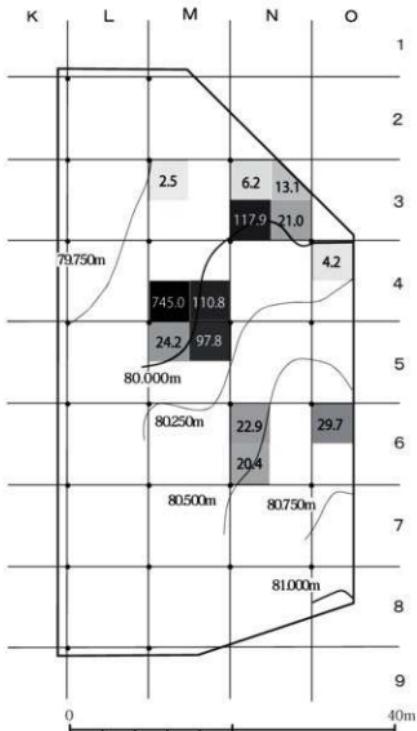
2点出土している。12は茶色流紋岩で製作されたいわゆる国府型ナイフである。

#### 敲石（第17図38・39）

尾鉢山酸性岩類と砂岩の敲石が2点出土した。38は、背面に打撃による亀裂が見られる。また、39の付近から台石が出土している。

#### その他の石器（第15図27、第16図28～37）

剥片、石核などが出土している。剥片は、ホルンフェルス、茶色流紋岩が多く、図化したものはいずれも縦長剥片素材である。



第10図 土器出土分布図 (S = 1/600)  
(数字はg単位)

石核も同様にホルンフェルス、黒色流紋岩の石材が見られる。

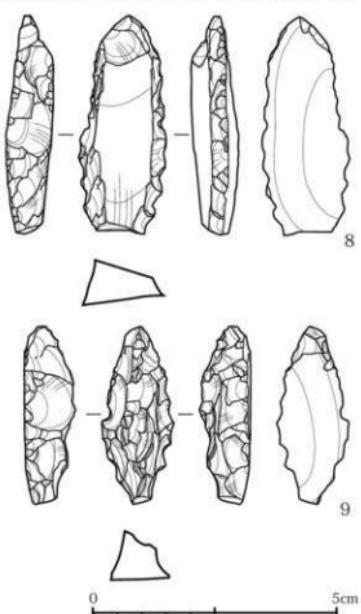
### 3 織文時代草創期の遺物

主に、細石刃生産に関連する資料が出土している。細石刃のほかに、細石刃核、敲石、二次加工剥片、剥片、石核、無文土器が出土している。

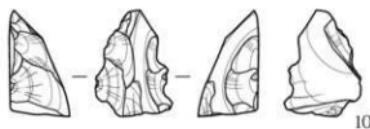
#### 細石刃核（第13図14・15、第14図18・19第14図20、第15図21）

全部で6点出土しており、そのほとんどがM4グリッドから出土した。全て、いわゆる船錨型細石刃核（14・15・18・19・20・21）と呼ばれる細石刃核が出土した。15は接合資料で、16と17に剥離して出土した。作業面を再生しようとして失敗したものと思われる。

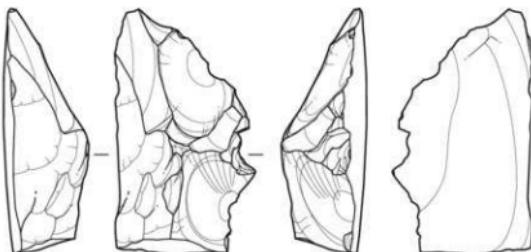
注目されるのは、石材によって細石刃採取後の形態に相違が見られることである。白色流紋岩を利用



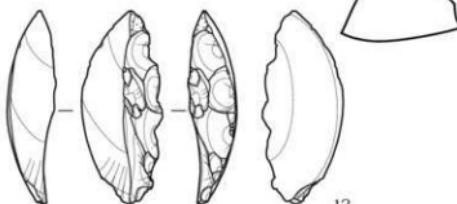
第11図 A区出土石器実測図(1)  
(S = 1/1)



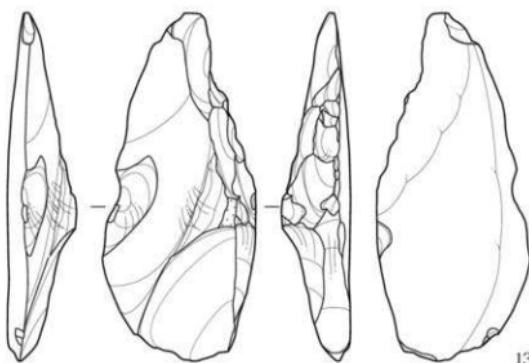
10



11



12

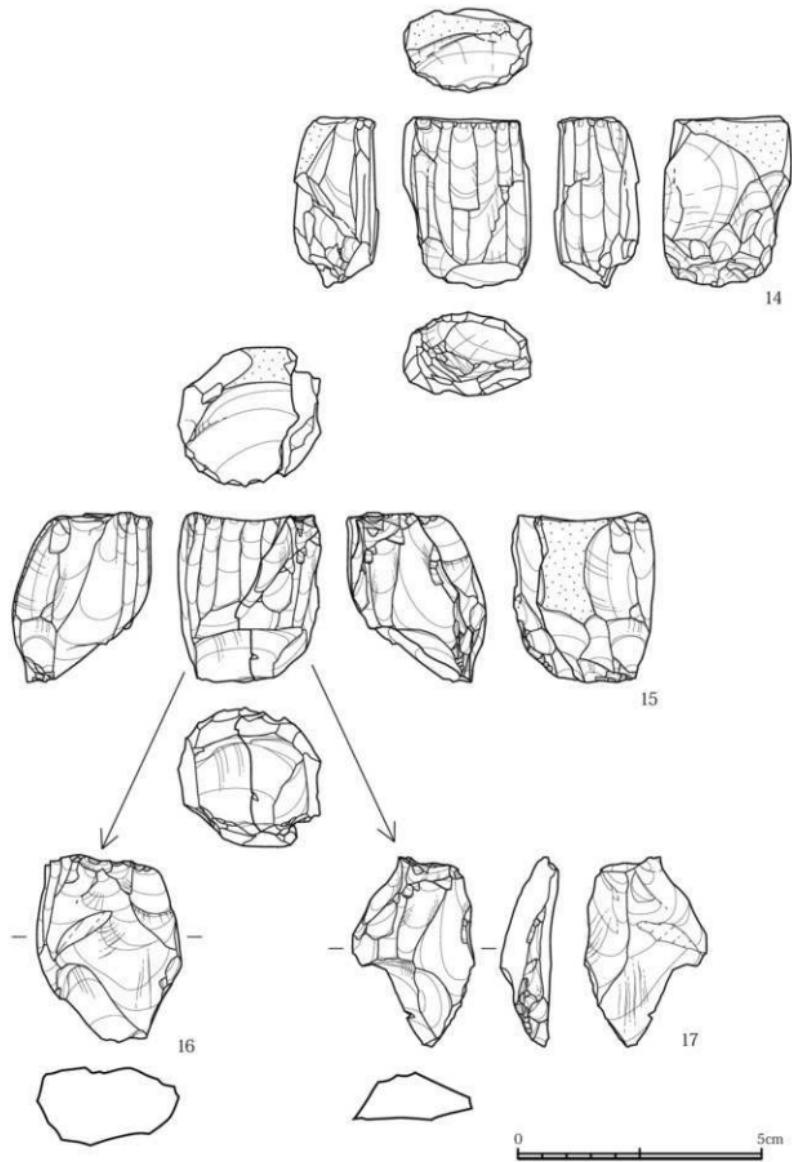


13

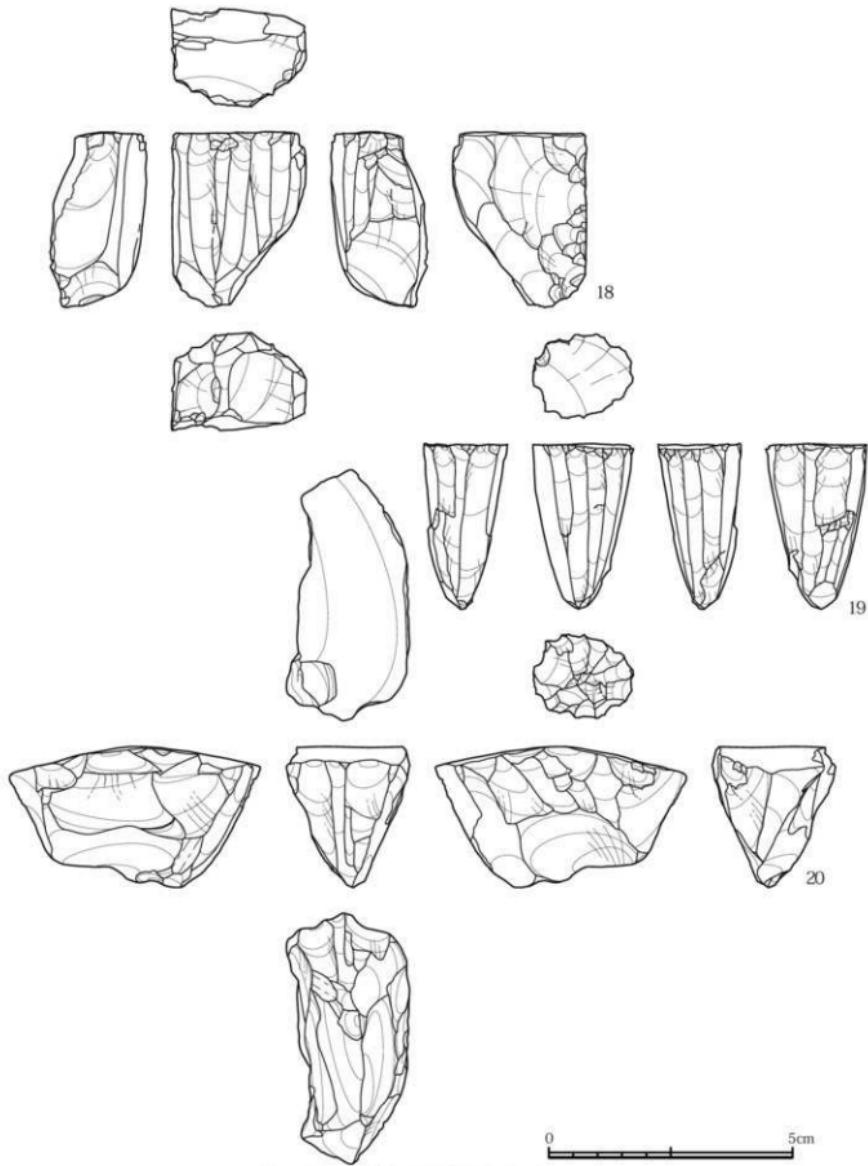


0 5cm

第12図 A区出土石器実測図(2) (S=1/1)

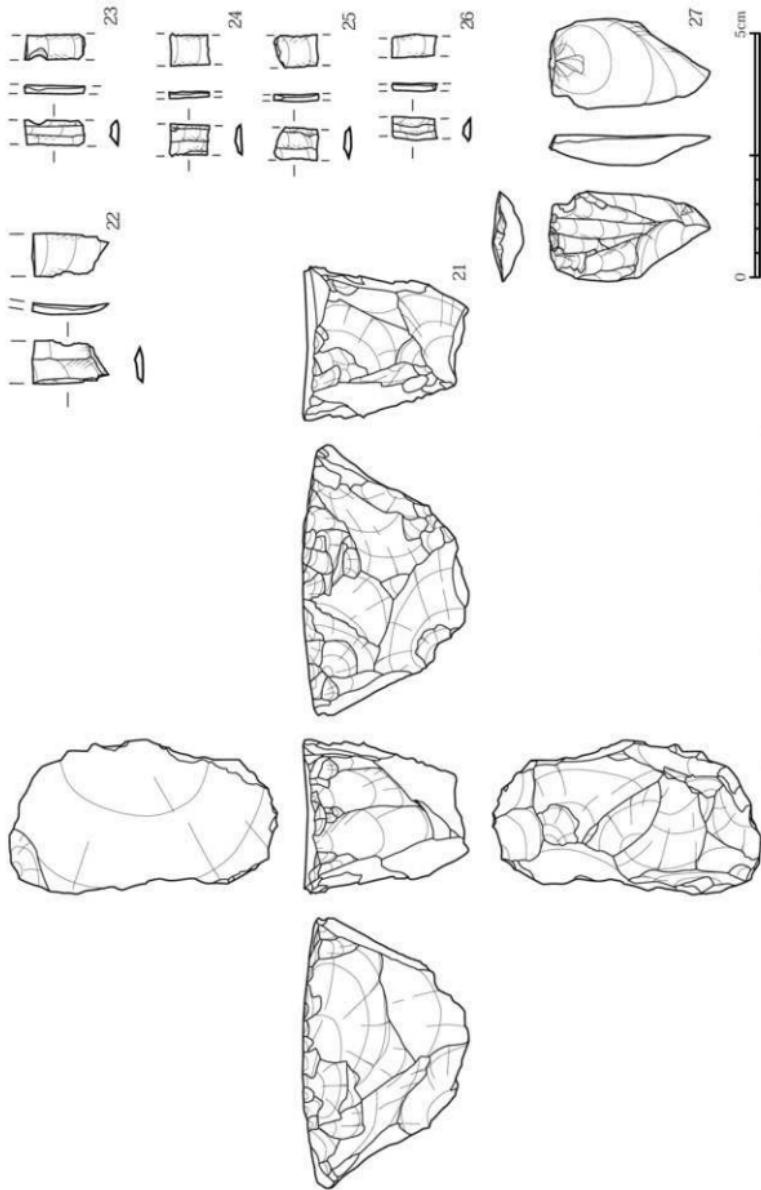


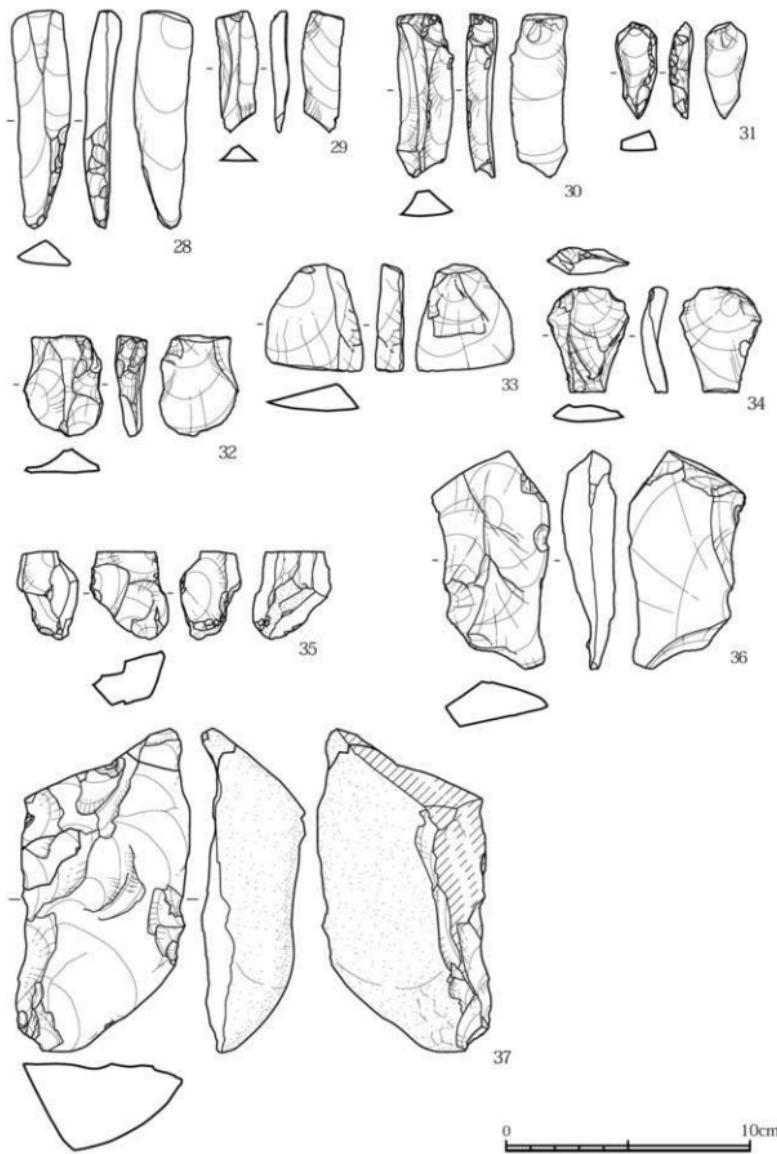
第13図 A区出土石器実測図(3) ( $S = 1/1$ )



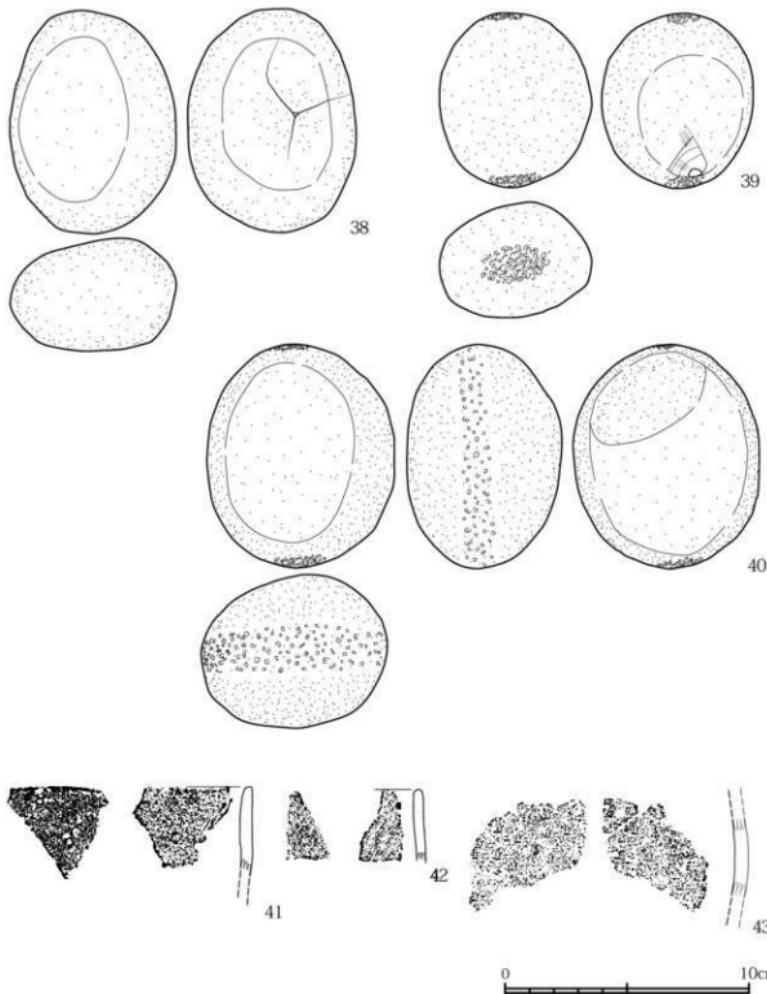
第14図 A区出土石器実測図(4) (S=1/1)

第15図 A区出土石器大要圖(5) (S=1/1)





第16図 A区出土石器実測図(6) (S = 1/2)



第17図 A区出土石器実測図(7)及び土器実測図(1) ( $S = 1/2$ )

した細石刃核は、前述した15のように作業面を再生してまで細石刃を製作しようとしているものや、19のように全面に渡って細石刃を探取し、打面が狭小な円形になるまで使用しているものがある。

一方、ホルンフェルスを利用した細石刃核(20・

21)は、いずれも一定の大きさを保ったまま出土した。出土状況に層位的差が見られないため、時期差を知ることはできないが、白色流紋岩はホルンフェルスよりも細石刃製作に好まれた石材であったのではないかということが想定できる。

### 細石刃（第15図22～26）

細石刃は5点出土しているが、細石刃核が集中して出土した地点から少し離れたM3グリッドからの出土が多い。また、石材も5点中3点が黒色流紋岩で、A区では細石刃核の出土がなかった石材である。

その他の石器（第15図27、第16図28～37、第17図38～40）

尾鉢山酸性岩類の敲石が1点出土している（40）。27は白色流紋岩の作業面再生剝片である。M4グリッドから出土している。ほかにM4グリッドから出土している白色流紋岩は、31の縦長剝片がある。

### 無文土器（第17図41～43）

縄文時代草創期から早期前半と思われる無文土器が、わずかではあるが出土している。N3-1グリッドから1点、N3-2グリッドから1点、N3-3グリッドから3点、M3-4グリッドから1点でいざれも第V層から出土している。そのうちの3点を図化した。

口縁部が厚さ0.4cm、胴部が厚さ0.55cmと極めて薄手の無文土器である。また、調整は内外面ともに丁寧な横方向のナデで、色調も明赤褐色（Hue5YR 5/6）と明るく、焼成も良好である。

### 4 縄文時代早期の遺物

主に出土したのは、打製石器5点と二次加工剝片、剥片、無文土器である（第18図）。

#### 打製石器（第18図44～49）

44は阿蘇象が卵産ガラス質溶結凝灰岩製の石器である。他は若干色調は異なるが全てチャート製の石器である。48は先端部のみの出土である。49はチャート製の打製石器未製品と思われる。

#### 剥片（第18図50～53）

50や51のようなチャート石材の小形の横長剝片と、大形の52、53のような剝片が出土しており、石材は砂岩である。

#### 無文土器（第19図54～60、第20図61～66）

無文土器の出土分布は大きく4つに分かれ。縄文時代早期の土器と思われるものは土器片が1cm程度のものが多く、接合も不可能なためほとんど図化できなかった。その中で、M4-3グリッドを

中心として出土した土器群が、唯一復元可能な土器片であった。その大半は第IV層から出土しており、確認できる個体数は2個体ある（第19図54～60と第20図61～65）。縄文時代草創期の無文土器と思われる土器の小片とは法量や色調が全く異なる。概ね厚さは、口縁部が0.6cm、胴部が0.7cm程度で、色調はにぶい黄橙色（Hue10YR 6/4）や橙色（Hue7.5YR 6/6）が多い。いずれも底部は尖底で、底部に厚みはない。縄文時代草創期の無文土器ほどではないが、丁寧な横方向のナデで、焼成も良好な薄手無文土器である。

他に、1cm程度の小片ばかりが出土し、図化できなかったが、N6-3グリッドを中心とした土器片群と、N3-3グリッドを中心とした土器片群がある。

1片のみだが、O6-1グリッドから内側に貝殻条痕を施す無文土器が出土している（66）。

### 5 時期不明の土坑

A区では、3基の土坑が検出された。検出面は第IV層もしくは第V層で、自然科学分析の結果や状況から判断する限り、縄文時代早期の遺構である可能性は高い。しかし、上面が削平され、土坑の底面のみが残っている状態で検出された。本遺跡では縄文時代早期以降の様相が全く分からなく、その有無も不明のため、帰属する時期は不明とする。

#### SC1（第21図）

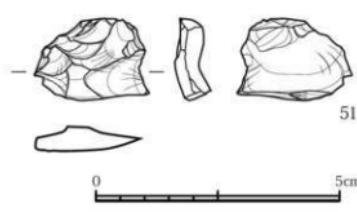
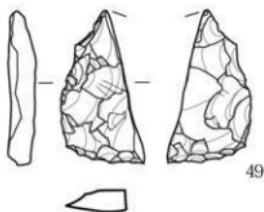
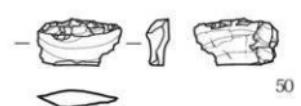
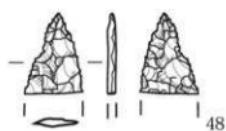
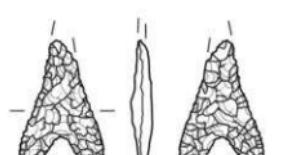
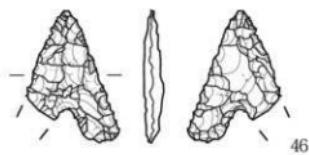
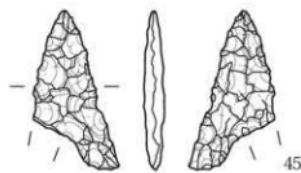
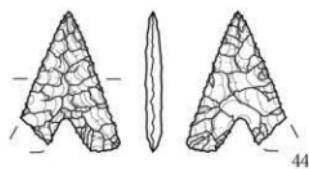
M5-2グリッドとM5-4グリッドの中央の第IV層から検出された。上面が削平されているため浅い土坑であるが、本来はもう少し深い土坑であったと思われる。断面を観察すると、焼土を掘き出したような痕跡があり、妙跡であると思われる。

#### SC2（第21図）

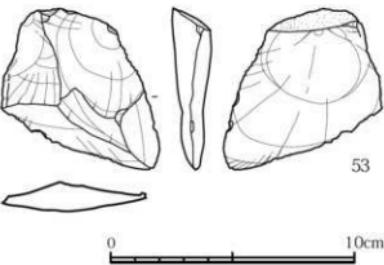
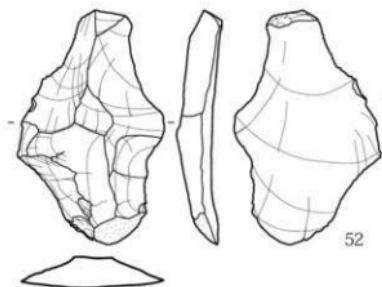
N6-1グリッドとN6-3グリッドの中央の第IV層から検出された。深さが1m程あり縦横軸は30cm程度。埋土中に焼土は確認できない。N6-3グリッドからは多数の縄文時代早期無文土器の小片が出土しており、何らかの関連性が考えられる。

#### SC3（第21図）

N4-2グリッドの第V層から検出された。SC1

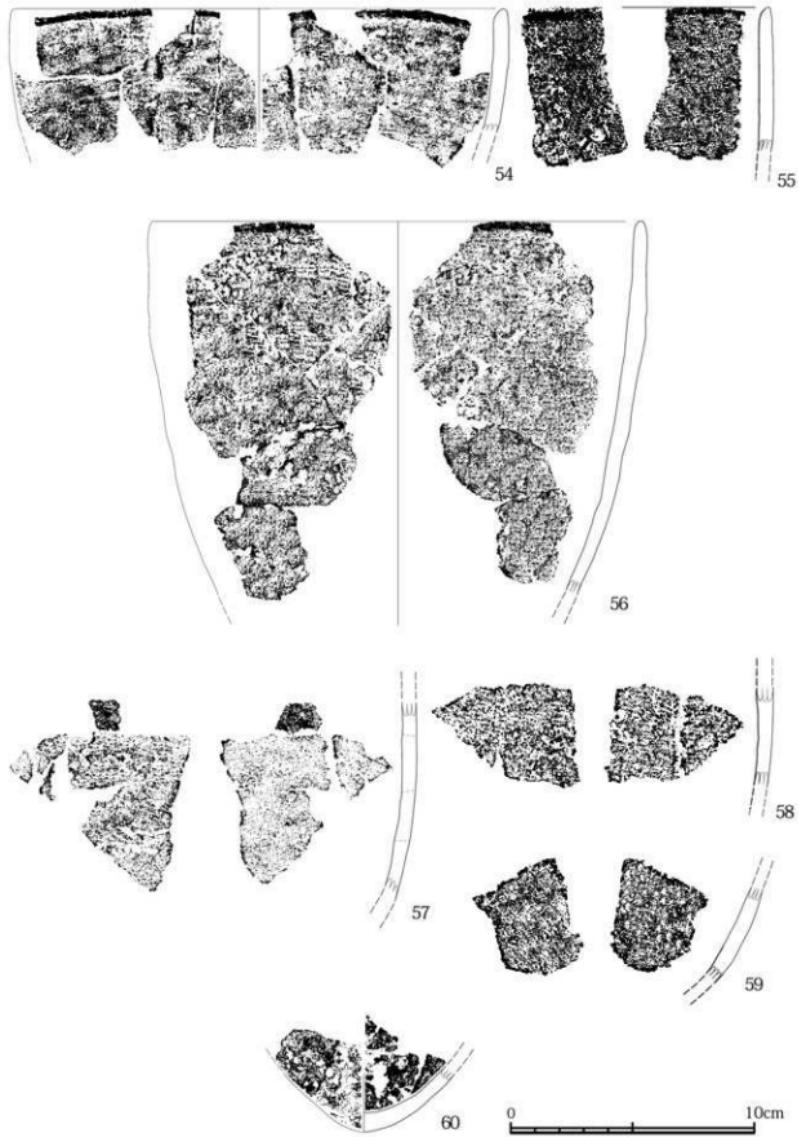


0 5cm

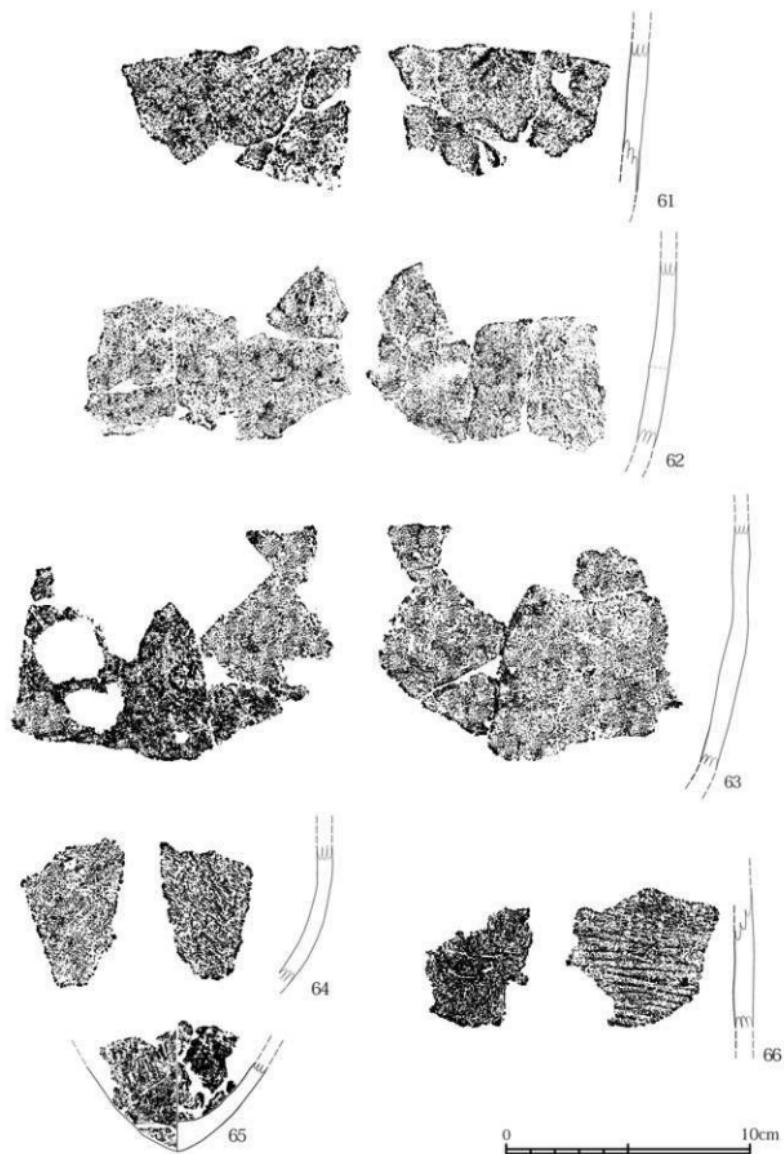


0 10cm

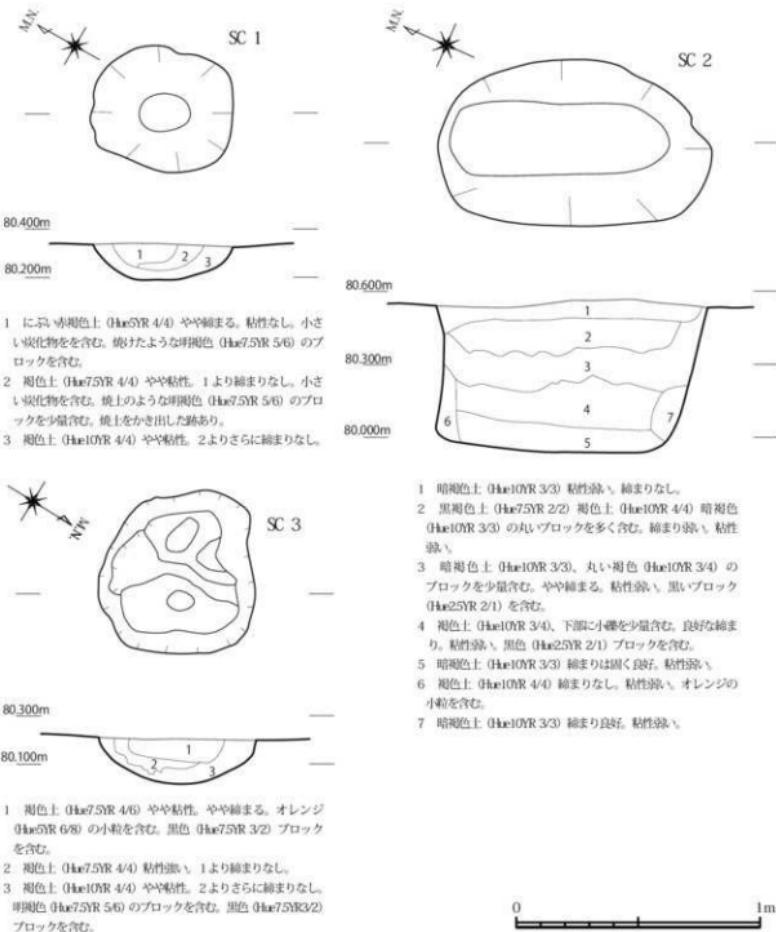
第18図 A区出土石器実測図(8) (S = 1/1, 52,53はS = 1/2)



第19図 A区出土器実測図(2) ( $S = 1/2$ )



第20図 A区出土器表略図(3) (S = 1/2)



第21図 A区検出土坑実測図 (S = 1/20)

の土坑と類似し、上面が削平されているために検出時は浅い土坑だが、本来はもう少し深い土坑であったと思われる。

埋土中から炭化物が検出されたため自然科学分析にかけてみたところ、出土した炭化物は木材ではないとの結果を得た。所見したところ動物の脂が炭化

したもののように見える。また、放射性炭素年代測定(AMS法)の結果、この炭化物から $8,530 \pm 50$ 年BP (BC7,590 ~ 7,550年)の年代値を得ている。

埋土中から焼土が確認でき、畑跡である可能性が高い。

## 第4節 B区の調査記録

### 1 概要

B区の調査対象面積は、750m<sup>2</sup>である。耕作地であったため、現在は平坦に整地されているが、重機で表土を除去したところ、西に向かって緩やかに傾斜しており、旧地形は、調査区C区から続く大師山の山脈であったと推測される。

姫島産黒曜石の石鎚（第22図67）が表探され、かつては縄文時代早期の遺構や遺物が存在したかも知れないが、相当大幅な削平を受けており詳細は不明である（図版4：B区北壁土層断面写真参照）。調査区の中央に大きな段差があり、北側の方がさらに下層まで削平されていた。表土を除去すると、調査区北側は、すでに第X層の暗褐色土が出現し、山裾のB区調査区東端側の方にからうじて始良Tn火山灰が残存している状況である。調査区南側は一段高く地形が残っていたおかげで、第VI層から確認できる箇所もあった。

確認された遺構・遺物の数も少なく（第23図）、また出土層位も不安定である。出土した遺物を観察する限り、決してAT下位層から出土し得ないものも見られ、出土層位を基準として遺構・遺物の帰属時期を決定することは困難である。

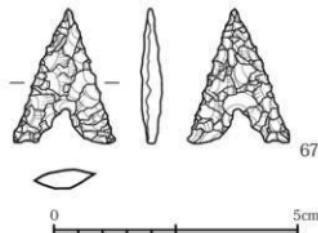
遺構・遺物の観察だけによると、遺跡の活動時期はA区と相違ないものと思われる。以下、簡単に検出した遺構・遺物について若干述べる。

### 2 旧石器時代終末期～縄文時代早期の遺構

礫群が2基検出された（第23図）。自然科学分析によって、約1万年前の遺構であるとの結果を得たが、出土層位がATとブラックバンドが混在する層なので、礫群として報告する。

#### SI 4（第24図）

調査区北端のD 3グリッドより検出された。掘り込みはない。礫群を構成する礫として、1m大的巨礫が含まれる。構成礫は巨礫を除いた個体数が127個となり、平均すると長さ6.7cm、幅5.0cmの礫である。石材は全て尾鈴山酸性岩類である。黒曜石の細石刃核（第25図69）や縦長剝片（第26図72）



第22図 B区表探石器実測図 (S = 1/1)

が礫群内から出土し、ホルンフェルス製の縦長剝片（第23図遺物No.B-19）が遺構の東側端から出土している。

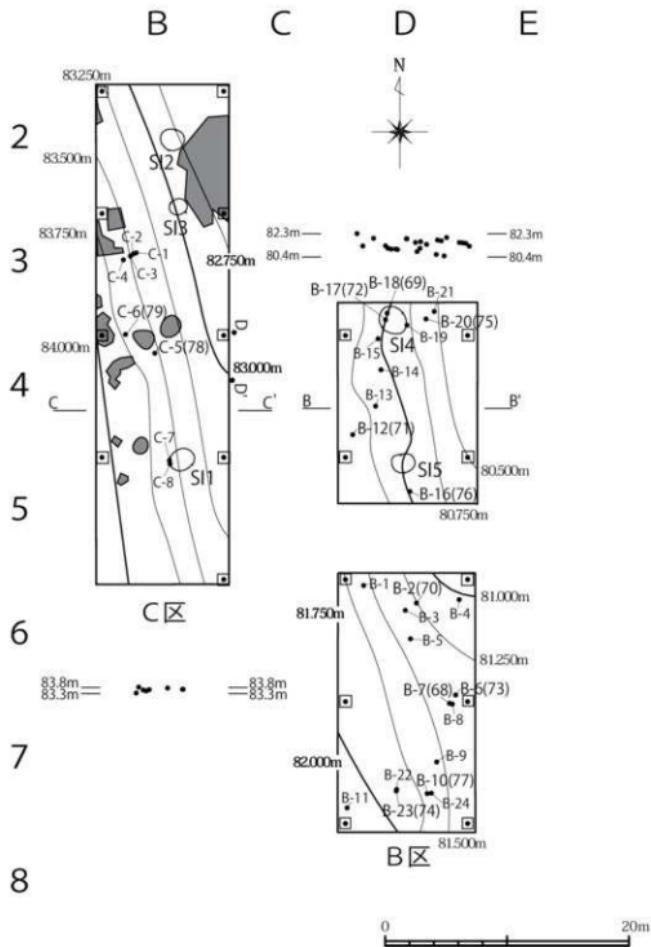
礫群内から炭化材が検出されたので、自然科学分析にかけてみたところ、北海道から九州までの広範囲に分布するコナラ属コナラ節の炭化材である樹種同定結果を得た。また、放射性炭素年代測定の結果、この炭化材は、10,620 ± 70年（BC10960 ~ 10,660, 10,530 ~ 10,410年）の年代値を得ている。

#### SI 5（第24図）

調査区中央のD 5グリッドより検出された。掘り込みはない。構成礫は個体数として22個で、その平均は、長さ9.3cm、幅6.9cmである。ただし、SI 5はその北側に散礫状に礫が広がっている。北側に広がる散礫は、耕作土の土が下に入り込んでいるため、原位置を保っていないが、元々はこれらの散礫の礫もSI 5を構成していた礫と思われる（図版5：SI 5北側散礫写真参照）。北側散礫の構成礫は個体数として113個で、平均の長さ9.1cm、幅6.6cmを計り、石材は全て尾鈴山酸性岩類である。

### 3 旧石器時代終末期～縄文時代早期の遺物

前述したように、B区調査区は層位的な遺物属性を検討するには困難な調査区である。出土した遺物の点数も24点の石器のみである。層位ではAT下位の第X層から、A区では見られなかった灰色に橙色の斑点の入るホルンフェルスの剥片が出土し、縄文時代早期で多く見受けられる石材の遺物が含まれる。そこで、本項では時代を問わず、出土した遺物の記述をする。



第23図 B区・C区遺構分布図及び遺物分布図 (S = 1/400)

(遺物番号は調査時の取り上げ順。石器調査表の「遺物No.」に対応する。括弧内がNo.トーン部分は掘出し

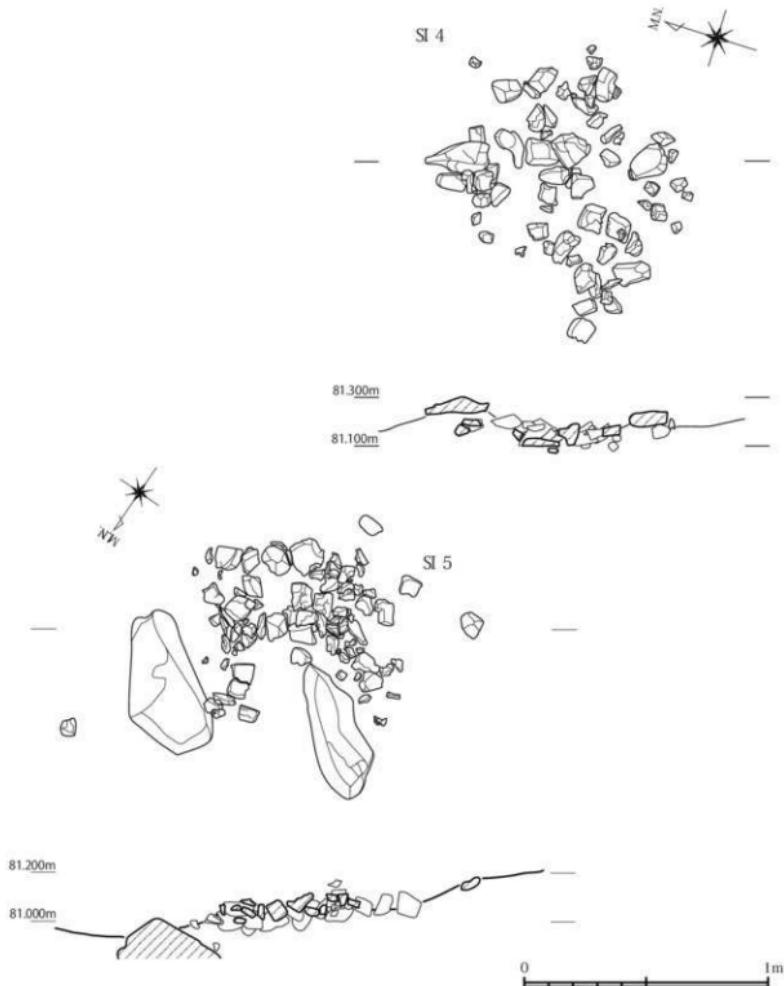
#### 角錐状石器（第25図68）

1点のみ確認できる。第23図の遺物番号B-7とB-8の石器が接合した状態のものである。長さ11.7cm、幅4.9cm、厚さ3.4cmのかなり大形な角錐状石器の未製品である。石材は赤茶色の縞模様が入

る白色流紋岩である。第VII層から出土している。

#### 細石刃核（第26図69、第27図70）

2点出土している。石材は黒曜石と、黑色流紋岩でいずれもA区では出土しなかった石材の細石刃核である。69は桑ノ木津留産黒曜石で、右側面に砾面



第24図 B区縄跡実測図 (S = 1/20)

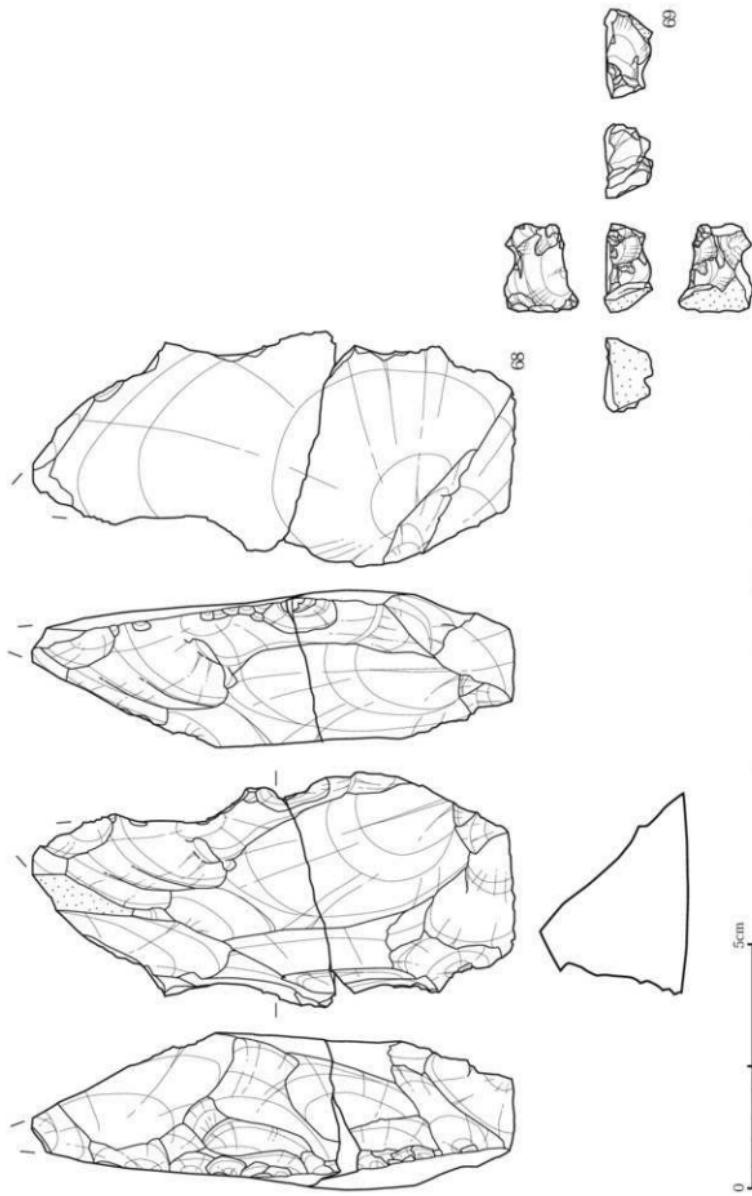
を残す。70は本遺跡で唯一出土した黒色流紋岩の船野型細石刃核である。黒色流紋岩の細石刃はA区で出土している。

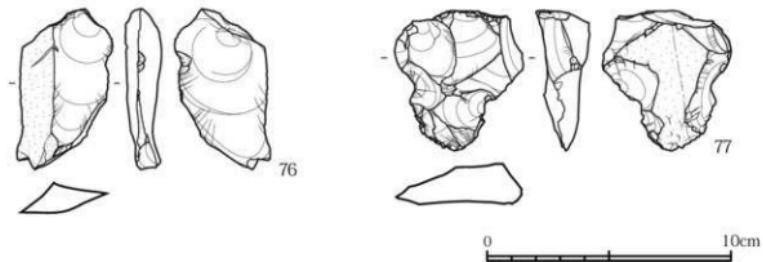
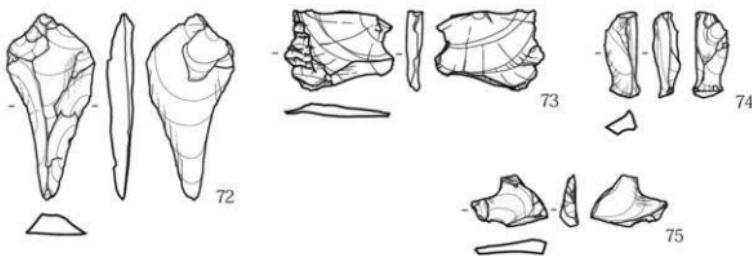
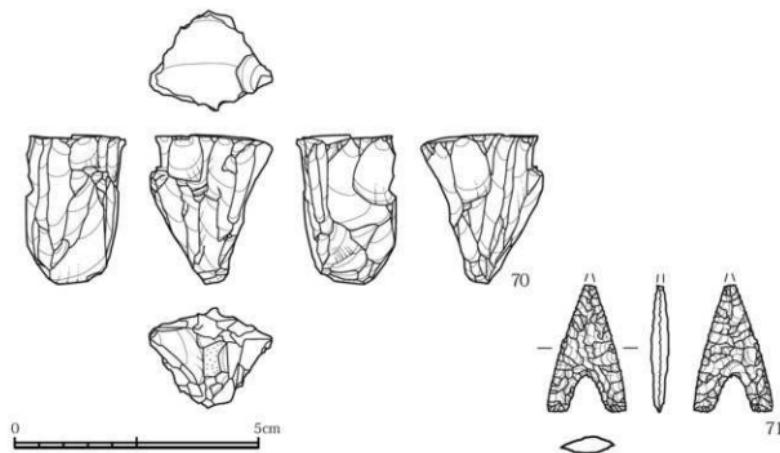
#### その他の石器(第26図72~77)

剥片や石核が出土した。帰属時期は不明である。

72は黒色流紋岩に白い斑点が無数に混在する流紋岩の縦長削片素材である。77は白色流紋岩の石核で背面に礫面を残す。

第25図 B区出土石器大要圖(1) (S=1/1)





第26図 B区出土石器実測図(2) (70,71はS=1/1、S=1/2)

## 第5節 C区の調査記録

### 1 概要

C区の調査対象面積は、930m<sup>2</sup>である。大師山の東側山裾に立地し、緩やかな傾斜をなす。現在も山裾としての地形を保っているため、傾斜地ではあるが層位は最も安定している（第27図）。ただし、所々大きな範囲で捲乱を受けている箇所はある。

確認調査の時点では、第X層からホルンフェルスの剥片が1点出土したが、本調査において第X層から遺物は出土しなかった。

C区調査区の遺構・遺物包含層は第IV層と第V層で集石遺構3基が検出され、石器2点、土器片6点が出土した（第23図）。遺構・遺物の帰属時期は縄文時代早期と捉えられる。

### 2 縄文時代早期の遺構

集石遺構が3基検出された。集石遺構が検出された標高は80.2mから80.6mに収まる。掘り込みのあるSI 1のみ調査区南側より離れて検出され、掘り込みのないSI 2とSI 3は調査区北側から近接して検出された。形態に差は見られるが、検出状況からほぼ同時期の遺構と考えてよい。

#### SI 1（第28図）

調査区の南側のB4グリッドとB5グリッドの間より検出された。礫の範囲は16m×10mで、構成礫は全て尾鈴山酸性岩類である。個体数として166個を数え、長さは1.3cmから23.8cm内、幅は0.9cmから17.3cm内の破碎礫を中心として構成される。総重量は47.159gである。深さ20cm程度の掘り込みがあり、礫を含む。埋土は黒褐色土（Hue10YR 2/3）で、固くしまり、粘性はない。

遺構の西側端から無文土器の小片が出土している。

#### SI 2（第28図）

調査区北側B2グリッドのSI 3の西側に隣接して検出された。礫の範囲は1.4m×0.8mで、密度度は低い。構成礫は全て尾鈴山酸性岩類である。個体数として44を数え、長さは2.2cmから22.4cm内、幅は1.7cmから14.9cm内の破碎礫を中心として構成

される。総重量は16.001gである。掘り込みではなく、比較的赤化した礫が多く見られる。

#### SI 3（第28図）

調査区北側B2グリッドからSI 2の東側に隣接して検出された。礫の範囲は12m×11mで、密度度は低い。傾斜に沿って東側に流れてしまっているような礫もある。構成礫は全て尾鈴山酸性岩類で構成される。個体数として、52個を数え、長さは1.2cmから13.9cm内、幅は1.2cmから10.3cm内の破碎礫を中心として構成される。総重量は125.46gである。掘り込みではなく、比較的赤化した礫が多く見られる。

### 3 縄文時代早期の遺物

出土遺物は非常に少ない。石鏃が1点、剥片が1点、土器片が6点出土している。

#### 石鏃（第30図78）

石材に姫島産黒曜石を用いた打製石鏃である。先端部がわざわざに欠損している。抉りの深いいわゆる鎌形の石鏃であるが、脚部と刃部の境界が極端にくびれる形態である。

#### 剥片（第30図79）

1点のみ出土した。縄文時代早期に多く見られる砂岩製で、横長剥片素材である。

#### 無文土器（第30図80～82）

土器片が6点出土したのみであるため、形態の復元是不可能である（第30図80～82）。B3グリッドから4点とB4グリッドから2点出土しており、それぞれ別個体である。

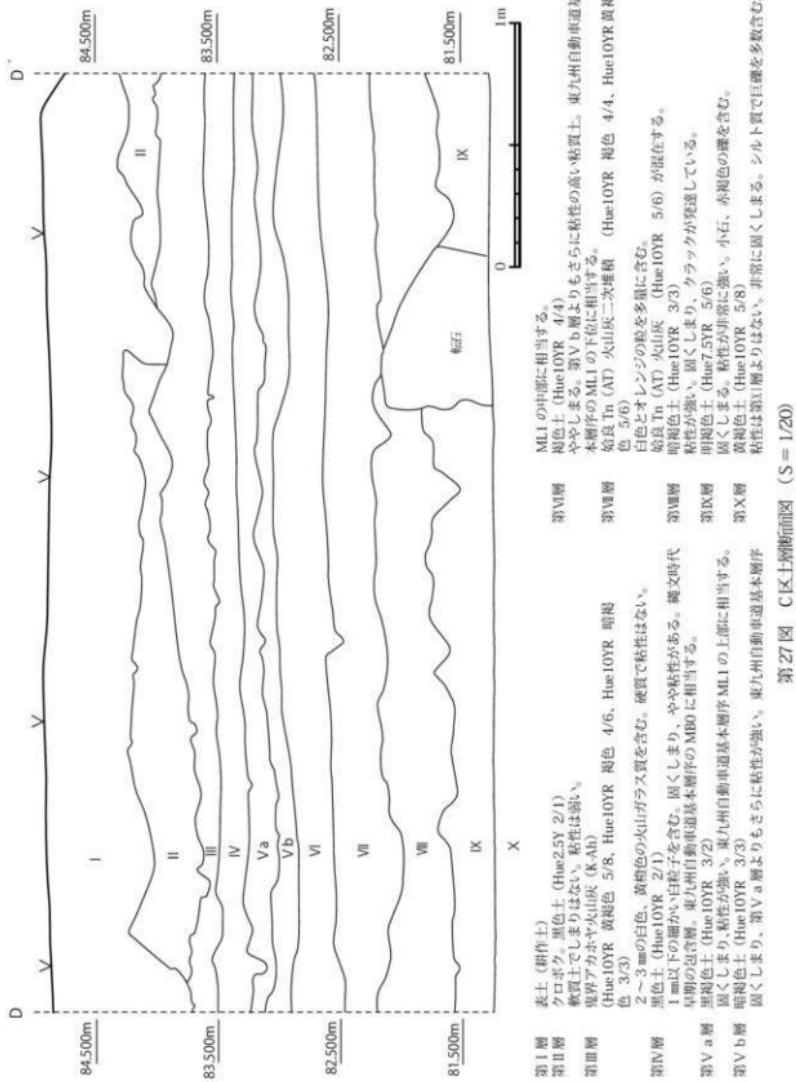
B3グリッドの第IV層から出土した土器は、外面に貝殻条痕を施した無文土器である。内面はナデを施す。器厚は0.8cmから1.0cmとA区から出土した無文土器よりもやや厚みがあるが、薄手無文土器の範疇に十分含まれる土器である。17は確認調査時に出土した土器片で、18は確認調査時に出土した土器片と本調査で出土した土器が接合している。

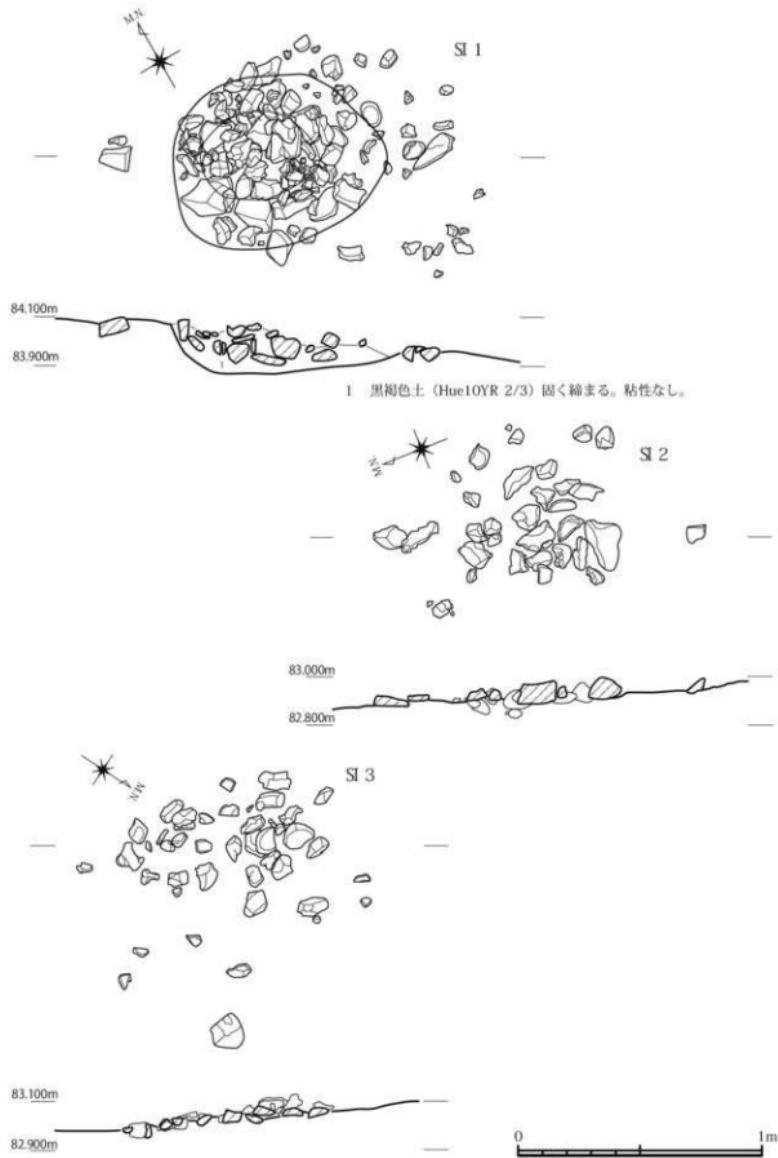
B4グリッドでは、SI 1のすぐ西側から無文土器片が2点出土した。第IV層から出土している。3cm角の土器片で、磨耗も著しく、詳細は不明であるが、内外面ともに文様は見られず、調整はナデ調整と思

われる。小片であるため、器形は不明である。器厚が1.1～1.3cmと本遺跡から出土した他の無文土器と比較すると、最も厚手である。SI 1に伴う土器でみると考えられる。

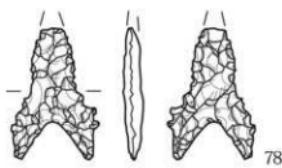
第1表 朝草原遺跡土器観察表(法則の括弧内は推定)

登録番号	器種	遺跡区分	出土地点	出土層位	法則(cm)			手法・調節・文様ほか	焼成	色調		胎土の特徴	備考
					上部	中部	下部			外壁	内壁		
41	湯舟	口縁	M3-4Gc	V層		0.4	～0.5	無文。横方の 凹のナデ調 無。	良好	明ホ白 (Hue5YR5/6) (GYR5/6)	明ホ白 (GYR5/6)	1～2mmの白粉粒、1～2mmの 粒(長石)、1mm以下の白粉(長石)、 1mm以下の黒雲母を多く含む。2 mmのチャート粒を少含む。	
42	湯舟	口縁	N3-3Gc	V層		0.4		無文。横方の 凹のナデ調 無。	良好	明ホ白 (GYR5/6)	明ホ白 (GYR5/6)	1～2mmの白粉粒、1～2mmの 粒(長石)、1mm以下の白粉(長石)、 1mm以下の黒雲母を多く含む。2 mmのチャート粒を少含む。	
43	湯舟	脚部	N3-3Gc	V層		0.5	～0.55	無文。横方の 凹のナデ調 無。	良好	明ホ白 (GYR5/6) (GYR5/6)	明ホ白 (GYR5/6)	1～2mmの白粉粒、1mm以下の 粒(長石)、1mm以下の黒雲母を 多く含む。	
54	湯舟	口縁	M4-4Gc/ M4-3Gc	IV層	(23.0)	0.6		無文。横方の 凹のナデ調 無。	良好	白 (7.5YR7/6)	白 (7.5YR7/6)	1mm以下の白粉粒、2mm以下の 粒を多く含む	
55	湯舟	口縁	M4-3Gc	IV層		0.5	～0.6	無文。横方の 凹のナデ調 無。	良好	白 (GYR5/2) (GYR5/6)	白 (GYR5/2) (GYR5/6)	1mm以下の白粉粒、1mm以下の 粒(長石)、3mm以下のナラ粒(長石)。	
56	湯舟	口縁～脚 部	M4-4Gc/ M4-3Gc	IV層、V 層	(20.0)	0.5	～0.7	無文。横方の 凹のナデ調 無。	良好	白 (GYR5/4) (GYR5/6)	白 (GYR5/4) (GYR5/6)	3～5mmの白粉粒、2mmのホチ ヤード粒、1mm以下の白粉(長石)、 1mm以下の黒雲母(長石)を多く含む。	
57	湯舟	脚部	M4-3Gc	IV層、V 層		0.6		無文。横方の 凹のナデ調 無。	良好	白 (7.5YR6/5) (GYR5/4)	白 (7.5YR6/5) (GYR5/4)	1mm以下の白粉(長石)、1mm 以下の黒雲母を多く含む。2mm のホチヤード粒を少含む。	
58	湯舟	脚部	M4-3Gc	IV層		0.55	～0.7	無文。横方の 凹のナデ調 無。	良好	白 (GYR5/4)	白 (GYR5/4)	2～3mmの白粉粒、1mm以下の 白粉(長石)、1mm以下の黒雲母 を多く含む。2mmのチャート粒 を少含む。	
59	湯舟	底盤付	M4-3Gc	IV層		0.5	～0.6	無文。ナデ 横方向の 調。	良好	白 (7.5YR7/6)	白 (7.5YR7/6)	2～3mmの白粉粒、2～3mmの チャート粒、1mm以下の白粉(長 石)を多く含む。	
60	湯舟	底盤(火 成)	M4-3Gc	IV層		0.5	～0.6	無文。ナデ 横方向の 調。	良好	白 (GYR5/6) (GYR5/4)	白 (GYR5/6) (GYR5/4)	3mmの白粉粒、2～3mmのホチ ヤード粒、1mm以下の白粉(長石)、 1mm以下の黒雲母(長石)を多く含む。	
61	湯舟	脚部	M4-3Gc	IV層		0.7	～0.8	無文。ナデ 横方向の 調。	良好	白 (GYR5/4) (GYR5/6)	白 (GYR5/4) (GYR5/6)	スズ付着 粒を多く含む。	
62	湯舟	脚部	M4-3Gc	IV層		0.7	～0.8	無文。ナデ 横方向の 調。	良好	白 (GYR5/6) (GYR5/4)	白 (GYR5/6) (GYR5/4)	スズ付着 粒を多く含む。	
63	湯舟	脚部	M4-3Gc	IV層、V 層		0.6	～0.8	無文。ナデ 横方向の 調。	良好	白 (GYR5/4) (GYR5/6)	白 (GYR5/4) (GYR5/6)	1～2mmの白粉粒、1mm以下の 白粉(長石)を多く含む。	
64	湯舟	底盤付	M4-3Gc	IV層		0.6		無文。横方の 凹のナデ調 無。	良好	白 (GYR5/4) (GYR5/6)	白 (GYR5/4) (GYR5/6)	2～3mmの白粉粒、1mm以下の 白粉(長石)、1mm以下の黒雲母 を多く含む。2mmのチャート粒 を少含む。	
65	湯舟	脚部	O6-1Gc	V層		0.7	～0.8	無文。横方の 凹のナデ調 無。	良好	白 (GYR5/6)	白 (GYR5/6)	1～2mmの白粉粒、1～2mmのホ チヤード粒、1mm以下の白粉(長 石)、1mm以下の黒雲母を多く含 む。	
66	湯舟	底盤(火 成)	M4-3Gc	IV層		0.6	～0.7	無文。ナデ 横方向の 調。	良好	白 (GYR5/4) (GYR5/6)	白 (GYR5/4) (GYR5/6)	1～2mmの白粉粒、1mm以下の 白粉(長石)を多く含む。	
67	湯舟	脚部	C1K			0.9	～1.0	無文。貝造 横方向の 調。	良好	赤褐 (5YR4/8)	白 (GYR5/6)	1～2mmの白粉粒、1mmのホチ ヤード粒、1mm以下の白粉(長 石)、1mm以下の黒雲母を多く含 む。	確認調査
81	湯舟	脚部	B3-1Gc	V層		0.8	～1.0	無文。貝造 横方向の 調。	良好	白 (GYR5/6)	白 (GYR5/6)	1～2mmの白粉粒、1mm以下の 白粉(長石)、1mm以下の黒雲母 を多く含む。	1点は確認 調査で出土
82	湯舟	脚部	B3-1Gc	IV層		0.8	～0.9	無文。貝造 横方向の 調。	良好	白 (GYR5/6)	白 (GYR5/6)	1～2mmの白粉粒、1mm以下の白 粉(長石)、1mm以下の黒雲母を 多く含む。	

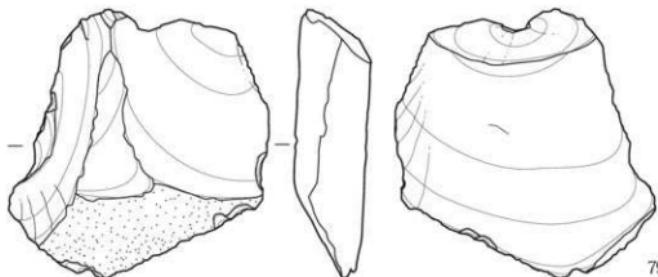




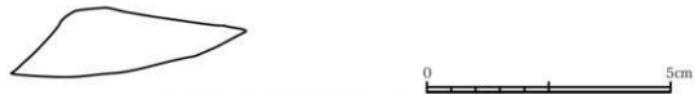
第28図 C区集石遺構実測図 ( $S = 1/20$ )



78



79



第29図 C区出土石器実測図 (S = 1/1)



80



81



82

10cm

第30図 C区出土土器実測図 (S = 1/2)

## 第6節 まとめ

朝草原遺跡は都農町に位置し、宮崎県では県北にある遺跡である。そのため出土遺物も、南九州から出土する遺物よりも、大分県や福岡県などの東九州や北部九州の遺物と、比較的類似する点が多い。現に、本遺跡からは無文土器とともに、姫島産黒曜石の石鏃はもちろん、姫島産ガラス質安山岩の剣片も出土する。これは、大分県域との活発な往来があったことを示唆している。そこで本節では、朝草原遺跡出土の無文土器と北・東九州の無文土器との類似性について考察する。

### 縄文時代早期の無文土器について

無文土器は、調査区A区とC区に出土する。どちらも出土量は少ない。そして、A区とC区では、出土する無文土器の形態が異なる。

A区は大きく出土範囲が4箇所に特定でき、主にM4グリッド周辺から集中して出土している。しかし、全体的に遺物の密度は低く、M4グリッド出土の無文土器でも復元すると2個体程度であった。

C区は2箇所から出土した。土器片数は少なく、それぞれ1個体ずつと思われる。

#### 1 N3グリッド周辺出土の無文土器

N3グリッド周辺の無文土器は、小片で出土数も多い。ほとんどがV層から出土している。復元が不可能なためその全容は不明だが、厚さは極めて薄手の無文土器で0.4~0.5cm程度である。焼成は赤褐色で、内外面ともに強いナデが施され、堅強な土器である。断面に纖維痕が見られる。胎土は、1~2mmの比較的大粒の石英と、1mm以下の長石を多量に含む。

器形が不明のため、詳しい編年はできないが、他のグリッドから出土した土器よりも、下層から出土している。

#### 2 M4グリッド周辺出土の無文土器

M4グリッド周辺の無文土器はそのほとんどがIV層から出土している。出土した土器片は、器壁の厚

さが0.5~0.8cm程度の薄手のナデ調整無文土器である。胎土は石英、長石、角閃石などを多量に含んでおり、粗製土器ではあるが、焼成は概ね良好である。また、外面にはマメ科と思われる種子圧痕がついている。

底部は2点出土している。器形はいわゆる広角尖底形に分類でき（編貫1999）<sup>1)</sup>、厚さは0.9mm前後と極めて薄手である。

口縁部片は3点確認できる。いずれも直立して立ち上がり、口唇部から内面に緩やかに傾斜する形態である。口縁部から底部まで完全に接合できる資料がない為、推定ではあるが器高は20cm程度、直径は25cm前後になる。口縁部等に隆帶文などの文様は全く見受けられず、内・外側ともに丁寧なナデを施す無文土器である。

底部形態や器形の属性などから二日市洞穴第5~第4文化層に相当すると思われる。口縁形態は、直口し、口唇部から内側に緩やかに傾斜する器形で、柏原遺跡F地点II層<sup>2)</sup>から出土した無文土器形態に類似する。

#### 3 N6グリッド周辺出土の無文土器

N6グリッド周辺から出土した無文土器は全て1~2cmの小片である。外面にススが付着しているものが多い。胎土は1mm以下の石英、長石、角閃石などを少量含む。小片しか出土しないため、器形は不明であるが、わずかながら口縁部が出土している。形態は直口で立ち上がり、口唇部から内側に緩やかに傾斜する器形である。土器片出土に近接してSC2の土坑が第V層より検出されている。土坑に伴う無文土器である可能性が高い。

#### 4 O6グリッド出土の無文土器

O6グリッドから1点のみ形態の異なった無文土器が出土している。外面はナデで調整され、内面は貝殻条痕が施されている。内面に横方向の貝殻条痕が施された土器は朝草原遺跡全体を通して、この1点だけである。胴部と思われる土器片が1点出土しただけなので、器形の復元は不可能であるが、器厚は0.7~0.8cmと、M4グリッド周辺から出土する

無文土器と差はない。

### 5 B 3 グリッド周辺出土の無文土器

C 区から出土する無文土器は、A 区とは異なり、外面に貝殻条痕調整を施し、内面はナデ調整が行われている。貝殻条痕調整は、斜行凹に施されている。B 3 グリッド周辺から出土した土器片は、全て同一個体と思われる。口縁部や底部は出土せず、胴部のみの出土であるため、器形は不明である。厚さは 08 ~ 10cmで、A 区から出土した無文土器に比べ、やや厚みをもつ。

### 6 B 4 グリッド出土の無文土器

B 4 グリッド出土の無文土器は、2 片しかなく、大きさも 3cm 程度の小片である。器厚は 1.1 ~ 1.3cm で、色調は浅黄橙色 (Hue 10YR 8/4) と色調も淡く、断面は浅黄橙色 (Hue 7.5YR 8/6) と若干赤みを帯びる。表面の磨耗が著しく、無文土器としての正確な評価はできない。

SI 1 の集石構造に近接して出土しており、SI 1 に伴う土器と考えられる。

以上が、朝草原遺跡から出土した主な無文土器の概要である。A 区 M 4 グリッドの第 IV 層から出土した無文土器と C 区 B 3 グリッドの第 IV 層から出土した無文土器は、層位からほぼ同時期と捉えていいだろう。

全体的に器厚が薄手なのも、土器の径が小形などに比例するかもしれないが、内外面ともに丁寧にナデ調整を行っているものが多く、意図的に薄手土器を製作している。

特に、第 V 層から出土している N 3 グリッド周辺の土器は、器壁厚が 0.4cm と極めて薄手の無文土器である。M 4 グリッドや B 3 グリッド出土の土器よりも下層から出土し、時期差があるようだ。第 V 層からは、細石刃核などの旧石器時代終末期～縄文時代草創期の遺物が確認されている。よって、極めて薄手で、胎土が堅緻な無文土器は縄文時代草創期に比定されると思われる。

### 【参考文献】

- 1 鶴賀俊一 1999 「九州の縄紋時代草創期から早期の土器編年に関する一考察」『古文化叢叢』第 42 集 九州古文化研究会
- 2 橋昌信 1980 『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学付属博物館
- 3 山崎純男 / 編 1983 「柏原遺跡群 I - 縄文時代遺跡 F 遺跡の調査-」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 90 集 福岡市教育委員会

第2表 朝草原遺跡石器観察表

レイヤ No.	出土 列ヶ 層	遺物 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
1	B区 T 1	確認調査	茶色流紋岩	ナイフ形石器	4.4	1.5	1.1	5.2	国府型。確認調査で T 1 の中心より出土。	
2	C区 C区	確認調査	黒色チャート	石鏃	3.1	1.5	0.6	1.1	鏡面。	
3	C区 C区	確認調査	尾鈴酸性岩類	敲石	6.6	5.7	4.8	213.8	背面に敲打痕。	
4	A区 A区	表採	青色チャート	二次加工剝片	4	3	1.3	11.8	石器未品製か。	
5	A区 A区	表採	茶色流紋岩	ナイフ形石器	2.5	1.3	1.1	2.2	先端部のみ残存。	
6	A区 A区	表採	緑色泥岩	石鏃	2.9	1.4	0.5	1.7	未製品。片側欠損。刃部を作り出す擦痕あり。	
7	A区 M2	V VI	A-57	青色チャート 黒色頁岩	石核 角錐状石器	2.8 4.5	3.2 1.8	1.6 1.3	18.3 7.4	横長剝片素材。正面は平坦をなす。
9	M3	V	A-70	灰色流紋岩	角錐状石器	3.6	1.4	1.5	5.1	横長剝片素材。表面に黒色の斑点がみられる石材。
10	M2	V	A-49	黒色流紋岩	角錐状石器	2.2	1.5	1.7	3.1	先端部のみ残存。遺物 No.A-39 と同一母岩か。
11	M3	V	A-39	黒色流紋岩	角錐状石器	5.2	2.9	2.2	22.3	下半分欠損。左側縁未加工。遺物 No.A-49 と同一母岩か。国府型。
12	M3	V	A-35	茶色流紋岩	ナイフ形石器	3.9	1.6	1.4	4.8	
13	L2	VI	A-115	ホルンフェルス (流紋岩系)	ナイフ形石器	7.1	3	1.8	24.2	
14	M4	VI	A-25	白色流紋岩	細石刃核	3.5	2.5	2	22.2	船野型。背面は鏡面。
15	M4	V	A-21, A-31	白色流紋岩 (白色)	細石刃核	3.8	3	2.5	33	船野型。レイヤ No.16,17 の接合部。
16	M4	V	A-21	白色流紋岩	細石刃核	3.8	2.9	2.5	25	船野型。背面は鏡面。
17	M4	V	A-31	白色流紋岩	剥片	3.8	2.5	1.4	8	作業面調整剝片。
18	M4	VI	A-27	白色流紋岩	細石刃核	3.8	2.8	2.3	24	船野型。背面は作業面調整剝片。
19	M4	V	A-28	白色流紋岩	細石刃核	3.5	2	2.1	12.4	船野型。
20	N4	V	A-13	ホルンフェルス (白色)	細石刃核	5.1	3	2.8	34.4	船野型。
21	M4	VI	A-26	ホルンフェルス (灰色)	細石刃核	5.5	3.4	3.4	63.8	船野型。片面のみ。
22	M4	VI	A-23	白色流紋岩	細石刃	1.6	0.8	0.1	0.2	打面調整なし。
23	M3	V	A-38	黒色流紋岩	細石刃	1.1	0.4	0.1	< 0.1	右側面に使用による欠けが見られる。
24	M3	V	A-44	黒色流紋岩	細石刃	0.7	0.6	0.1	< 0.1	
25	M3	V	A-45	白色流紋岩	細石刃	0.9	0.4	0.1	< 0.1	
26	N3	V	A-71	黒色流紋岩	細石刃	0.8	0.6	0.1	< 0.1	作業面調整剝片。
27	M4	VI	A-33	白色流紋岩	剥片	3.3	1.8	0.9	3	縦長剝片。右側縁の下半部にわざかな加工あり。
28	N5	VI	A-101	ホルンフェルス (黄色)	二次加工剝片	8.9	2.3	1.6	23.6	縦長剝片。
29	L4	VI	A-110	白色流紋岩	剥片	4.7	1.6	1.2	5.4	頭部打面は鏡面。
30	M3	VI	A-36	茶色流紋岩	剥片	6.5	2.3	1.7	19.3	縦長剝片。
31	M4	VI	A-24	白色流紋岩	剥片	3.9	1.6	1.4	5.4	ナイフ形石器未品製か。
32	M3	VI	A-47	茶色流紋岩	剥片	4.3	3.3	1.7	16.1	縦長に近い剥片。
33	M6	V	A-106	ホルンフェルス	剥片	4.6	4	1.6	19	末広がりの縦広剝片。
34	O5	V	A-94	白色流紋岩	剥片	4.7	3.7	1.7	10.8	縦長剝片。端部欠。
35	L4	VI	A-109	珪質頁岩	石核	3.5	3	2.5	23.4	頭部打面は鏡面。
36	M3	VI	A-69	尾鈴山酸性岩類	剥片	8.9	4.6	2.5	71.7	大形の縦長剝片。
37	N4	V	A-16	黒色流紋岩	剥片	3.3	2	0.8	2	調整剝片。
37	M4	VI	A-18	黒色流紋岩	石核	12.8	6.8	4.5	353	背面は鏡面。
37	M4	V	A-32	黒色流紋岩	剥片	2.2	1.6	1.5	3	調整剝片。
38	M4	VI	A-20	尾鈴山酸性岩類	敲石	9.1	6.9	5	410.9	縦辺に敲打痕。背面中央に敲打跡のフレス。
39	M4	VI	A-29	砂岩	敲石	7.1	6.3	5	279.6	縦辺に敲打痕。背面右下に敲打跡のフレス。
40	M2	V	A-53	尾鈴山酸性岩類	敲石	9	8	6.6	588.4	縦辺に敲打痕。
44	M4	V	A-17	ガラス質溶結凝灰岩	打製石鏃	2.9	1.9		2	阿蘇象が真庭。
45	N3	V	A-75	黒色チャート	打製石鏃	3.4	1.5	0.8	1.7	左側脚部欠損。
46	N3	V	A-80	灰色チャート	打製石鏃	2.8	1.5	0.7	1.5	左側脚部欠損。先端は白みを帯びる。基部は黒灰色。
47	N6	IV	A-103	灰色チャート	打製石鏃	2.7	2	0.8	1.5	先端部は欠損。使用による欠けか。
48	L5	V	A-108	青色チャート	打製石鏃	1.5	1.1	0.1	0.3	先端部のみ残存。
49	N3	V	A-79	黑色チャート	剥片	3.2	1.5	1	3	打製石鏃の未品製か。左半分のみが残る。成形途中で麻痺の可能性。
50	O4	V	A-10	青色チャート	剥片	1.8	1	0.9	0.8	横長剝片。

レバフ No.	出土 引出 No.	層	遺物 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
51	M2	V	A-61	ホルンフェルス (灰色)	剥片	2.5	2	0.9	2.4	横長剥片。
52	N3	V	A-84	砂岩	剥片	9.5	6	2.2	63.5	大形の縦長剥片。下端部に 礫面を残す。
53	N3	V	A-83	砂岩	剥片	7.9	5.5	2.1	46.6	大形の幅広剥片。頭部打面 は礫面。
67	B区 表採	VII	B-7	黒曜石	石鏸	2.9	2	0.5	1.3	大分県姫島産。製品。卵形。
68	D7	VII	B-8	白色流紋岩 (赤茶 色の模様)	角錐状石器	5	4.5	3.3	58	遺物 No.B-8と接合。先端部、 未製品。
68	D7	VII	B-8	白色流紋岩 (赤茶 色の模様)	角錐状石器	5.7	4.9	3.4	64	遺物 No.B-7と接合。基部、 未製品。
69	D3	X	B-18	黒曜石	細石刃核	2	1.5	1.4	2.7	野岳・休場型。熊本県桑ノ 木津留産。左側面は礫面。
70	D6	VI	B-2	黒色流紋岩	細石刃核	3.2	2.3	2.6	15	船野型。底部にわずかに 礫面残る。
71	D4	X	B-12	灰褐色チャート	打製石鏸	2.7	1.5	0.6	1.1	製品。先端部わずかに欠 陥密な製作。
72	D3	X	B-17	黒色流紋岩	剥片	7.5	3.5	1.5	20.5	先端部の縱長剥片。
73	D6	VII	B-6	黒色流紋岩	剥片	4.5	3.4	1.2	7.6	左側縁に礫面を残す。
74	D7	VII	B-23	黒色流紋岩	剥片	3.3	1.5	1.4	3.5	右半分が欠損。
75	D3	X	B-20	灰褐色流紋岩	剥片	2	3.2	1.1	3.1	不定形剥片。
76	D5	X	B-16	黒色流紋岩	剥片	6.3	3.7	1.9	29	縦長剥片。右側縁にわずか な加工あり。
77	D7	VI	B-10	白色流紋岩	石核	5.5	5.2	2.6	51	頭部打面と背面に礫面を 残す。
78	B4	IV	C-5	黒曜石	打製石鏸	2.8	1.8	0.9	1.2	大分県姫島産。製品。使 用による先端の欠けが見られ る。両側縁共に顯著な屈曲 を施す。
79	B3	IV	C-6	砂岩	剥片	5	5.8	1.9	41.4	幅広剥片。
O4	V	A-1	青色チャート	剥片	1.7	1	0.1	0.2	調整剝片。	
O4	V	A-2	青色チャート	剥片	2.5	1.7	0.8	1.1	調整剝片。A区表採資料と 接合。	
O4	V	A-3	青色チャート	剥片	1	1	0.1	< 0.1	調整剝片。	
O4	V	A-4	黒曜石	剥片	1.7	1.6	0.9	1.1	鹿児島県日東産	
O4	V	A-5	ホルンフェルス (灰色)	剥片	7.7	4.5	2.5	50.2		
O4	V	A-6	青色チャート	剥片	0.7	0.3	0.1	< 0.1	小剝片。	
O4	V	A-7	青色チャート	剥片	0.8	0.7	0.2	< 0.1	調整剝片。	
O4	V	A-8	青色チャート	剥片	1.1	0.7	0.1	0.1	調整剝片。	
O4	V	A-9	青色チャート	剥片	1.3	0.8	0.2	0.2	調整剝片。	
O4	V	A-11	青色チャート	剥片	0.7	0.5	0.1	< 0.1	小剝片。	
N4	V	A-12	黒色チャート	剥片	3	2.8	1.5	4.2	背面は礫面。	
N4	V	A-14	白色流紋岩	剥片	1.4	0.8	0.3	0.4		
N4	V	A-15	砂岩	剥片	3.8	2.9	2	14.8		
M4	VI	A-19	黒色流紋岩	剥片	2.3	1.1	1.1	1.6	小剝片。	
M4	V	A-22	白色流紋岩	剥片	2.5	2.1	0.9	2.9		
M5	IV	A-30	白色流紋岩	剥片	2.2	1.2	1.4	2.1		
M4	VI	A-34	茶色流紋岩	石核	4.7	4.3	2.6	29.2	背面は礫面。	
M3	VI	A-37	白色流紋岩	剥片	2.3	3.4	1.6	7.7	横長剝片。	
M3	V	A-40	灰褐色質岩	細石刃核	0.9	0.5	0.2	< 0.1	調整剝片。	
M3	VI	A-41	ホルンフェルス (黄色)	剥片	2.8	2	1.1	3.2		
M3	VI	A-42	白色流紋岩	剥片	0.9	0.8	0.3	0.2	小剝片。	
M3	V	A-43	黒曜石	細石刃核	0.9	0.6	0.1	< 0.1	透明度高い。	
M3	VI	A-46	白色流紋岩	剥片	2.5	1.7	0.4	1.5	被熟していない。	
M2	V	A-48	青色チャート	剥片	1.8	1.2	1	1.1		
M2	VI	A-50	黒色流紋岩	剥片	1.5	1.2	1	0.8	小剝片。	
M2	V	A-51	黒色流紋岩	剥片	2.5	1.4	0.9	1.5	横長剝片。	
M2	VI	A-52	黒色流紋岩	剥片	2.4	1.6	1.2	2.2	横長剝片。	
M2	V	A-54	黒曜石	細石刃核	1.3	0.6	0.2	0.2	漆黒の黒。不純物なし。透 通しない。	
M2	V	A-55	黒曜石	剥片	0.6	0.4	0.2	< 0.1	小剝片。透明度高い。	
M2	V	A-56	黒曜石	剥片	0.7	0.5	0.2	< 0.1	小剝片。不純物なし。透過 しない。	
M2	VI	A-58	黒曜石	剥片	1.4	1.4	0.3	0.5	鹿児島県日東産。	
M2	V	A-59	黒色流紋岩	剥片	1.3	0.6	0.1	0.2	調整剝片。	
M2	VI	A-60	黒色流紋岩	剥片	2.9	2.1	1.2	4.8		
M2	VI	A-62	黒曜石	剥片	11	1.9	1.3	1.2	鹿児島県日東産。	
M2	VI	A-63	黒色流紋岩	剥片	1.3	0.8	0.2	0.2		

No.	出土 No.	層 No.	遺物 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
M2	V	A-64	黒曜石	剥片		0.7	0.5	0.1	< 0.1	小剥片。透明度高い。
M2	VI	A-65	黒曜石	剥片		1.7	1.5	1	1.2	鹿児島県日東産。
M2	V	A-66	黒色流紋岩	剥片		2.4	1.7	1	2.1	背面は穢面。
M2	V	A-67	茶色流紋岩	縦石刃か 台石		1.7	0.7	0.1	0.2	縦長剥片。 底面は安定しない。
M3	VI	A-68	尾鈎山酸性岩類	台石		25.6	15.2	6.5	4000	
N3	V	A-72	砂岩	剥片		3.8	2.3	1.2	7.1	
N3	V	A-73		土器						ナテ調整
N3	V	A-74	砂岩	剥片		6.7	3.3	2	24.4	縦長剥片。上部打面は穢面。
N3	V	A-76	青色チャート	剥片		0.7	0.7	0.2	< 0.1	小剥片。
N3	V	A-77	黒色チャート	剥片		0.9	0.6	0.1	0.1	小剥片。
N3	V	A-78	ガラス質安山岩	剥片		1.7	0.6	0.1	0.2	大分県姫島産。縦長剥片。
N3	V	A-81	黒色チャート	剥片		0.9	0.9	0.1	0.1	小剥片。
N3	V	A-82	ガラス質安山岩	剥片		0.8	0.3	0.1	< 0.1	調整剝離。大分県姫島産。
N3	V	A-85	ガラス質安山岩	剥片		2.9	1.7	1	2.2	大分県姫島産。
N3	V	A-86	ガラス質安山岩	剥片		1.8	1.7	1	1.1	大分県姫島産。
N3	V	A-87	ガラス質安山岩	剥片		1.5	2	0.6	0.9	大分県姫島産。
N3	V	A-88	ガラス質安山岩	剥片		1.3	1.1	0.3	0.3	大分県姫島産。
N3	V	A-89	ガラス質安山岩	剥片		2	2.2	1	1.9	大分県姫島産。
N3	V	A-90	白色チャート	打製石器か		1.7	0.7	0.2	0.4	片側半分欠失。
N3	V	A-91	ホルンフェルス (灰色)	剥片		5.5	4.2	1.9	28.8	
N3	V	A-92	黒色流紋岩	剥片		2	3.9	0.9	2.7	
O5	V	A-93	茶色流紋岩	剥片		3.9	2.8	1.2	6.7	縦長剥片。
N5	V	A-95	尾鈎山酸性岩類	剥片		10.2	6	2.2	95	縦長剥片。上部打面は穢面。背面は穢面。遺物 No.A-98 と接合。
N5	V	A-96	尾鈎山酸性岩類	石核		10.2	9.2	5.2	494	
N5	V	A-97	尾鈎山酸性岩類	剥片		7.5	5.6	2.5	91.7	縦長剥片。背面は穢面。
N5	V	A-98	尾鈎山酸性岩類	剥片		6.3	5.2	1.7	57.7	背面は穢面。遺物 No.A-96 と接合。
N5	V	A-99	尾鈎山酸性岩類	剥片		4.8	4.5	2.3	33.6	穢面。
N5	V	A-100	砂岩	剥片		5.1	4.4	2.1	25.8	上部打面は穢面。
N6	V	A-102	白色流紋岩	剥片		2.7	2	1.3	3.6	遺物 No.A-105 と接合。
N6	V	A-104	黒曜石	剥片		0.8	0.8	0.2	0.1	不規則なし。
N6	V	A-105	白色流紋岩	剥片		3.7	3.3	1.5	10.4	上部打面は穢面。遺物 No.A-102 と接合。
M6	VI	A-107	砂岩	剥片		3.1	1.9	1.1	3.6	上半分欠損の概長剥片。
L4	VI	A-111	黒色流紋岩	剥片		2.1	3.6	1.1	4.3	
L3	VI	A-112	白色流紋岩	剥片		3.9	2.5	1.5	8.8	背面は穢面。
L3	VI	A-113	白色流紋岩	剥片		3.7	3.2	0.9	6.5	被熱していない。
L2	VI	A-114	ホルンフェルス (灰色)	剥片		5.1	5.1	2.4	50	
L2	VI	A-116	緑色チャート	剥片		1.6	1.2	0.2	0.5	
N2	V	A-117	青色チャート	剥片		3	1.9	1.5	6.5	背面は穢面。
N3	V	A-118	青色チャート	剥片		2.5	1.6	1.5	4.9	
D6	VI	B-1	灰色流紋岩	剥片		3.9	6	2.4	33.9	背面は穢面。
D6	VI	B-3	砂岩	剥片		2.7	2.3	1.3	4.5	上部打面は穢面。
D6	VI	B-4	ホルンフェルス (砂岩系)	剥片		2.5	3.2	1.2	5.6	
D6	VII	B-5	ホルンフェルス	剥片		2.5	2	1.2	3.2	
D7	IV	B-9	黒色流紋岩	剥片		3.5	3.3	1.5	11.3	
D7	IX	B-11	白色流紋岩	剥片		2.2	3.3	1.2	5.7	正面は穢面。
D4	X	B-13	尾鈎山酸性岩類	剥片		4.8	5.6	1.7	30.2	幅広剥片。
D4	X	B-14	砂岩	剥片		3	3.1	1.1	6	
D4	X	B-15	ホルンフェルス (流紋岩系)	剥片		3.3	4.8	1.4	17.7	側面は穢面。
D3	X	B-19	ホルンフェルス (流紋岩系)	剥片		4.9	3.2	1.4	14.6	縦長剥片。
D3	X	B-21	ホルンフェルス (灰色)	剥片		7.6	5.4	2	71	背面は穢面。底面からの加工が見られる。表面に褐色の斑点が見える石材。
D7	VII	B-22	黒色流紋岩	剥片		0.8	0.8	0.1	< 0.1	小剥片。側面に微細な調整が見える。
D7	VII	B-24	黒色流紋岩	剥片		2.4	3.3	1.3	7.2	
B3	IV	C-1		土器						貝殻条痕調整
B3	V	C-2		土器						貝殻条痕調整
B3	IV	C-3		土器						貝殻条痕調整
B3	V	C-4		土器						貝殻条痕調整
B4	V	C-7		土器						ナテ調整
B4	V	C-8		土器						ナテ調整

### 第Ⅲ章 尾立第3遺跡の調査

#### 第1節 調査の経過と方法

##### 1 確認調査の概要

尾立第3遺跡の本調査に先立ち、調査対象総面積3000m<sup>2</sup>を平成17年6月1日から7月27日まで確認調査を行った(第31図)。

3000m<sup>2</sup>に対して15箇所のトレンチ(160m<sup>2</sup>)を設定し調査を行った。本遺跡は、舌状に広がる斜面地で、山の中腹に立地する。遺跡の中央が最も標高が高く、東面に緩やかに傾斜する。

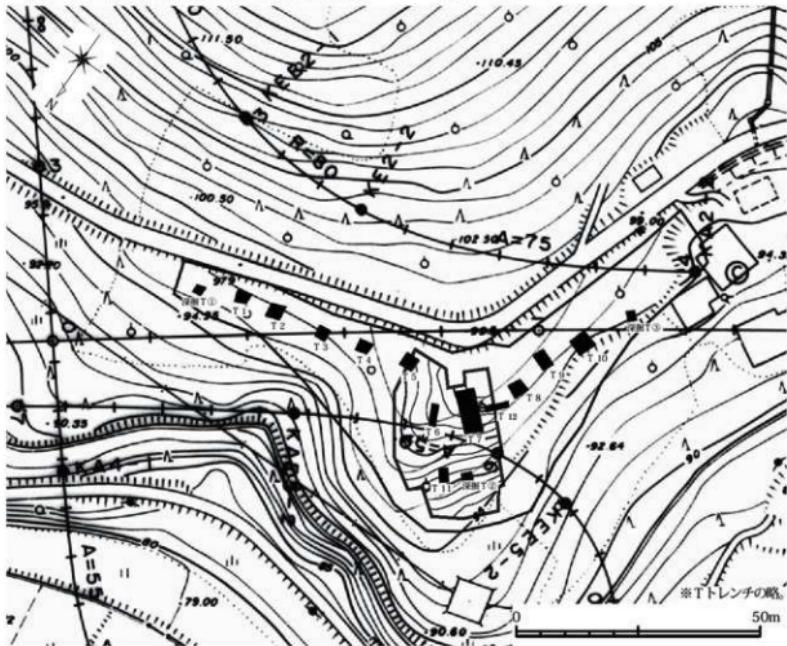
重機で草木の除去を行った時点で、遺跡の西側半分からは巨礫が出現し始めた。人力で掘削を始めたが、やはり調査対象区西側からはアカホヤ火山灰層や遺物包含層などは見受けられず60cmほどで礫層を確認した。

調査対象区東側は比較的、土層の残存状況も良好

で厚い堆積が見られたため、遺構・遺物の発見に期待が持たれたが、結局確認されなかった。確認トレンチ掘削の結果、東から5つ目のトレンチ(T4)は、他のトレンチよりもアカホヤ火山灰層面の検出レベルが低く、谷に向かって急激に落ち込んでいた。よって、以前は4トレンチあたりを境に、調査対象区東側と西側は別の尾根であったと判断される。

遺物が出土したのは、調査対象区中央に位置する舌状に広がる高まりである。後世による削平のために、アカホヤ火山灰層も残存していない、表土を除去するとすぐにAT直上の褐色土層となった。この褐色土層より、旧石器時代の剣片と思われる遺物が多数出土した。しかし、遺構は検出されなかった。

以上の結果をもとに、調査区の東西を本調査対象区から除外し、調査区中央の高まり1000m<sup>2</sup>の面積の本調査を行った。

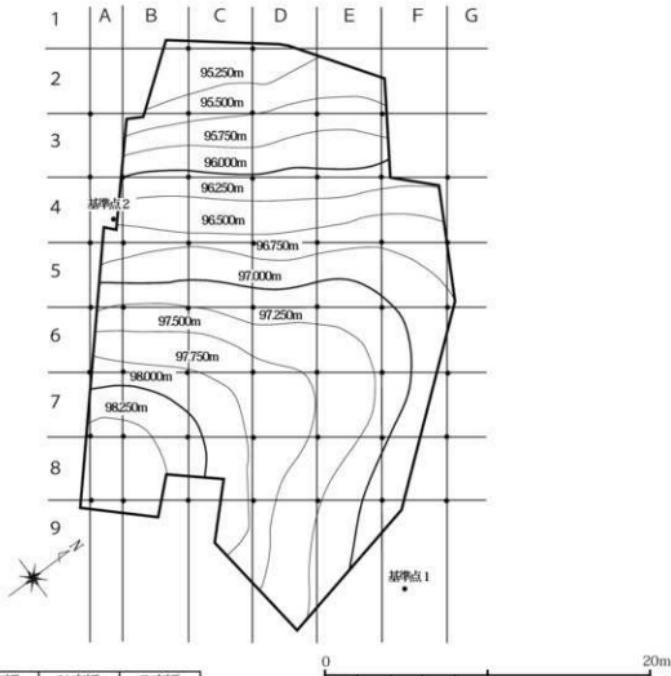


第31図 確認トレンチ配置図 (S=1/1,000)

調査日誌抄 (平成 17 年)

- 9.15 (木) 重機による表土剥ぎ。  
 9.16 (金) 器材コンテナ等の搬出。  
 9.20 (火) 調査区に十字のベルトを設定し、4m × 4m の任意グリッドを設定。  
 9.21 (水) 碑群 5基検出。そのほか、碑群の可能性のあるもの 3基検出。剥片多数出土。  
 9.22 (木) 調査区北側に散蝶を検出。  
 9.26 (月) 基準点測量。  
 9.27 (火) 碑群の写真撮影、実測。  
 9.28 (水) 調査区東側の攝影終了。西側の攝影開始。調査区全面に剥片出土。  
 集石遺構検出。確認調査で検出されなかつた遺構が、多数検出されたため、調査期間の延長決定。

- 10.14 (金) 調査指導委員による調査指導。  
 トータルステーションによる遺物取り上げ。  
 10.18 (火) 散蝶の写真撮影。  
 10.19 (水) AT面までの攝影終了。  
 10.20 (木) 調査区に散蝶帯に広がる蝶を、グリッドごとに取り上げ。  
 集石遺構・蝶群の写真撮影、実測。  
 10.21 (金) 土壠断面作成。  
 10.24 (月) 土壠断面作成。記録の終ったベルトから順に撮影。  
 10.25 (火) 遺物取り上げ。  
 作業員調査終了。順次、朝草原遺跡へ…。  
 10.26 (水) 現地調査終了。撤収。



測点	X 座標	Y 座標	Z 座標
基準点1	-832235.70	49666.492	99.422
基準点2	-83216.201	49640.074	96.938

第 32 図 尾立第3遺跡グリッド配置図 (S = 1/300)

## 2 発掘調査の方法

尾立第3遺跡は、大師山の西側中腹に立地する遺跡である。確認調査の結果、遺跡中央の舌状に広がる1,000m<sup>2</sup>の調査が必要となった。

本調査対象面積が小規模で、また確認調査時に遺構が検出されなかったため、2点の基準点のみの測量で、国土座標を基準としたグリッド杭の設置を行わない調査方法をとった。

調査区を1つの大きなトレーナーと見立て、中央に十字に1m幅のベルトを残して掘削していくところ、予想に反して礫群の検出が見られた。そこで急速、測量委託で得た2点の基準点から4m×4mのグリッドを任意に設置し、調査を行った。

グリッドは任意のため、方位は座標北(GN)を基準としていない。また、グリッドも小分けに設定したので、25%調査は行わず、最初から100%調査で掘り進めた。

遺物はトータルステーションによって取り上げ、遺構は1／10、土層断面は1／20で図化した。

## 3 整理作業及び報告書作成

整理作業は平成17年12月から開始し、平成18年10月に終了している。遺物の整理については本センターにて、礫の整理については川南整理作業棟にて行った。礫は計測と接合を行った。

整理作業に時間的余裕を見つけられたので、朝草原遺跡と尾立第3遺跡から出土した石器類の遺跡間接合を試みた。期待した結果を得ることはできなかつたが、朝草原遺跡から表探した剥片と尾立第3遺跡の遺物包含層から出土した剥片が接合するというものが3個体得られた。これについては、第IV章で若干述べる。

報告書作成にあたっては、本年度より本センターで取り組むデジタル入稿の方法をとった。使用OSはWindows2000professionalである。遺物・遺構平面図等のトレースについては株式会社アイシン精機の『遺構くん』と、Adobe社のIllustratorを使用し、eps形式で保存、レイアウトを行うという形をとっている。拓本等の画像の編集にはAdobe社のPhotoshopを用いた。編集・レイアウトについてはAdobe社の

InDesignを用いた。入稿に際してはInDesign形式での入稿を行っている。

写真については従来どおりフィルムで撮影を行い、版下による入稿を行った。

## 第2節 層序

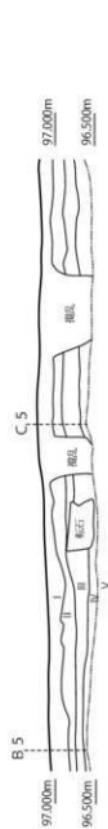
尾立第3遺跡は、山の中腹から裾に向かって緩やかに傾斜する斜面地に立地している。そのため、土層の堆積も非常に薄く、安定していない。指標となるAT層はプライマリな層ではなく、上層の褐色土層が混在するような状況であった。また、表土を除去するとすぐに褐色土層となる。これは、調査区のすぐ隣に道が作られており、この道を作るために大幅な削平をしたためと思われる。

遺構・遺物包含層は第II層の褐色土層である。

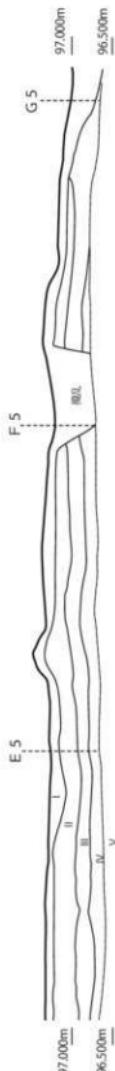
- ①第I層 表土(耕作土)
- ②第II層 褐色土(Hue10YR 4/4)  
やや粘性がある。しまらない。
- ③第III層 始良Tn(AT)火山灰(Hue10YR 黄褐色5/6)  
第II層と混在する。
- ④第IV層 暗褐色土(Hue10YR 3/3)  
粘性が強い。固くしまり、所々クラックが発達している箇所がある。
- ⑤第V層 明褐色土(Hue7.5YR 5/6)  
粘性が非常に強い。固くしまる。小石、赤褐色の礫を含む。

	層序	土色	略称
①	I	表土・耕作土	
②	II	褐色土	ML1
③	III	黄褐色土	AT
④	IV	暗褐色土	MB2, MB3
⑤	V	明褐色土	

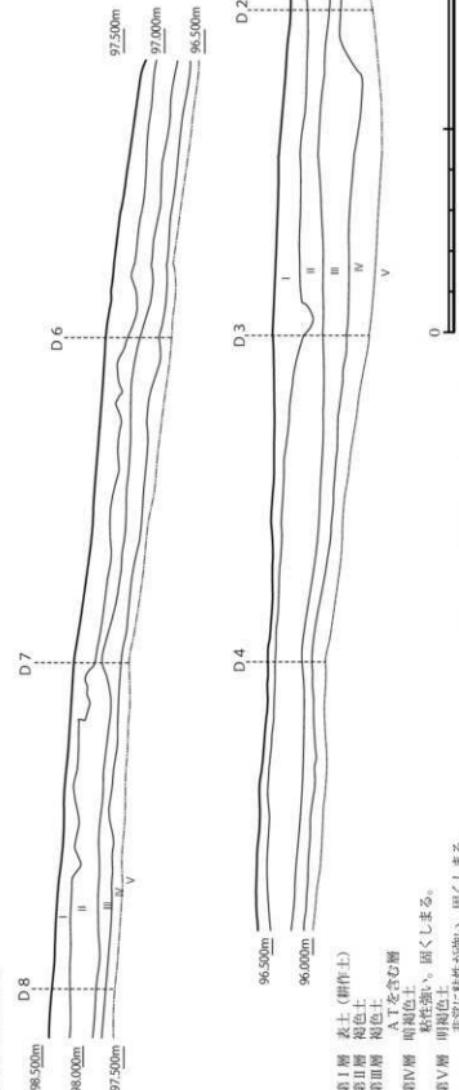
【東西土壤断面図】



【南北土壤断面図】



【南北土壤断面図】



第Ⅰ層 表土(耕作土)  
第Ⅱ層 黄褐色土  
第Ⅲ層 黄褐色土  
A.T.を含む層  
第Ⅳ層 黄褐色土  
粘性が強、固くしまる。  
非常に粘性が強く、固くしまる。  
小石、赤褐色の礫を含む。

第33図 土壌断面図 (S = 1/60)

### 第3節 尾立第3遺跡の調査記録

#### 1 概要

尾立第3遺跡は山の中腹の斜面地に立地し、土層の堆積は非常に薄い。加えて、整備された山道が遺跡のすぐ横を通っている。この山道を造成したときに大幅に削平されたのか、表土を除去すると AT直上の褐色土層から始まる。確認調査で除外となつた調査区からは、アカホヤ火山灰層の良好な堆積も認められ、本来は本調査区内にも土層は堆積していたと思われる。(この大量に削平された土がどこへ運ばれたであろうかは第IV章で推察する。)

指標となる AT 層もプライマリな堆積ではなく、上層と混在する層であった。土層断面図は、東西を B 5 グリッドから G 5 グリッドの南壁、南北は D 8 グリッドから D 2 グリッドの西壁を記録した。東側斜面向かうに連れ、礫層検出のレベルが高くなる。本調査区は、カルスト台地のような地形になっており、礫層検出面に差が見られるのも礫層の起伏による可能性が高い。(本センター主任主事藤木聰より教示)。

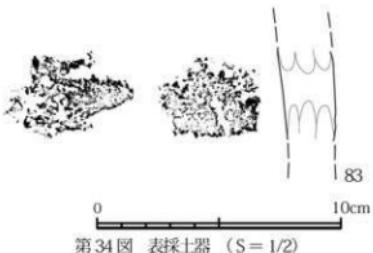
文化層は A T 上位の II 層である。土器の出土は、表土から 5 cm 程度の土器片が 1 点出土したのみで(第 34 図 83)、その詳細は不明だが縄文時代早期の無文土器と思われる。

#### 2 旧石器時代終末期～縄文時代早期の遺構

尾立第3遺跡では、礫群が 10 基確認されている(第 35 図 SI 1 ～ SI 10)。礫群は調査区の北側斜面に集中し、その周辺には、北側斜面に沿うように散礫状に礫が点在している(図版 8 : 尾立第3遺跡北側散礫参照)。散礫状に散在している礫は、グリッドごとに取り上げ、その総重量を図示した(第 39 図)。

本遺跡が傾斜地であるため、必然的に総重量は標高が下がるごとに重くなっていく。このことから散礫状に広がった礫も、本来は礫群の構成礫であった可能性も想定できる。

集石遺構は 2 基検出した。礫群とは離れて、調査区南側の標高の高い位置から検出された。礫群と同層からの検出で、判断が難しかったが、これら 2 基



第34図 表採土器 (S = 1/2)

の集石遺構(SI11SI12)は、掘り込みを持つ遺構と掘り込みはないか礫の配置が整然としている遺構で、また他の礫群とは群を共にしない点なども考慮して集石遺構として報告する。

礫群・集石遺構・散礫の 3 者とともに遺構内と遺構間、グリッド間の接合状況を観察した。

##### 1) 磕群

###### SI 1 (第 36 図)

調査区東側の D 7 グリッドと E 7 グリッドの境から検出された。掘り込みは見受けられない。径 1.0m の範囲内に収まり、構成礫は個体数として 101 個となり概ね長さ 8 cm、幅 6 cm 前後の礫が多い。ほとんどが尾鈴山酸性岩類であるが、赤色チャートの礫も 13 点確認された。

接合状況を見ると、SI 1 は SI 7 や SI 8 と接合するものが 3 点ある。3 点中 2 点の接合が赤色チャートで、接合点数も 5 点ずつと尾鈴山酸性岩類の接合よりも 1 個体が接合する点数が多い。

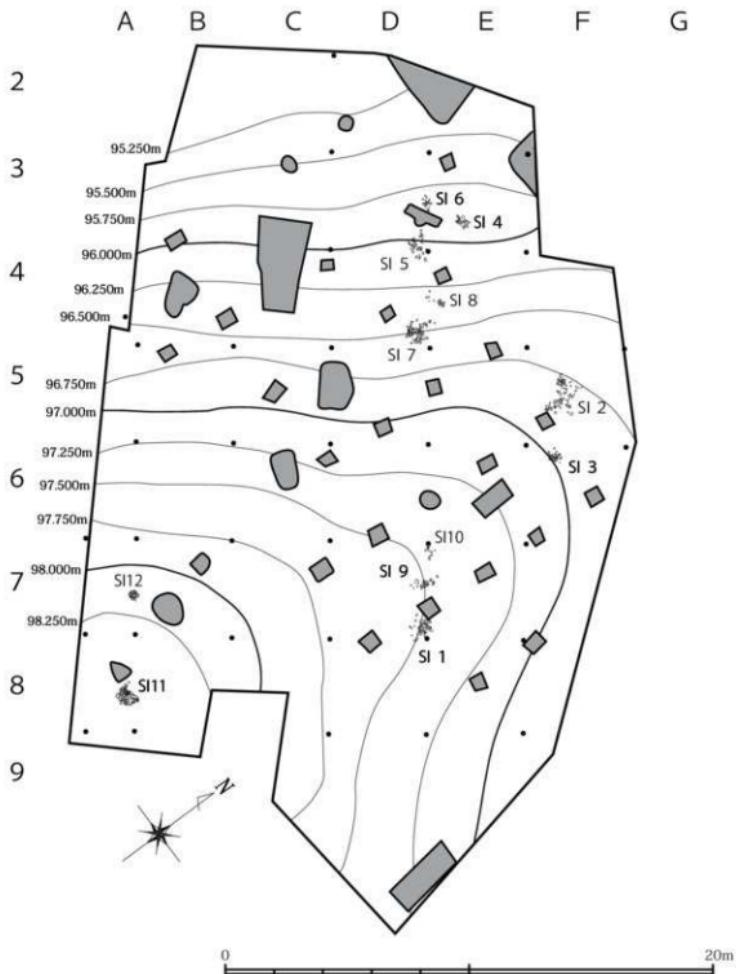
###### SI 2 (第 36 図)

調査区中央の東端の F 5 グリッドから検出された。掘り込みは見受けられない。本遺跡の中では、範囲はもっとも広く、径 1.7 m × 1.6 m となる。構成礫は 101 個体あり、その内 9 点が赤色チャートである。概ね長さ 8 cm、幅 6 cm 前後の礫が多い。

接合する礫が 19 個体分となる。赤色チャートの接合が 1 点あり、やはり SI 1 と同様に、接合点数が 8 点と尾鈴山酸性岩類の接合よりも点数が多い。遺構内や、周辺のグリッドとの接合のみで、他の礫群と接合する礫はない。

###### SI 3 (第 37 図)

SI 2 の南側の F 6 グリッドより検出された。掘り



第35図 遺構分布図 (S = 1/200)

(コンタはAT直上で計測。トーン部分は擾乱。)

込みは見受けられない。遺構範囲は小さく、0.6m × 0.6m程度である。構成個数も多くなく36個体で、全て尾鈴山酸性岩類である。その長さは8cm、幅6cm前後の礫が多い。

5個体分接合したが、全て尾鈴山酸性岩類で、遺構内での接合である。

SI 4 (第37図)

最も東北端のE 3 グリッドより検出された。掘り

込みは見受けられない。遺構の範囲は小さく、0.6 m × 0.5 m程度である。構成礫も少なく24個体で全て尾鉢山酸性岩類である。礫の平均寸法は長さ9 cm、幅7 cm前後と、SI 1からSI 3までの構成礫よりもやや大きく感じられるが構成礫の個体数も少なく、あくまでも平均値のため礫群の形態にさほど変わりはない。

接合資料は5点あり、1点のみSI 5と接合する。

#### SI 5 (第37図)

SI 4の真南のD 3グリッドとD 4グリッドの境から検出された。掘り込みは見受けられない。遺構範囲は1.1 m × 0.8 mである。構成礫数は41個体で全て尾鉢山酸性岩類である。平均寸法は長さ9 cm、幅7 cm前後とSI 4とほぼ同じ構成である。

接合資料は8点あり、前述したSI 4との接合の他に、周辺グリッドとの接合が見られる。

#### SI 6 (第37図)

調査区の最も北側のD 3グリッドから検出された。掘り込みは見受けられない。遺構範囲は0.7 m × 0.4 mと小型だが東西に長い。構成礫は全て尾鉢山酸性岩類で、数も少なく20個体しかない。礫の



第36図 磕群実測図(1) (S=1/20)

平均寸法は、長さ7 cm、幅5 cm前後で本遺跡では最も平均値は小さいが、他の礫群の礫の大きさと比較して極めて小さいわけでもなく、礫群の形態にも変わりはない。

接合資料は、4点あるが遺構内での接合のみである。

#### SI 7 (第38図)

調査区の中央からやや東側寄りのD 4グリッドから検出された。掘り込みは見受けられない。遺構範囲は1.0 m × 1.3 mと本遺跡内では大型の礫群である。

接合状況は、近接するSI 8と多く接合する。また、礫群間では、赤色チャートの碎片がSI 1と接合し、SI 7、SI 9、SI 10の3つの礫群から出土した礫同士

が接合する資料も見られる。

#### SI 8 (第38図)

SI 7の北側のE 4 グリッドより検出された。掘り込みは見受けられない。遺構範囲は 0.9 m × 0.5 m である。

前述のとおり、SI 7との接合が多く、他に SI 1 とも接合する。

#### SI 9 (第38図)

SI 1より北側のD 7 グリッドと E 7 グリッドの間より検出された。掘り込みは見受けられない。大幅に搅乱を受けているため、推定ではあるが遺構範囲は 1.2 m × 0.4 m となる。現存する構成礫数も 11 個体と少ない。その中に 1 点のみ砂岩が含まれる。重量が 1200 g と礫群内で最も大きく、重い。1 個体ごとの平均寸法は長さ 8 cm、幅 6 cm 前後と平均的な数値である。

前述した接合のほかに、D 9 グリッドの 1 点と SI

9 の 3 点が接合する。

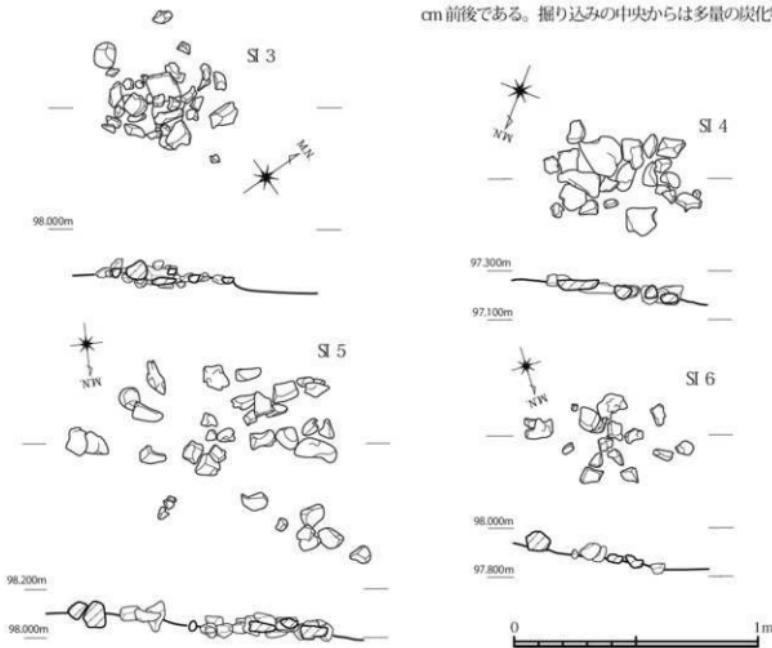
#### SI 10 (第38図)

SI 1 と SI 9 の間に位置する D 7 グリッドと E 7 グリッドの間から検出された。掘り込みは見受けられない。遺構範囲は 0.5 m × 0.6 m である。構成礫数は 23 個体で、尾鈴山酸性岩類の中に 3 点の赤色チャートが含まれる。平均寸法は長さ 10 cm、幅 8 cm 前後である。SI 9 との間に搅乱があるが、極めて近接し、SI 9 と接合する個体もあるため、本来は 1 つの礫群であった可能性も想定できる。

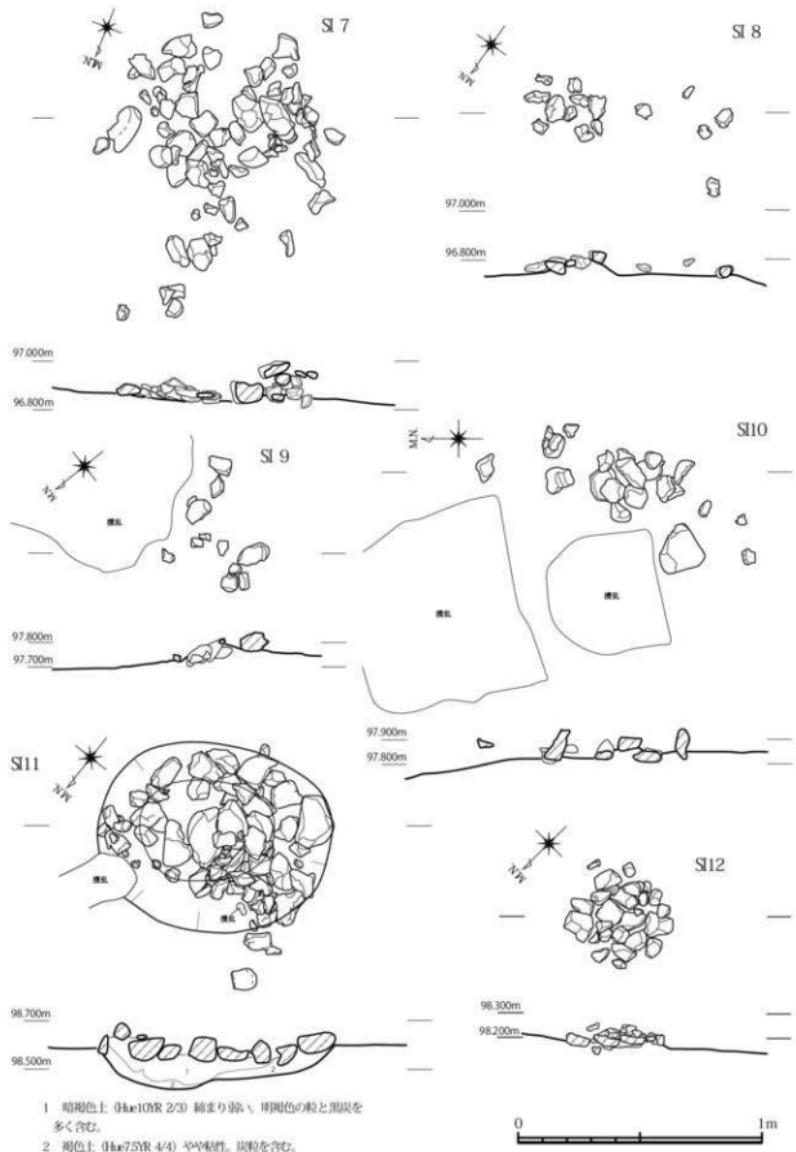
#### 2) 集石遺構

##### SI 11 (第38図)

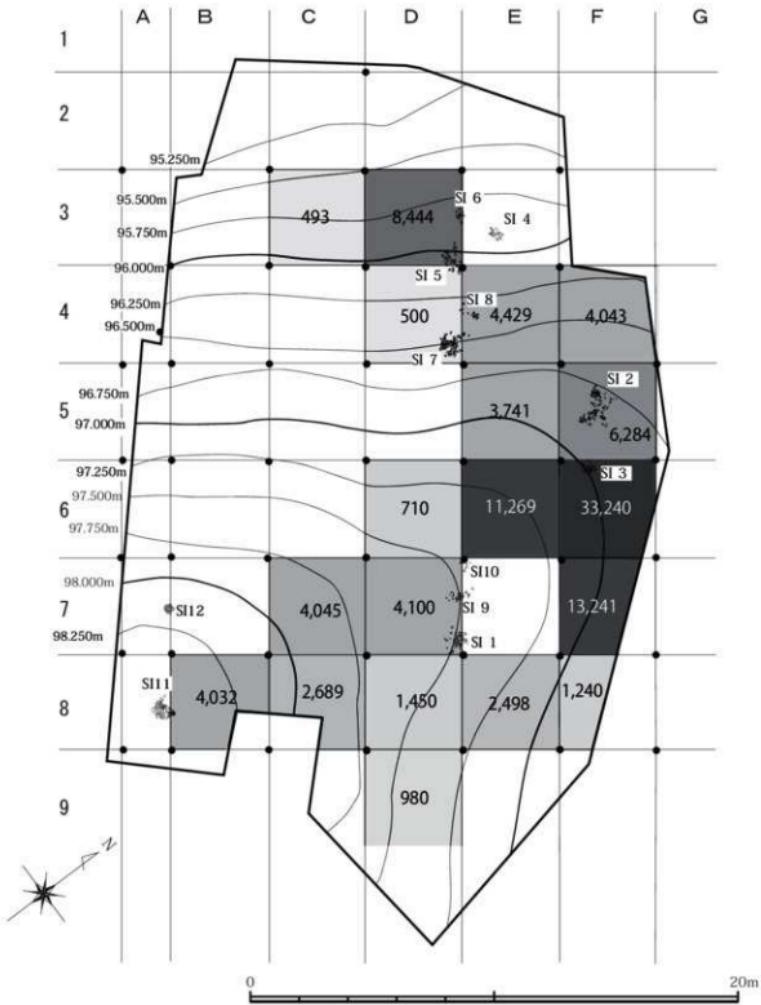
調査区の最も標高の高い南端の A 8 グリッドから検出された。本遺跡内で唯一掘り込みを持つ集石遺構である。遺構範囲は 1.0 m × 1.0 m、掘り込みの深さは 0.2 m である。構成礫数は 153 個体で、全て尾鈴山酸性岩類である。平均寸法は長さ 8 cm、幅 6 cm 前後である。掘り込みの中央からは多量の炭化物



第37図 磕群起測図(2) (S = 1/20)



第38図 磯群実測図(3) 及び集石遺構実測図 (S = 1/20)



第39図 散礫のグリッドごとの総重量模式図(単位はg) (S = 1/200)

が検出された。2試料を自然科学分析にかけたところ、どちらもコナラ属コナラ節という樹種同定結果を得た。

また、これらの炭化物は放射性炭素年代測定(AMS法)から、 $9,210 \pm 60$ 年BP( $8,530 \sim 8,300$ 年)と $9,120 \pm 60$ 年BP( $8,310 \sim 8,270$ 年)の年代値が算出されている。

構成礫数も多量のため、接合点数も必然的に多くなった。しかし、他の遺構との接合ではなく、グリッドで取り上げた礫との接合も1点しかなかった。

#### SI12(第38図)

SI11の西北から検出された。掘り込みは持たないが、円形に整えられた形態で検出された。遺構範囲は $0.5 \times 0.4$ mである。構成礫数は40個体で、全て尾鉢山酸性岩類である。平均寸法は長さ8cm、幅6cm前後とSI11と類似する。礫群の中央より炭化物が検出された。自然科学分析の結果によると、炭化材はコナラ属コナラ節という樹種同定結果を得ている。また、放射性炭素年代測定(AMS法)から、年代値は $9,060 \pm 60$ 年BP( $8,290 \sim 8,240$ 年)と算出されている。

SI12は、第II層検出の中でも最もAT直上から検出された。そのため、調査中は礫群と認定していた。しかし、自然科学分析により約9000年前と算出され、さらに、他の礫群とは離れ、SI11に近接して検出されたこと、礫群と認定するには遺構自体が整っており、礫に配列性が見られるため、本報告では集石遺構と修正した。

遺構内の接合は9点と、遺構の規模としては多いほうであった。しかし、他の遺構やグリッドで取り上げた礫との接合はない。

#### 3) 散礫(第39図)

$4m \times 4m$ のグリッドごとに取り上げ、計測した。第39図はグリッドごとの総重量である。

主に、散礫が検出したのは、D3グリッドとE4～6グリッド、F4～7グリッドの緩やかに傾斜する東側半分である。これらグリッドの礫は整理の結果、前述した礫群と接合するものが多く、旧石器時代の礫群に伴う遺構と思われる。

D3グリッドには29個体の礫があり、そのうち

2点が赤色チャートであった。残りは全て尾鉢山酸性岩類で、平均すると長さ8.5cm、幅6.1cmである。接合関係を見ると、E4グリッド1点、F4グリッド2点の礫と接合する。

E4グリッドは、109個体の礫が出土した。そのほとんどが尾鉢山酸性岩類の礫であるが、7点だけ赤色チャートが含まれる。礫の大きさは平均すると長さ7.9cm、幅5.7cmである。E4グリッドは、出土した礫が小礫のため重量は軽いが、数多くの礫が出土し、接合状況も様々なケースが見られた。グリッド間接合で最も多かったのが、F4グリッドとの接合であり、元は1つの集合体であった可能性がある。

また、E4グリッドは、礫群との接合も多く見られた。SI5とE4グリッド、F4グリッドから出土した14個体が1つに接合した。他にもSI2、SI6、SI7、SI8とそれぞれ接合したり、SI7、SI8とE4グリッドから出土した9個体やSI8とD4・E4・F4グリッドから出土した6個体が1つに接合した。

F4グリッドは、個体数として最も多い109個の礫が出土した。平均して長さ8.3cm、幅6.1cmの大きさの礫が出土し、ほとんどが尾鉢山酸性岩類だが、赤色チャートが4点、砂岩とホルンフェルスが1点ずつ含まれる。個体数が多いため接合する数は最も多いが、接合できる礫の範囲はほとんどが同グリッド内に収まる。E4グリッドで前述した個体以外にグリッド間で接合する礫はない。礫群と単独で接合するものも、SI8と接合するたった1点のみである。破碎した礫が最も多く出土したにしては、礫の大きな移動が見られないグリッドである。

E5グリッドからは、13個体の尾鉢山酸性岩類が出土した。大きさは長さ7.8cm、幅6.3cmで、接合は見られない。

F5グリッドは、中央からSI2が検出されたグリッドである。総重量は重いが、個体数は12個と少數である。長さ9.3cm、6.3cmと比較的大きな尾鉢山酸性岩類である。たった12点しか出土していないが、グリッド内で接合する礫や、SI2やSI7と接合する礫などがある。

E6グリッドは、24個体の礫が出土した。尾鉢山酸性岩類の中に5点のみ赤色チャートが含まれる。

平均の長さ 86cm、幅 6.5cm で、総重量も重いほうである。グリッドの位置も礫群が輸出される範囲の中心にあり、多くの礫群間やグリッド間の接合が期待されたが結局 E 6 グリッドの礫 2 点と F 6 グリッドの礫 1 点の 3 点が接合したのみである。

F 6 グリッドは、最も出土した礫の総重量が重い。しかし、個体数は、62 個と F 4 グリッドの 1/3 も出土しなかった。大きさは平均して、長さ 90cm、幅 64cm と大きいほうである。同グリッド内で 2 点ずつの接合が目立つ。礫群と接合するものではなく、F 6 とグリッド間で接合する礫は、F 7 や F 8 グリッドなどの全て F 6 グリッドよりも高いレベルから出土した礫である。

C 7 グリッドからは、22 個体出土した。全て尾鉢山酸性岩類である。平均の長さ 66cm、幅 48cm と最も小型の礫になる。C 7 グリッド内での接合は 3 点ほどあり、SI 2 の礫 3 点と接合する礫が 1 点だけ見られる。その他の接合はない。

D 7 グリッドは、平均の長さ 96cm、幅 64cm と比較的大きな礫が出土する。総個体数は 17 点で全て尾鉢山酸性岩類である。グリッド付近には SI 1・SI 9・SI 10 が存在する。そのため、SI 9 の 3 点と D 7 グリッドの 1 点が、SI 10 と D 7 グリッドの 1 点ずつがそれぞれ接合した。グリッド間では F 7 グリッドと接合している。D 7 グリッドより東側に存在する礫群やグリッドと接合する傾向にある。

F 7 グリッドは、総個体数 36 点中 2 点が赤色チャートで、残りは尾鉢山酸性岩類である。グリッド内での接合はいくつかあるものの、礫群や他のグリッド間との接合は、前述した F 6 グリッドと D 7 グリッドのみである。

B 8 グリッドは西側に集石遺構が存在する。個体数 48 個と数は比較的多いが、総重量も軽く、礫の大きさも平均して、長さ 7.6cm、幅 5.7cm と小型な方に分類される。当然、SI 11 との接合は見られる。他に、SI 1 とも接合する。グリッド間接合では、D 8、E 8 グリッドの B 8 グリッドよりも東側に位置するグリッドとの接合が見られるが、すぐ隣の C 8 グリッドの礫とは接合しなかった。

C 8 グリッドは 7 点しか出土しなかったが、総重

量が重く、平均の長さ 9.6cm、幅 6.5cm と 1 点 1 点が大きな礫である。1 点のみ赤色チャートで他は尾鉢山酸性岩類である。個体数が少ないため接合も SI 11 の 3 点と C 8 グリッドの 1 点が接合したのみである。

D 8 グリッドは尾鉢山酸性岩類 4 点の出土である。大きさの平均は、長さ 7.9cm、幅 6.9cm である。前述した C 8 グリッドとの接合のほかに、D 9 グリッドとも接合する。

E 8 グリッドは、出土した 9 点の礫のうち、4 点が赤色チャートの石材である。平均した大きさは、長さ 7.8cm と幅 6.2cm である。接合は前述した B 8 グリッドのみである。

F 8 グリッドの面積は他のグリッドの半分しかない。そのため総重量も軽く、4 点しか出土していない。しかし、平均した長さ 9.0cm、幅 6.6cm と 1 点 1 点の礫は大型である。礫群やグリッド間の接合はない。

### 3 旧石器時代終末期～縄文時代早期の遺物

II 層から計 246 点の石器が出土している（第 40 図）。尾立第 3 遺跡は製品の数が少なく、22 点のみ確認される。そのうち、旧石器時代終末期～縄文時代草創期の製品と思われるものは、19 点である。内訳は、細石刃石核が 4 点、搔器が 1 点、ナイフ形石器が 9 点、角錐状石器が 3 点、台形石器が 2 点、石鏃が 2 点、敲石が 1 点、石核が 20 点、二次加工有る剥片が 2 点、剥片が 179 点である。そのうち、41 点を図示した。

前述のように本遺跡は堆積層が薄く、また上器も伴わないので遺物自身では所産時期の特定が困難である。以下、所産時期を問わず個別に説明を加える。

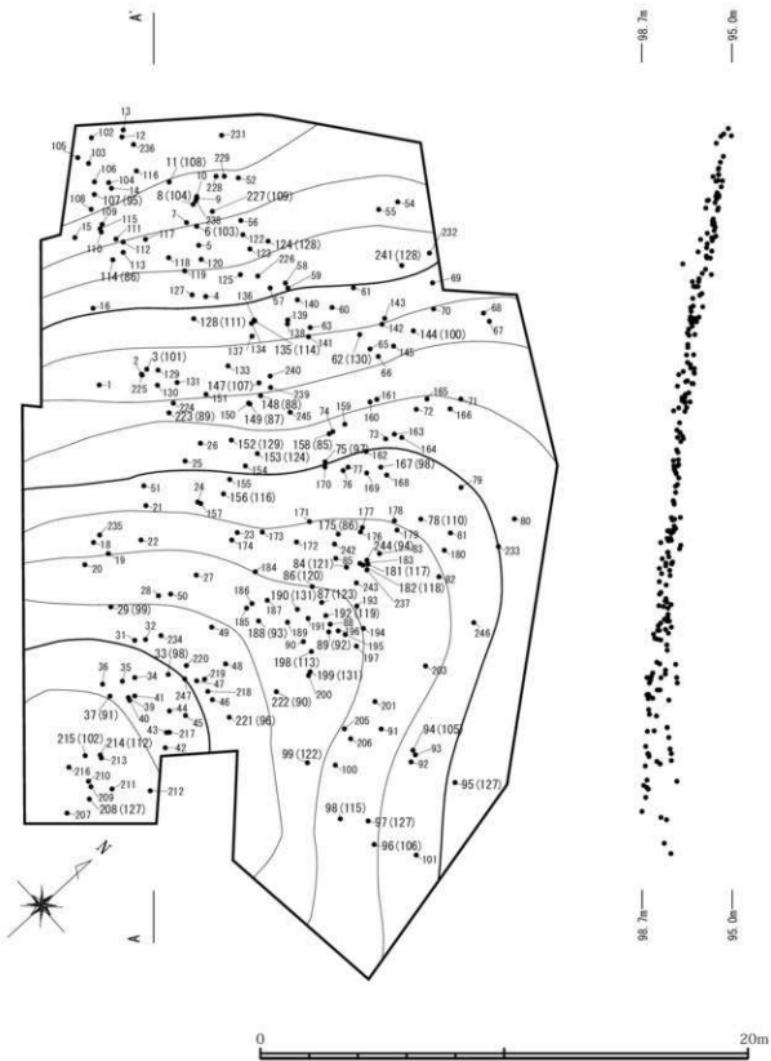
#### 角錐状石器（第 41 図 84～86）

全部で 3 点出土しているが、製品は 84 だけである。白色流紋岩を用い、瀬戸内技法によって剥離された横長剥片素材から製作している。

86 は先端部のみの出土である。緑色チャートの石材を利用して製作されている。

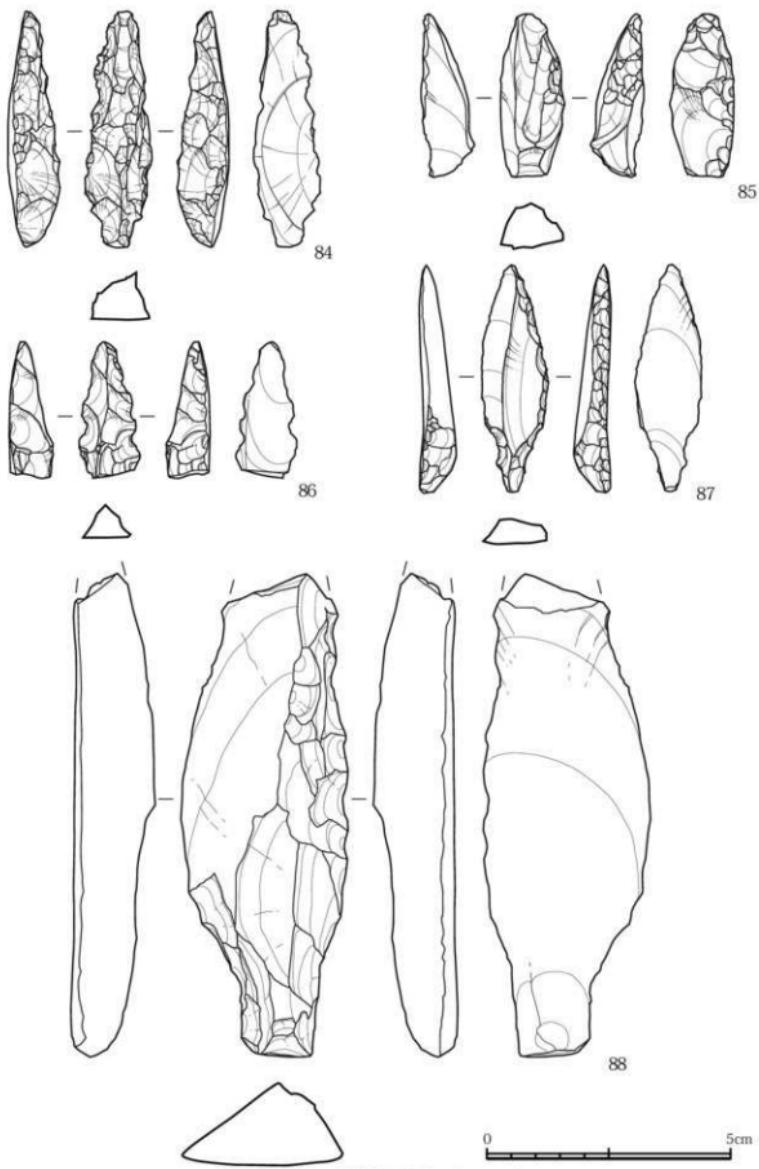
#### ナイフ形石器（第 41 図 87・88、第 42 図 89～95）

先端部もしくは末端部のみの出土、未製品を含め

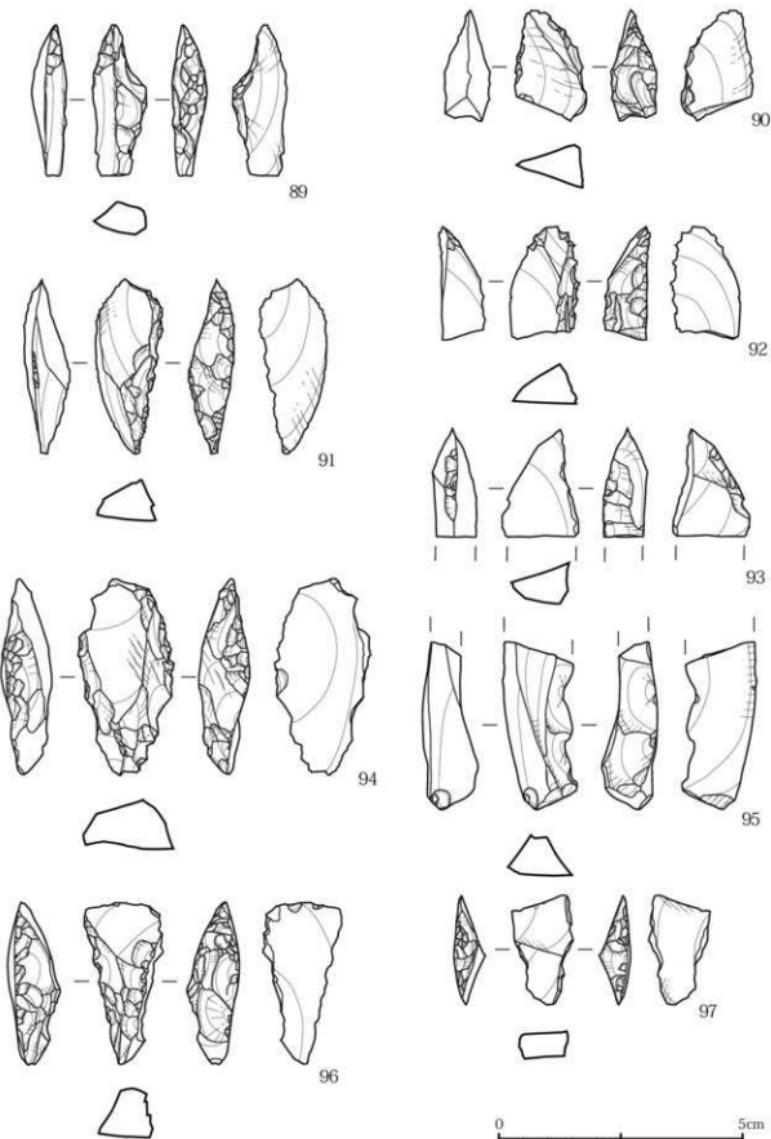


第40図 石器出土分布図 ( $S = 1/200$ )

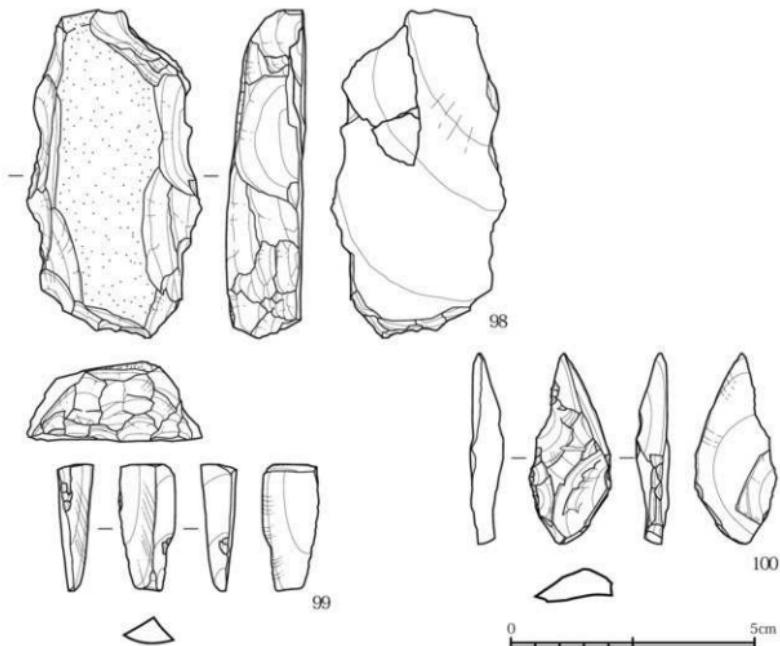
(遺物番号は調査井の取り上げ順。石器調査表の「遺物NO.」に対応する。括弧は井戸No.)



第41図 出土石器実測図(1) (S = 1/1)



第42図 出土石器実測図(2) (S = 1/1)



第43図 出土石器実測図(3) (S=1/1)

て9点出土している。製品は87のみである。径の最も大きい88のナイフ形石器のみ縦長剥片素材を利用したホルンフェルス製のナイフ形石器で、他の8点はすべて瀬戸内抜法よるいわゆる国府型ナイフである。

#### 台形石器(第41図96・97)

2点出土している。いずれも瀬戸内抜法によって剥離された横長剥片素材から製作している。

#### 搔器(第43図98)

1点のみ出土している。ホルンフェルス製の縦長で厚手の剥片を素材とし、正面と頭部に礫面を残す。主に末端部にスクレイバーエッジを配置しているが、両側面にも背面から二次加工が加えられている。

#### 二次加工剥片(第43図99・100)

明確な二次加工の有る剥片のみ選定した。2点出土しているが、いずれもナイフ形石器の製作途上ま

たは失敗品である可能性が高い。

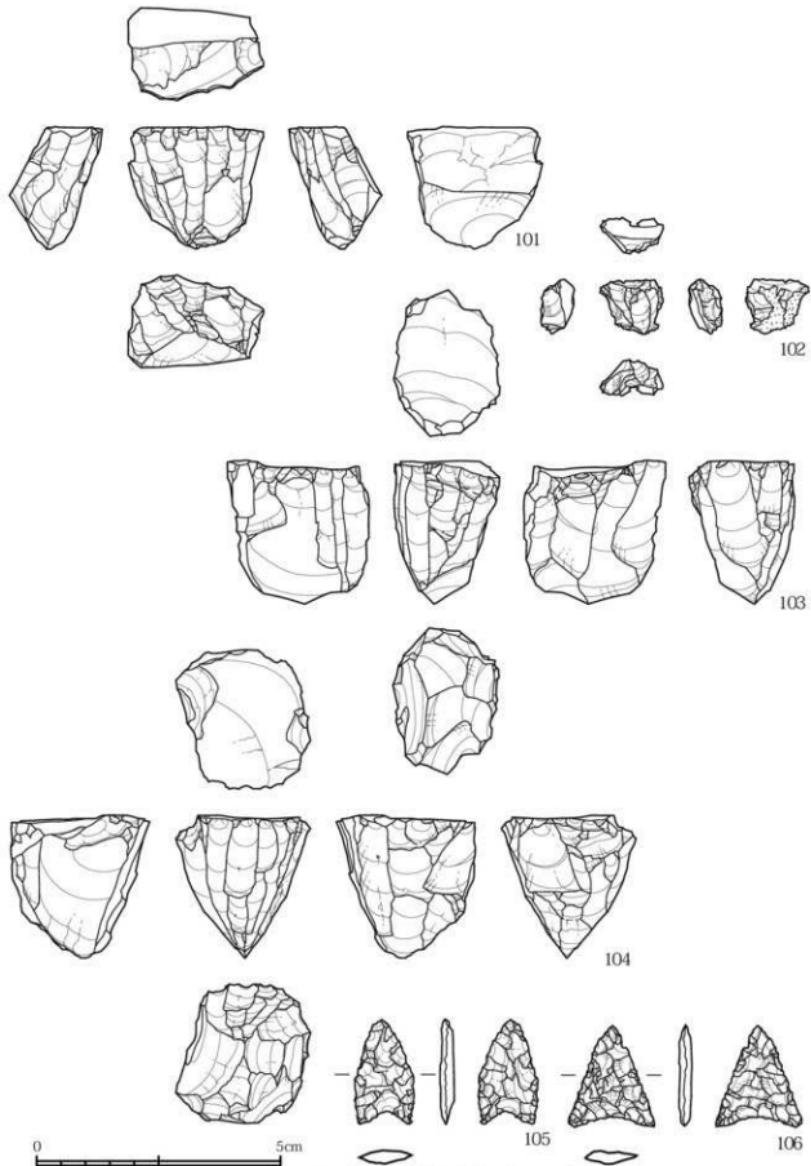
#### 細石刃核(第44図101~104)

4点出土している。うち1点は黒曜石利用の細石刃核(102)で極小片になるまで利用されている。他の3点はいずれも黒色チャート石材を利用した細石刃核(101, 103, 104)である。しかし、101は背面に礫面を残し、正面から側面にかけて細石刃剥離作業面を設定している。

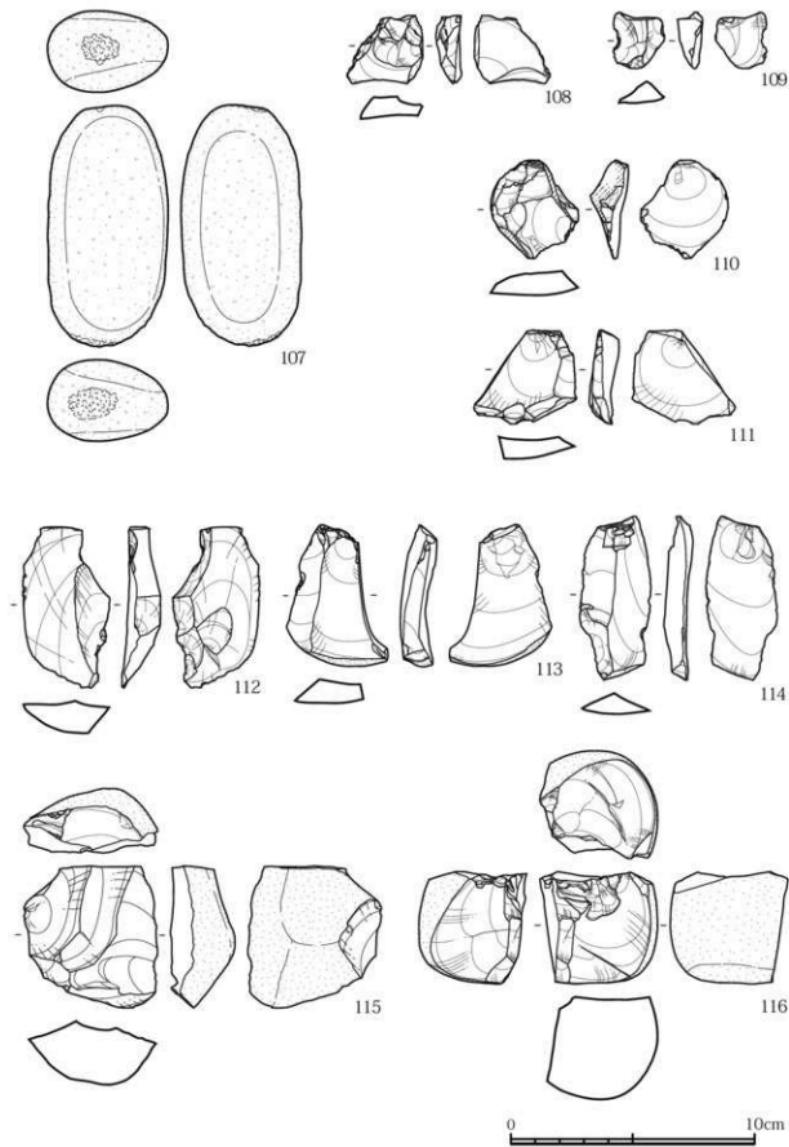
一方、103・104の2点は主要剥離作業面を側面とし、形態が逆円錐状を呈する船型型の細石刃核核といえる。104の黒色チャートの透過度は低い。

#### 石鏃(第44図105・106)

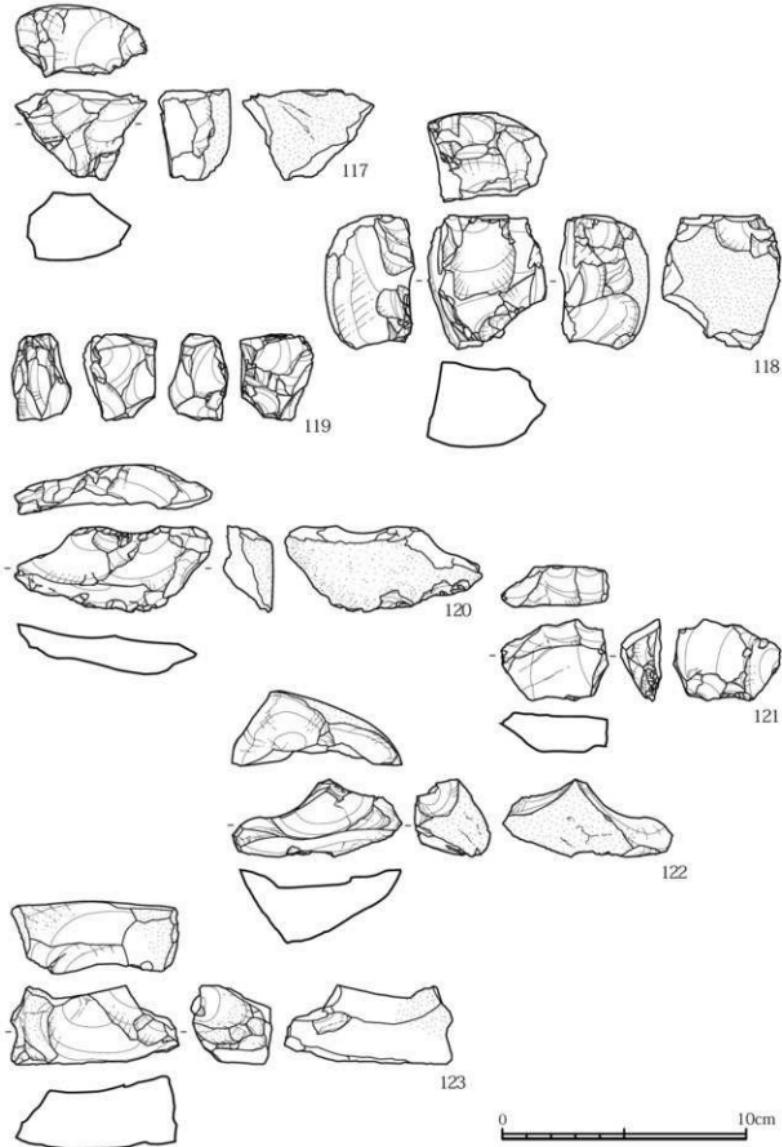
2点出土しているが、いずれも打製石鏃である。石材は玉髓(105)と淡い緑色チャート(106)を用いている。105は平面形が二等辺三角形に近似し、浅い抉りを有する。宮崎県阿蘇原上遺跡の石鏃類



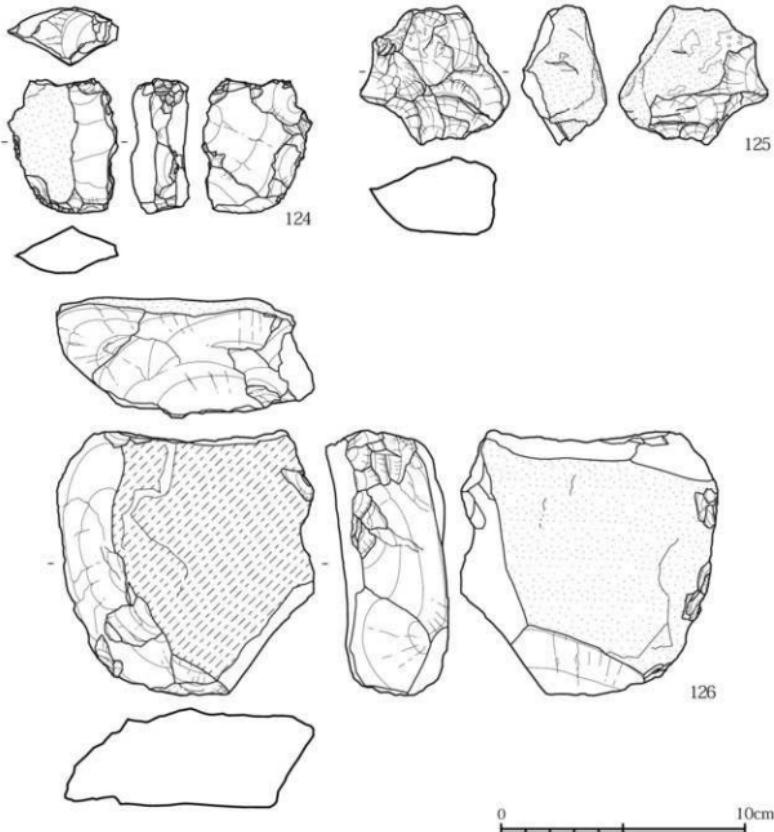
第44図 出土石器実測図(4) (S = 1/1)



第45図 出土石器実測図(5) (S = 1/2)



第46図 出土石器類別図(6) ( $S = 1/2$ )



第47図 出土石器絵図(7) ( $S = 1/2$ )

に属する。106は平面形が略正三角形を呈し、浅い抉りを有する。阿蘇原上遺跡の石器I類に属する。

本遺跡から出土した2点は平面形態は若干異なるが、大きさは長さ、厚さともに類似する。出土地は近接し、遺跡内の頂上部南東側より出土した。ほぼ同時期に製作されたものと捉えられる。その形態から、縄文時代草創期に近いⅣ期に帰属する可能性が高い。

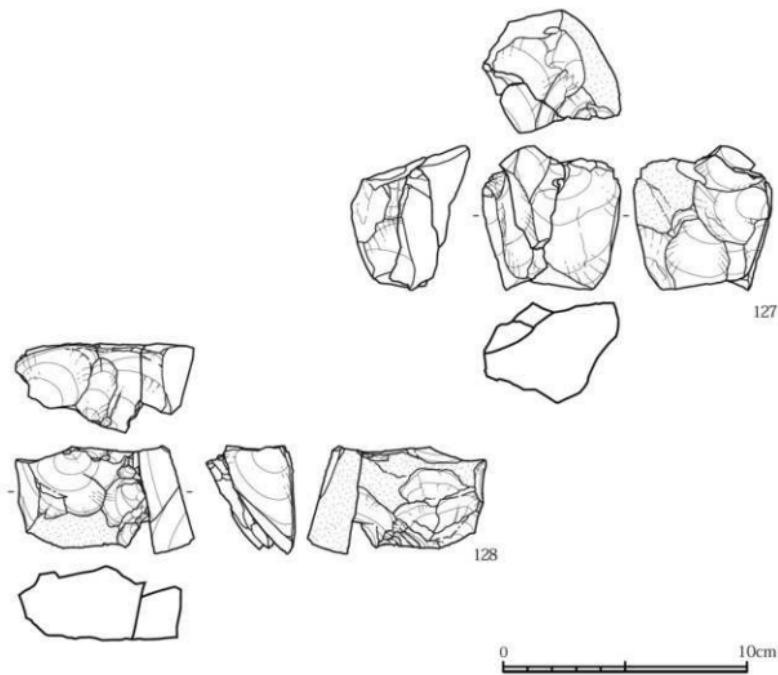
#### 敲石 (第45図 107)

尾鉛山酸性岩類製の細長形の棒状に成形された敲

石が1点出土した。頭部と底部に敲打痕が見られる。SI 7付近から出土した。

その他の石器 (第45図 108~116、第46図 117~123、第47図 124~126)

石核、剥片などが出土した。109は緑色チャートを利用した剥片素材である。112は茶色流紋岩を利用し、瀬戸内技法によって加工された翼状剥片である。圓化した上面は礫面を残す。ナイフ形石器の素材剥片と思われるが、加工を施した痕跡は見受けられない。113 (黒色流紋岩)、114 (茶色流紋岩) は



第48図 出土接合石器実測図 ( $S = 1/2$ )

共に縦長剥片で流紋岩を利用している。113は底面が礫面である。114は基部を作り出そうとする加工が見られる。

本遺跡は、剥片よりも石核と判断される石器が多く出土している。115から118までは、黒色もしくは茶色流紋岩を利用した石核である。これらの石核は、頭部を打面調整しており、上面からの剥離が多い。また、背面や底面に礫面が残される。120、122、123は、漸戻内抜法を変化させたような抜法を用いて加工された翼状剥片の石核である。120と121は緑色チャートを利用した石核で、この2点は近接して出土しており、同一母岩の石核と思われる。

124は珪質頁岩系のチャートを利用した石核である。また、本遺跡からは123、125、126などの尾

鈴山酸性岩類を用いた石核や大形の剥片も多く出土する。126は側縁を剥離した石核で、SI 2を構成する礫の1つとしてSI 2の端から出土した。

#### 接合石器（第48図 127・128）

ほとんど接合する資料が見られなかった。その中で図化したものは2点である。127は、3点が接合する、尾鈴山酸性岩類製の接合資料である。背面に礫面を残す石核から、上下面から剥片を剥離している。128は頁岩石材の接合資料である。2点接合した。背面に礫面を残している。石核となる方は、頭部を打面調整し、上面から正面、左右側面の三側面に剥離が行われている。背面は礫面である。

## 第4節まとめ

### 1 散礫の検出状況と復元

地形に沿って北側に下降していくにつれ、礫の総重量も増えている。これは、検出された礫群が、山の傾斜により本来の原位置から多少移動している可能性をも予見している。また、注目できる結果として、F 4 グリッドは総重量は少なかったが、個体数は191個と最も多い数の礫が検出された。F 4 グリッドは調査区で最も北に位置し、尾根全体を見てもF 4 グリッドに向かって傾斜する地形になっている。そのため、重量は軽くとも数多くの礫が検出されたものと思われる。

斜面地において、礫の流動は重量の軽いものよりも、砂粒との摩擦が激しくなる重量の重い礫のほうが大きく移動するという（明治大学校地内遺跡調査田原仁尊氏教示による）。

それぞれのグリッドを見てみると、E グリッドから出土した礫の平均の法量よりも、地形が下降するF グリッドの方が平均して法量が1cm 程大きい。集石構造が検出した周辺も同様にB 8 グリッドよりもC 8 グリッドから出土した礫の方が平均して2cm 大きいとの結果が出た。F 4 グリッドは数は多いが、他のF グリッドに比べて小礫ばかりが出土したので、調査区外となっているF 4 グリッドよりもさらに北側の土地に、礫群から移動した巨礫が留まっていると予想できる。小礫とは言え、隣のE 4 グリッドよりは平均して大きな礫が出土しており、他のグリッドと検出した様相に変わりはない。

また、E 4 グリッドのある標高9650m 付近からは、北西側に向かっても下降している。D 3 グリッドから出土する礫は、E 4 グリッドよりも平均して大きな礫が検出される。接合状況もE 4 グリッドとF 4 グリッド、D 3 グリッドの礫が接合する場合が多く、元々これらのグリッドの礫は1箇所に集中していたものと思われる。よって、D 3 やF 4 から出土する礫は、本来この場所にはなく、E 4 よりももっと山頂寄りから移動してきたものではないかと推察する。

### 2 磕群と立地環境

尾立第3遺跡から検出された礫群、集石構造は、遺構範囲が1m 前後的小規模な遺構ばかりである。遺跡の地形も山の中腹の傾斜地で人間の生活空間としては、適さないように思う。

しかし、わずか1,000m<sup>2</sup>の調査面積の中に、12基もの遺構が確認された。石器も約250点ほど出土し、短時間であるかもしれないが、そこには人が存在していた痕跡が見える。遺跡のいたる所に巨礫が点在しており、調査に入る前からそれらの巨礫は、表土に露出していた。AT 層まで掘削してもそれらの巨礫はしっかりと土層に埋っており、全く動かなかった。おそらく旧石器時代からこれらの巨礫は存在し、旧石器時代の人々は、この巨礫に腰をかけながら石器製作に講じていたのではないだろうか。

わずか、数百メートル離れたところの、大師山の山裾から延びる台地に朝倉遺跡が所在する。朝倉遺跡は、主に旧石器時代から縄文時代早期までの遺構・遺物が確認された大規模な遺跡である。礫群や集石構造の規模も、尾立第3遺跡の比ではなく、範囲が3m 前後に広がる礫群も検出される。石器もチップが集中して出土した地点などがあり、石器製作場所として拠点的な空間であったことが窺える。

一方、尾立第3遺跡は、ある短い時期に朝倉遺跡の副次的空間として活用されたことが想定される。しかし、これを証明するためには、今後、朝倉遺跡との遺跡間接合を試みる必要があるだろう。

本遺跡は、地形は傾斜しているが、大師山の北側に舌状に延び、日当たりはかなり良好である。これまで、旧石器時代の人々は、台地に好んで生活していたと考えられてきた。だが、今回の調査で、地形が平坦であるか否かはそれほど拠点条件として優位ではないように思われた。むしろ、礫群・集石構造を構築する上でも重要な、日照時間などの他の条件によって選択されていたのではないかだろうか。

## 第Ⅳ章

### 石器の遺跡間接合～おわりに代えて～

朝草原遺跡と尾立第3遺跡は、ほぼ同時に現地調査を開始し、整理作業も同時に進められた。それによって、より広い視野で遺跡の立地環境を捉えることができたよう思う。

本遺跡では、整理作業として2遺跡から出土した石器の遺跡間接合を試みた。当初、遺跡の活動時期に若干の差異が見られたため、半信半疑のまま作業を進めた。予想通り、共に包含層から出土した石器の接合は見られなかった。しかし、朝草原遺跡A区の表剥片と尾立第3遺跡の包含層から出土した剥片が、数點接合した（第49図128～130）。

次ページに掲載した図面が、遺跡間で接合した石器の全てである。3点接合し、石材は全て白色の流紋岩である。意識された剥離は3点ともに見られないと、接合資料としては決して重要視されるものではない。しかし、山の反対側という、一定の空間を隔てた別の場所から出土したことに関して言えば、その歴史的背景を推察するのに十分な資料となるだろう。

129と130は3点の剥片が接合している。どちらも核となるような比較的大きい剥片が尾立第3遺跡から出土し、その剥片から剥離した小剥片が朝草原遺跡から出土した。

3点に共通して見られる特徴は、尾立第3遺跡から出土した剥片よりも朝草原遺跡A区から出土した剥片の方が、全ての剥片において白色流紋岩の表面の色が黄色みかかっていた。これは、耕作土から出土したがために黒褐色土の色素が沈着し、変色したためと思われる。この他に、同じく朝草原遺跡A区の耕作土から黄色みかかった白色流紋岩の剥片が表採されており、おそらく同一母岩の剥片である。

では、なぜ耕作土から出土するのだろうか。これがもし1点でも朝草原遺跡の包含層から出土していれば、石器製作時期における人間の行動と生活環境について述べることができたのかもしれないが、尾立第3遺跡は包含層から出土し、朝草原遺跡は耕作

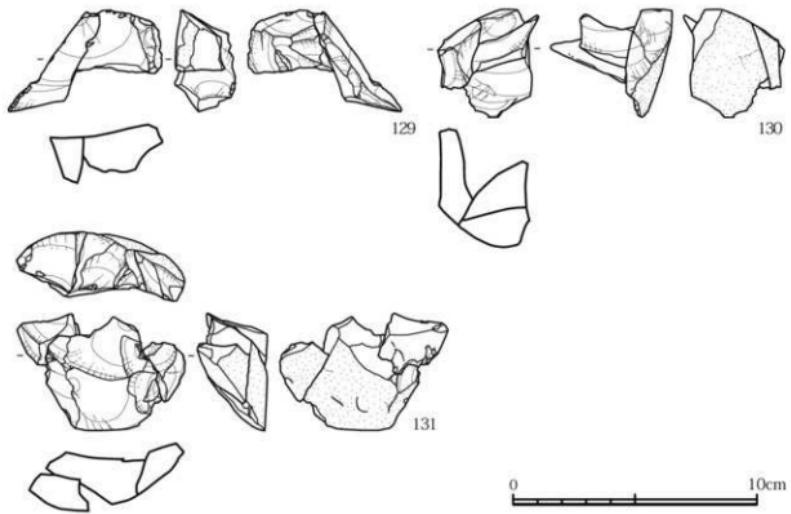
### おわりに

土から出土するというはっきりとした事実がある。また、接合したこれらの資料は、前述したとおり、意図的な剥離は見られない。そのため、わざわざ製作場所を移動して剥離作業を行っているとは考えづらい。このことから、朝草原遺跡の耕作土から出土した剥片も、本来は尾立第3遺跡内で剥離され、放置されていたものと思われる。

ここで思い出されるのが、尾立第3遺跡の堆積層の薄さである。表土を除去するとすぐにAT上層の褐色土層が出現する。KAhも見られない。本調査除外区となった場所からは良好なKAhの堆積も見られたので、元は今回の調査区にも褐色土層よりも上層が堆積していたはずである。

ここからは全く推察の域だが、もしかしたら尾立第3遺跡の褐色土よりも上層の部分は、朝草原遺跡に運ばれたのではないだろうか。朝草原遺跡は、現在は耕作地であったため平坦に整地されている。しかし、調査を進めていくと、本調査除外区となつた遺跡の中心地に向かって緩やかに傾斜することがわかつた。この傾斜をなくし、耕作地として整地する時に、大師山の中腹に位置する尾立第3遺跡の土が使われたのではないだろうか。

朝草原遺跡がいつ頃耕作地として整地されたのか、詳しいことは不明である。今後、聞き取り調査などをを行うことによって、より詳しい情報が得られるであろう。今回、旧石器時代の人間行動を知ることはできなかつたが、考古学を通じて、近・現代の人々と、都農町の歴史と発展が垣間見えた。



第49図 遺跡間接合石器実測図 ( $S = 1/2$ )

第3表 尾立第3遺跡石器観察表

レコード No.	出土 場所	層	遺物 No.	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
84	D6	II	175	白色流紋岩	角錐状石器	4.9	1.4	1.2	5.7	横長剣片素材。
85	D5	II	158	黒色流紋岩	角錐状石器	3.2	1.4	1.1	4.4	縦長に調整。背面は不整形。
86	B3	II	114	青色チャート	角錐状石器	2.7	1.4	1.1	2.1	先端部のみ。
87	D5	II	149	茶色流紋岩	ナイフ形石器	4.6	1.5	1	3.5	左側面は基部のみ加工。
88	D4	II	148	ホルンフェルス (砂岩系)	ナイフ形石器	9.7	4	1.9	58.1	左側面は基部のみ加工。先端部欠損。
89	C5	II	223	白色流紋岩	ナイフ形石器	3	1.2	0.8	1.8	横長剣片素材。
90	D8	II	222	茶色流紋岩	ナイフ形石器	2.1	1.6	1.2	2.1	横長剣片素材。先端部のみ。
91	B7	II	37	黒色流紋岩	ナイフ形石器	3.5	1.5	1	3.7	国府型。先端部欠損。
92	D7	II	89	黒色流紋岩	ナイフ形石器	2.8	1.5	1.1	2.4	先端部のみ。
93	C7	II	188	黒色流紋岩	ナイフ形石器	2.1	1.6	1.1	2.1	先端部のみ。
94	E6	II	244	白色流紋岩	ナイフ形石器	3.9	2.2	1.2	6.7	横長剣片素材。先端部欠損。
95	B2	II	107	白色流紋岩	ナイフ形石器	3.5	1.6	1.3	4.7	横長剣片素材。先端部欠損。
96	C8	II	221	黒色流紋岩	台形石器	3.2	1.6	1.2	4.2	
97	D5	II	75	黒色流紋岩	台形石器	2.2	1.5	0.8	1.4	
98	B7	II	33	ホルンフェルス (砂岩系)	スクレイバー	6.7	3.6	1.8	46.9	
98	E5	II	167	ホルンフェルス (砂岩系)	剣片	1.3	2.5	0.5	0.8	遺物 No.33 に接合。
99	B6	II	29	尾鈴山酸性岩類	二次加工剣片	2.1	1.3	0.8	1.9	左側面に微細な剝離。上部欠損。
100	E4	II	144	尾鈴山酸性岩類	二次加工剣片	3.5	1.8	0.8	3.1	横長剣片素材。
101	C4	II	3	黒色チャート	細石刃核	2.7	2.9	1.7	13.2	船野型。背面は碟面。
102	B8	II	215	黒曜石	細石刃核	1	1.4	0.9	0.7	野岳・休憩型。
103	C3	II	6	黒色チャート	細石刃核	2.9	2.4	3	20.1	船野型。背面は碟面。
104	C2	II	8	黒色チャート	細石刃核	2.9	2.6	3.1	21.5	船野型。
105	E8	II	94	玉筋	打製石器	2	1.4	0.5	0.7	抉りは浅く、二等辺三角形を呈する。
106	D9	II	96	緑色チャート	打製石器	2	1.9	0.5	0.7	抉りは浅く、正三角形を呈する。
107	D4	II	147	尾鈴山酸性岩類	敲石	10	5.2	3.4	230.7	頭部と底部に敲打痕が見られる。
108	C2	II	11	灰色流紋岩	剣片	2.8	3.3	1.2	7.9	横長剣片。
109	C3	II	227	青色チャート	剣片	2.1	2.2	1.2	3.8	横長剣片素材。
110	E6	II	78	茶色流紋岩	剣片	4	3.8	1.6	13.9	横長剣片。
111	C4	II	128	白色流紋岩	剣片	3.8	4.3	0.8	16.2	横長剣片。底部からの微細な調整あり。
112	B8	II	214	茶色流紋岩	剣片	6.5	3.7	1.1	28.4	翼状剣片。側面は碟面。
113	D7	II	198	黒色流紋岩	剣片	5.6	4.4	1.5	28.8	縦長剣片。底面は碟面。
114	D4	II	135	茶色流紋岩	剣片	6.6	3.1	1.2	17.1	縦長剣片。
115	D9	II	98	黒色流紋岩	石核	5.6	5.5	2.6	85.6	頭部調整あり。縦長剣片の剥離痕。背面は碟面。
116	C5	II	156	黒色流紋岩	石核	4.6	5.6	4.7	146.6	頭部調整あり。背面は碟面。
117	E6	II	181	灰色流紋岩	石核	3.6	5.5	3.3	54.9	頭部調整あり。背面は碟面。
118	E6	II	182	茶色流紋岩	石核	3.6	5.6	4.8	124.1	頭部調整あり。四側面から剝離。底面は碟面。
119	D7	II	192	白色流紋岩	石核	3.4	3.2	2.5	24	
120	D6	II	86	青色チャート	石核	3.4	8.2	2.1	44.9	瀬戸内技術の石核。背面は碟面。
121	D6	II	84	青色チャート	石核	3.2	4.4	1.8	23.6	瀬戸内技術の石核。
122	D8	II	99	白色流紋岩	石核	3.1	7	2.9	45.4	瀬戸内技術の石核。背面は碟面。
123	D7	II	87	尾鈴山酸性岩類	石核	3.8	6.9	3.1	81.3	
124	D5	II	153	チャート (珪質 頁岩系)	石核	5.3	3.5	2.6	59.8	頭部調整あり。縦長剣片の剥離痕。背面は碟面。
125	D6	II	172	尾鈴山酸性岩類	石核	5.3	6.2	3.3	102.6	背面は碟面。
126	B2	II	S12	尾鈴山酸性岩類	石核	11.4	10.9	4.3	704.7	側縁から剝離。S12 の構成種。
127	E9	II	95	尾鈴山酸性岩類	剣片	4.6	2.5	1.1	13.8	縦長剣片素材。
127	D9	II	97	尾鈴山酸性岩類	剣片	4.1	2.5	1.8	11.6	縦長剣片素材。
127	B8	II	208	尾鈴山酸性岩類	石核	5.3	5.3	3.1	113	上面と底面からの剝離。背面は碟面。
128	D3	II	124	頁岩	剣片	4.5	1.7	2.6	23.4	背面は碟面。
128	E3	II	241	頁岩	石核	4.3	5.1	3.4	84.1	頭部調整あり。背面は碟面。
129	C5	II	152	白色流紋岩	剣片	5.3	2.5	2	14.5	朝草原A区表採と接合。
130	E4	II	62	白色流紋岩	石核	4.5	3.2	1.5	21.5	朝草原A区表採と接合。
131	D7	II	190	白色流紋岩	剣片	2.5	3	1.8	11.1	朝草原A区表採と接合。
131	D7	II	199	白色流紋岩	石核	5.7	4.6	2.2	48.4	朝草原A区表採と接合。

レバケ No.	出土 場所	層	遺物 No.	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
B4	II	1	ホルンフェルス (灰色)	剥片		1.6	2	0.5	1.6	小剥片。上面打面は穧面。
B4	II	2	ホルンフェルス (灰色)	剥片		2.1	1.3	0.3	0.7	小剥片。
C3	II	4	ホルンフェルス (黄色)	剥片		1.9	2	0.5	2.2	縦長剥片素材。
C3	II	5	黒色流紋岩 (黄色)	剥片		3.3	2.4	0.8	6.2	縦長剥片素材。
C3	II	7	灰色流紋岩	剥片		2.4	1.2	0.7	1.1	
C2	II	9	灰色流紋岩	剥片		4.3	3.2	0.8	13.3	縦長剥片素材。左側面に穧面を残す。
C2	II	10	白色流紋岩	剥片		2.3	1.5	0.5	1.2	
C2	II	12	黒色流紋岩	剥片		6.9	3	2	27.1	縦長剥片素材。243と接合。背面は穧面。
C2	II	13	白色流紋岩	剥片		1.9	3.5	1.4	9.3	遺物No.225と接合。
B2	II	14	灰色流紋岩	剥片		1.6	1.5	0.6	1.1	小剥片。
B3	II	15	ホルンフェルス (灰色)	剥片		1.7	2.5	0.5	1.5	小剥片。遺物No.16.47と接合。
B3	II	16	ホルンフェルス (灰色)	石核		5.3	4.5	2	41.6	背面は穧面。遺物No.15.47と接合。
B6	II	17								穧
B6	II	18	黒色流紋岩	剥片		4.3	4.2	1.5	20	背面に穧面を残す。
B6	II	19	ホルンフェルス (砂岩系)	剥片		2.6	2	0.9	3.6	縦長剥片素材。
B6	II	20	灰色流紋岩	剥片		5.4	5.3	1.9	46.3	背面に穧面を残す。
B5	II	21	白色流紋岩	剥片		4.3	4.9	1.5	26.5	背面に穧面を残す。
B6	II	22	白色流紋岩	剥片		3.2	1.5	1	4.5	縦長剥片。正面下部に細石刃の削離痕あり。
C6	II	23	黒色流紋岩	剥片		2	5.1	1.3	6.1	横長剥片素材。
C5	II	24	白色流紋岩	剥片		3.1	2.3	0.8	3.7	縦長剥片素材。
C5	II	25	黒色チャート	剥片		2.1	1	0.3	0.8	縦長剥片素材。上面打面は穧面。
C5	II	26	羔色チャート	剥片		1.9	1.1	1	1.8	
C6	II	27	ホルンフェルス (灰色)	剥片		5.6	3.7	1	19.3	左側面は穧面。
B6	II	28	チャート(珪質 頁岩系)	剥片		4.3	4.3	1.5	24.7	右側面は穧面。
B7	II	30								欠番
B7	II	31	頁岩			1.3	1.1	0.2	0.3	小剥片。
B7	II	32	白色流紋岩	剥片		3.9	2	1	6.9	縦長剥片。
B7	II	34	白色流紋岩	剥片		2.7	3	1	6.7	背面に穧面を残す。
B7	II	35	白色流紋岩	剥片		4.8	5.3	2	44.3	背面に穧面を残す。
B7	II	36	ホルンフェルス (灰色)	剥片		4.1	4.8	1	16.1	上面打面は穧面。
B7	II	38								穧
B7	II	39	黒色流紋岩	剥片		4.4	3.2	1	12.1	縦長剥片素材。
B7	II	40	頁岩	剥片		2.1	1.4	0.3	1.6	背面に穧面を残す。
B7	II	41	砂岩	石核		5.2	5.6	1.6	47	縦長剥片の削離痕。
B8	II	42	ホルンフェルス (灰色)	剥片		1.4	1.9	0.5	0.9	小剥片。
B8	II	43	尾鷲山酸性岩類	剥片		5.4	3	1.3	12.7	縦長剥片素材。
B8	II	44	頁岩			3.5	1.8	0.8	4.3	縦長剥片。
C8	II	45	羔色流紋岩			4.3	2.9	1.5	15.1	左側面は穧面。
C8	II	46	茶色流紋岩			2.2	3	0.5	3.3	
C7	II	47	ホルンフェルス (灰色)	剥片		2.7	3.1	0.9	5.9	小剥片。遺物No.15.16と接合。
C7	II	48	ホルンフェルス (砂岩系)	剥片		7.2	4.2	1.5	38.7	縦長剥片素材。
C7	II	49	灰色流紋岩	剥片		2.1	2	0.9	2.6	
C6	II	50	羔色チャート	剥片		2.4	1.9	0.8	2.6	上面打面は穧面。
B5	II	51	頁岩			2.6	2.5	0.6	2.6	縦長剥片。正面は穧面。
D2	II	52	頁岩			3.5	3.4	1	11.3	右側面は穧面。
E3	II	53								穧
E3	II	54	ホルンフェルス (泥質岩系)	剥片		8.1	4.1	2.3	47.1	縦長剥片素材。
E3	II	55	白色流紋岩	剥片		4.3	6	1.6	28.4	横長剥片素材。
D3	II	56	白色流紋岩	剥片		3.2	1.4	1	3.7	
D3	II	57	白色流紋岩	剥片		1.7	3	0.5	2.2	横長剥片素材。
D3	II	58	白色流紋岩	剥片		3.9	4	1.3	16.1	遺物No.60と接合。背面は穧面。
D3	II	59	白色流紋岩	剥片		1.2	3.1	0.5	1.5	横長剥片。

レバクト No.	出土 場所	層	遺物 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
D4	II	60	白色流紋岩	剥片		5.2	3	1.8	20.4	遺物 No.58 と接合。背面は 裸面。
E3	II	61	黒色流紋岩	剥片		3.7	5.6	1.1	21.1	横長剥片素材。表面の 2/3 は白色の斑点。
D4	II	63	頁岩	剥片		2.4	3	0.7	3.1	背面は裸面。
D4	II	64								欠番
E4	II	65	流紋岩 (尾鈴山 酸性岩系)	剥片		4.2	4.2	1.5	17.4	上面は裸面。
E4	II	66	白色流紋岩	剥片		4.5	3.4	0.9	15.7	縦長剥片素材。背面は裸面。
F4	II	67	ホルンフェルス (泥質岩系)	剥片		3.5	4	1	13.3	横長剥片素材。
F4	II	68	頁岩	剥片		2.2	1.4	0.9	2.4	
F3	II	69	黒色チャート	剥片		2.1	3.8	1	8.9	横長剥片素材。
F4	II	70	白色流紋岩	剥片		2.5	1.6	1	4.7	
F5	II	71	黒色流紋岩	剥片		6.7	4.9	1.5	37.3	縦長剥片。背面は裸面。
E5	II	72	灰色頁岩	剥片		2.1	2.4	0.6	3.3	
E5	II	73	青色チャート	剥片		4.2	3.4	2	24.2	遺物 No.184 と接合。背面 に裸面を残す。
D5	II	74	灰色流紋岩	剥片		4.3	2.7	1.2	11.4	縦長剥片素材。背面下部は 裸面。
D5	II	76	ホルンフェルス (黄色)	剥片		5.4	5	1.7	38.4	背面に裸面を残す。
D5	II	77	黒色流紋岩	石核		4.8	4.8	2.3	30	横長剥片。表探資料と接合
F6	II	79	白色流紋岩	剥片		3.2	4.4	1.1	10.9	横長剥片素材。
F6	II	80	茶色流紋岩	石核		5.8	4.4	2	57	頭部調整あり。上面からの 剥離。
E6	II	81	ホルンフェルス (黄色)	剥片		7	4.2	1.5	31.8	縦長剥片素材。
E6	II	82	茶色流紋岩	剥片		3.8	4	1.2	18.8	横長剥片。背面に裸面を残す。 底面からの調整あり。
E6	II	83	黒色流紋岩			2.1	1.3	1.3	2.8	縦長剥片素材。
D6	II	85	黒色流紋岩	剥片		2.3	2.3	0.9	3.6	左側面は裸面。
D7	II	88	黒色流紋岩	剥片		3.5	3.4	1.2	9.6	表面の 3/2 以上が白色の斑 点。
D7	II	90	ホルンフェルス (岩系)	石核		2.8	3.8	2	21.3	
E8	II	91	黒色チャート	剥片		1.5	1	0.7	1	
E8	II	92	黑色流紋岩	剥片		2.7	1.8	1	3.5	縦長剥片素材。
E8	II	93	頁岩	剥片		2.4	2.4	0.8	3.2	
D8	II	100	青色チャート	剥片		1.8	1.9	1.1	2.8	
E9	II	101	ホルンフェルス (灰色)	剥片		5.3	4.7	1.3	20.9	縦長剥片素材。
B2	II	102	茶色流紋岩			2.4	3.6	1.1	8.4	横長剥片。背面は裸面。
B2	II	103	黒色流紋岩	剥片		1.8	3.5	1.2	3	頭部打面は裸面。微細な調 整あり。
B2	II	104	白色流紋岩	剥片		2.2	2.3	0.7	3.6	
B2	II	106	灰色流紋岩	剥片		0.9	1	0.3	0.1	調整剥片。
B2	II	108	黑色流紋岩	剥片		1.1	1	0.4	0.3	調整剥片。
B3	II	109	泥岩	剥片		2.8	1.4	1	4.1	
B3	II	110	白色流紋岩	剥片		1.6	1.4	0.6	0.9	
B3	II	111	白色流紋岩	剥片		0.9	2.3	0.7	1.2	横長剥片素材。
B3	II	112	黒色チャート	剥片		1.2	0.7	0.5	0.3	小剥片。
B3	II	113	頁岩	剥片		3	3.3	0.9	7.9	右側面に裸面を残す。
B3	II	115	白色流紋岩	剥片		1.4	0.9	0.4	0.2	調整剥片。
C2	II	116	ホルンフェルス (泥質岩系)	石核		4.5	5.8	2.2	44.6	縦長剥片の割離痕。
C3	II	117	黒色流紋岩	剥片		3.2	2.3	1.2	6.6	縦長剥片素材。
C3	II	118	灰色流紋岩	剥片		2	2.9	1.3	4.9	横長剥片素材。
C3	II	119	流紋岩 (尾鈴山 酸性岩類系)	剥片		1.7	1.6	1	1.3	
C3	II	120	頁岩			2.6	1.4	0.7	1.9	縦長剥片素材。
C2	II	121								裸
D3	II	122	灰色流紋岩	剥片		3.3	4.3	1.3	20.4	上面打面は裸面。
D3	II	123	尾鈴山酸性岩類	剥片		6.3	4.4	2	50.6	縦長剥片素材。背面は裸面 を残す。
D3	II	125	流紋岩 (尾鈴山 酸性岩類系)	剥片		2.9	3.2	1.1	10.6	
D3	II	126								裸
C3	II	127	白色流紋岩	剥片		3.3	2.9	0.8	4.7	
C4	II	129	黒色流紋岩	剥片		2.9	3	1	7.3	右側面は裸面。
C4	II	130	黑色流紋岩	剥片		2.4	2.1	0.7	2.8	横長剥片素材。

レイヤー No.	出土 番号	層	遺物 No.	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
C4	II	131	白色流紋岩	剥片		2.9	3.5	0.8	7.3	横長剥片素材。 礫
C4	II	132								
C4	II	133	白色流紋岩	剥片		3.5	5.4	1.9	27.2	横長剥片素材。背面は穧面。
D4	II	134	流紋岩(尾鈴山山麓 性岩類系)	剥片		2.6	1.5	1	3.2	
D4	II	136	ホルンフェルス (泥質岩系)	剥片		3.2	3.5	0.7	8.8	
D4	II	137	灰色流紋岩	剥片		2.3	1.6	1.1	3.5	縦長剥片素材。
D4	II	138	流紋岩(尾鈴山山麓 性岩類系)	剥片		2.6	2.2	1	3.6	
D4	II	139	ホルンフェルス (灰色)	剥片		4.7	3	0.9	10.4	縦長剥片素材。
D4	II	140	白色流紋岩	剥片		4.1	2.5	0.9	7.9	縦長剥片素材。
D4	II	141	ホルンフェルス (泥質岩系)	剥片		2.5	4.5	1	7.4	横長剥片素材。
E4	II	142	黒色流紋岩	剥片		3.3	3.5	1.2	10.6	背面に穧面を残す。
E4	II	143	白色流紋岩	剥片		3.1	3.2	1.5	11.6	
E4	II	145	泥岩	剥片		4	3.3	1.8	18.1	右側面に穧面を残す。 礫
E4	II	146								
D5	II	150	黒色流紋岩	剥片		2	1.2	0.4	0.7	縦長剥片素材。
C4	II	151	白色流紋岩	剥片		6.4	4	2	48.4	縦長剥片素材。背面底部に わずかに穧面を残す。
C5	II	154	黒色流紋岩	剥片		2.1	2.3	0.5	2.3	
C5	II	155	灰色流紋岩	剥片		1.9	1.5	0.5	1.3	縦長剥片素材。
C5	II	157	白色流紋岩	剥片		3	31.8	1.2	5.5	背面に穧面を残す。
D5	II	159	白色流紋岩	剥片		1.6	1.7	0.5	0.9	
E5	II	160	尾鈴山酸性岩類	剥片		6.6	4.8	2.1	42.6	縦長剥片素材。
E5	II	161	尾鈴山酸性岩類	石核		6.9	8.1	3.4	96.5	
E5	II	162	尾鈴山酸性岩類	石核		5.9	3	2.7	45	縦長剥片の剥離痕。
E5	II	163	黒色流紋岩	剥片		3.8	2.5	1.3	12.2	縦長剥片素材。
E5	II	164	尾鈴山酸性岩類	剥片		4.5	1.8	1.6	10.8	縦長剥片素材。
E5	II	165	白色流紋岩	剥片		3.5	2.9	0.9	7	縦長剥片素材。
F5	II	166	ホルンフェルス (泥質岩系)	剥片		3.6	2	1.9	7.5	縦長剥片素材。
E5	II	168	黒色流紋岩	剥片		2.3	2.6	0.8	2.9	
E5	II	169	青色チャート	剥片		2.7	3	1	7.1	背面は穧面。
D5	II	170	白色流紋岩	剥片		7	4.1	2.1	37.1	
D6	II	171	白色流紋岩	石核		5.9	5	4.9	79.5	背面に穧面を残す。
D6	II	173	黒色流紋岩	剥片		4.1	2.4	1.3	10.8	縦長剥片素材。側面に微細 な割離。
C6	II	174	黒色流紋岩	石核		3.8	3.4	2.9	30.6	表面に白色の斑点。
E6	II	176	黒色流紋岩	剥片		2.6	2.3	0.7	2.9	縦長剥片素材。
E6	II	177	頁岩			3.6	2.3	0.7	4.1	
E6	II	178	茶色流紋岩	剥片		1.6	1.5	0.9	1.8	
E6	II	179	黒色流紋岩	剥片		2.7	2.3	0.8	2.6	
E6	II	180	ホルンフェルス (砂岩系)	石核		5.1	6.8	2	72.4	瀬戸内技法による剥離。
E6	II	183	黒色流紋岩	剥片		3.3	2.5	0.7	6.8	縦長剥片素材。右側面は穧 面。
C6	II	184	青色チャート	剥片		4.1	3.7	1.5	16.3	遺物 No.73と接合。背面に 穧面を残す。
C7	II	185	砂岩	剥片		5.6	3.9	1.9	35.8	縦長剥片素材。
C7	II	186	黒色流紋岩	剥片		1.8	1.7	0.7	1.9	
D7	II	187	ホルンフェルス	石核		4	4.1	4.2	96.4	
D7	II	189	尾鈴山酸性岩類	石核		6.5	5.8	2.4	80.2	
D7	II	191	ホルンフェルス (灰色)	剥片		2.7	3.4	0.8	4.8	横長剥片素材。
D7	II	193	白色流紋岩	剥片		2.3	1.2	0.5	1.2	縦長剥片素材。
D7	II	194	黒色流紋岩	剥片		2.5	2	1	3.9	遺物 No.219と接合。
D7	II	195	茶色流紋岩	剥片		4.7	2	0.7	5.3	縦長剥片素材。背面に穧面 を残す。
D7	II	196	黒色チャート	剥片		1.1	1.5	0.3	0.5	縦長剥片素材。
D7	II	197	灰色流紋岩	剥片		2.2	0.9	0.5	0.4	
D7	II	200	ホルンフェルス (灰色)	剥片		6	2.7	1.7	19.4	背面に穧面を残す。
E8	II	201	黒色流紋岩	剥片		1.6	2.3	0.4	0.9	礫
E8	II	202								
E7	II	203	茶色流紋岩	剥片		1.6	2.7	0.6	2.7	横長剥片素材。
E8	II	204								穪

レバウト No.	出土 層	遺物 No.	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
D8	II	205	ホルンフェルス (灰色)	剥片	2.5	2.6	1	4.4	
D8	II	206	ホルンフェルス (黄色)		3.3	6.8	2	31.4	横長剥片素材。
A9	II	207	ホルンフェルス (黄色)	剥片	4.9	3.3	1.6	24.9	縦長剥片素材。遺物 No.209 と接合。背面は裸面。
B8	II	209	ホルンフェルス (黄色) (岩系)	剥片	3.7	1.3	0.8	3.2	縦長剥片素材。遺物 No.207 と接合。背面は裸面。
B8	II	210	黒色流紋岩	石核	4.8	4.7	2.1	43	背面は裸面。
B8	II	211	砂岩	剥片	4	2.6	1.2	9.9	縦長剥片素材。
B8	II	212	白色流紋岩	剥片	1.3	1.6	0.5	0.9	
B8	II	213	チャート(珪質頁 岩系)	剥片	3.5	6.4	2	42.2	横長剥片素材。
A8	II	216	黑色流紋岩	剥片	1	1	0.2	0.2	調整剥片。
B8	II	217	灰色流紋岩	剥片	2.4	1.1	0.5	1.2	縦長剥片素材。
C7	II	218	ホルンフェルス (黄色)	剥片	1.4	1.5	0.3	0.5	小剥片。
C7	II	219	黑色流紋岩	剥片	2.7	2.5	0.6	3.2	194と接合。
C7	II	220	黑色流紋岩	石核	4.5	3.4	1.1	18.1	頭部打面は裸面。縦長剥片 の剥離面。
C4	II	224	頁岩	剥片	2.4	1.7	0.5	1.7	
B4	II	225	白色流紋岩	剥片	5.6	6	2.5	84.8	遺物 No.13と接合。13に打 点あり。背面底部に裸面を 残す。
D3	II	226	黑色流紋岩	剥片	3	4.2	1.3	15.4	横長剥片素材。右側面は裸 面。
C2	II	228	白色流紋岩	剥片	2	2.7	0.5	3	横長剥片素材。
D2	II	229	尾鈴山酸性岩類	剥片	3.9	4.7	2.3	30	
D2	II	230							裸
D2	II	231	茶色流紋岩	剥片	3.1	1.9	1	4.4	縦長剥片素材。右側面は裸 面。
F3	II	232	白色流紋岩	剥片	2.2	2.7	0.5	2.6	横長剥片素材。
F6	II	233	チャート(珪質頁 岩系)	剥片	1.9	2.5	0.6	2.7	
B7	II	234	白色流紋岩	剥片	1.8	2.4	0.8	1.8	横長剥片素材。
B6	II	235	黑色流紋岩	剥片	5.2	2.4	0.5	6.8	縦長剥片素材。
C2	II	236	灰色流紋岩	剥片	0.9	1.7	0.4	0.5	調整剥片。
E6	II	237	尾鈴山酸性岩類	剥片	3.3	1.7	0.6	2.7	
C2	II	238	茶色流紋岩	剥片	4.9	3.5	1	16.6	縦長剥片。上面は裸面。
D4	II	239	青色チャート	剥片	1	1.4	0.4	0.5	小剥片。
D4	II	240	黑色流紋岩	剥片	0.9	0.7	0.4	0.2	調整剥片。
D6	II	242	白色流紋岩	剥片	2.2	3.4	0.8	4.1	横長剥片素材。
D6	II	243	黑色流紋岩	剥片	5.4	4.3	1.3	27.6	縦長剥片素材。遺物 No.12 と接合。背面は裸面。
D5	II	245	黑色流紋岩	剥片	1.7	2.1	0.7	2.5	横長剥片素材。背面は裸面 を残す。
F7	II	246	ホルンフェルス (泥質岩系)	剥片	5.2	3.8	1	14.7	
C7	II	247	チャート(珪質頁 岩系)	剥片	3.1	4	1.6	13	



圖 版



朝草原遺跡俯瞰（北から）



朝草原遺跡A区遺跡俯瞰（西から）

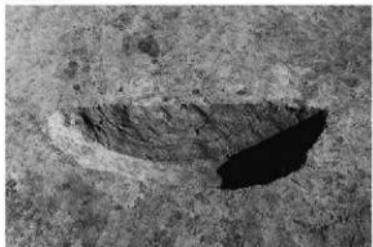


朝草原遺跡A区IV層無文土器出土状況（南から）

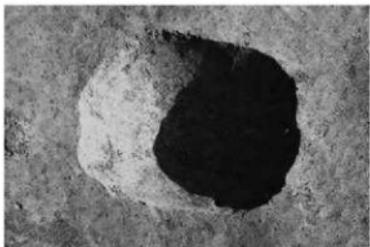


朝草原遺跡A区土層断面（南から）

図版 3



朝草原遺跡A区SC 1断面（西から）



朝草原遺跡A区SC 1完掘（西から）



朝草原遺跡A区SC 2断面（西から）



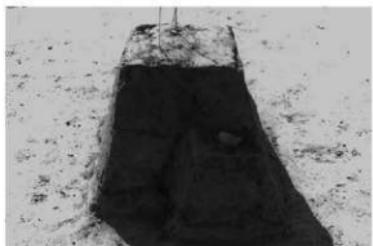
朝草原遺跡A区遺跡SC 2完掘（西から）



朝草原遺跡A区G遺跡SC 3断面（西から）



朝草原遺跡A区遺跡SC 3（西から）



朝草原遺跡A区V層無文土器出土状況（北から）



朝草原遺跡A区K3 グリッド上層断面（南から）



朝草原G遗跡B区-C区剖面



朝草原G遗跡B区北壁上层断面

図版 5



朝草原遺跡B区SI 4（西から）



朝草原遺跡B区SI 5（西から）



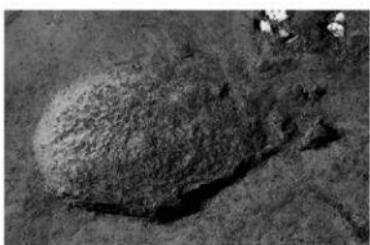
朝草原遺跡C区SI 1（南から）



朝草原遺跡B区SI 5北側散疊（西から）



朝草原遺跡C区SI 1断面（南から）



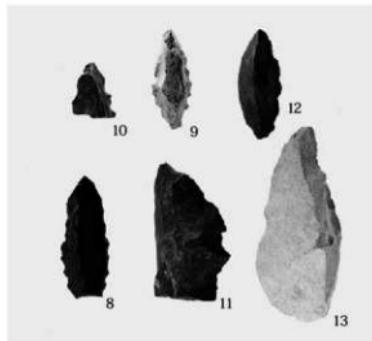
朝草原遺跡C区SI 1完掘（南から）



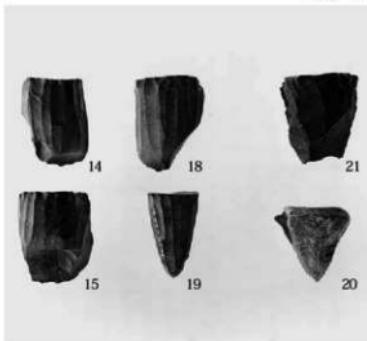
朝草原遺跡C区SI 2（東南から）



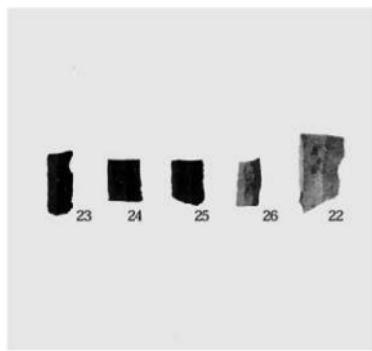
朝草原G遺跡C区SI 3（東南から）



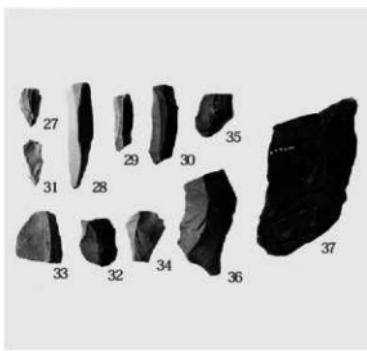
A区出土角錐状石器、ナイフ形石器



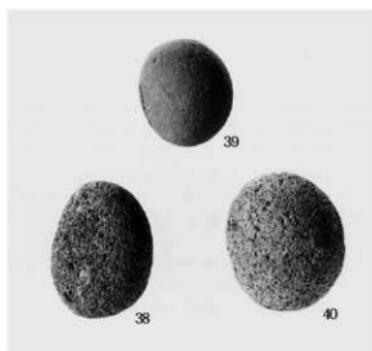
A区出土細石刃核



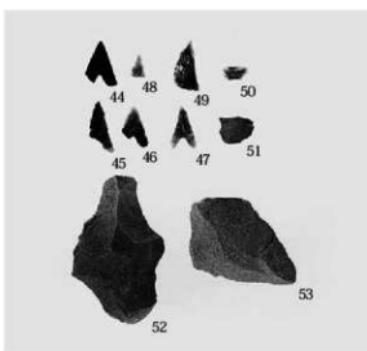
A区出土細石刃



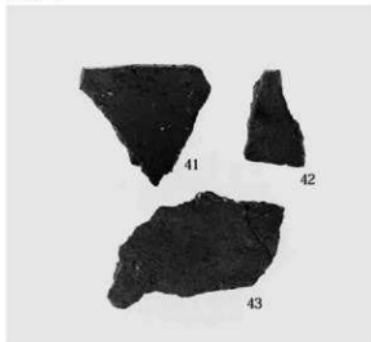
A区出土剥片、石核



A区出土石器（石礫、石礫の未製品、剥片）



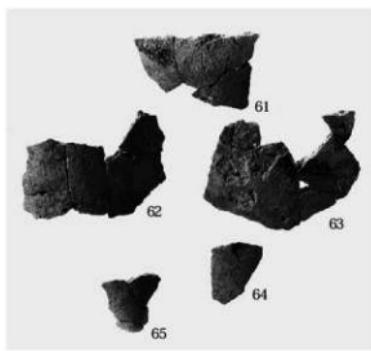
A区出土敲石



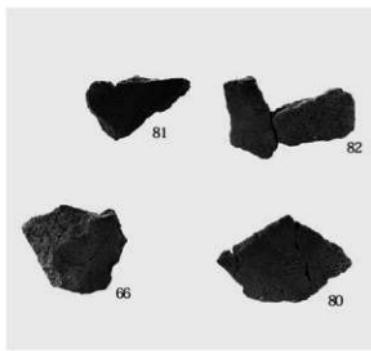
A区V层出土土器



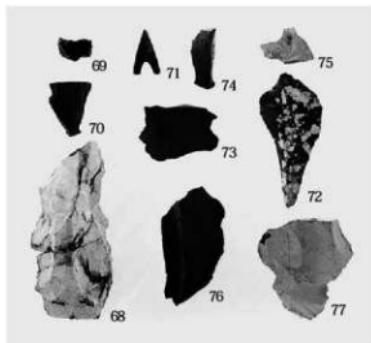
A区IV层出土土器



A区IV层出土土器

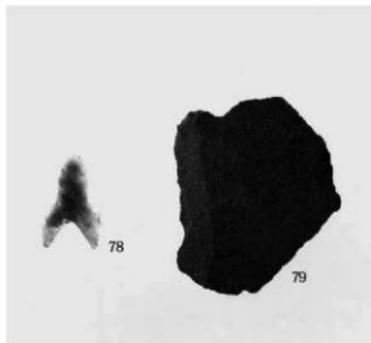


A区V层出土土器、C区IV层出土土器



B区出土石器

(角锥状石器、细石刃核、石砾、石核、剥片)



C区出土石器



尾立第3遺跡網櫛



尾立第3遺跡北側散櫛（西から）



尾立第3遺跡SI 1 (西から)



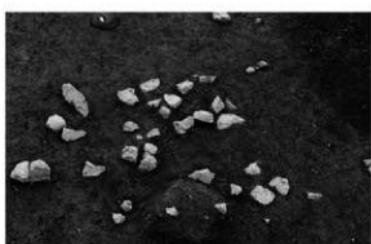
尾立第3遺跡SI 2 (西から)



尾立第3遺跡SI 3 (西から)



尾立第3遺跡SI 4 (西から)



尾立第3遺跡SI 5 (西から)



尾立第3遺跡SI 6 (西から)



尾立第3遺跡SI 7 (西から)



尾立第3遺跡SI 8 (西から)



尾立第3遺跡S19（西から）



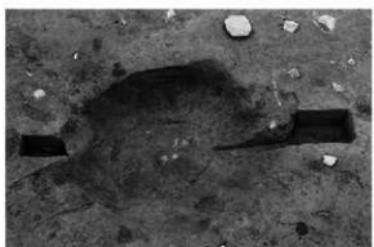
尾立第3遺跡S10（西から）



尾立第3遺跡S11（西から）



尾立第3遺跡S11断面（西から）



尾立第3遺跡S11完闇（西から）



尾立第3遺跡S12（西から）

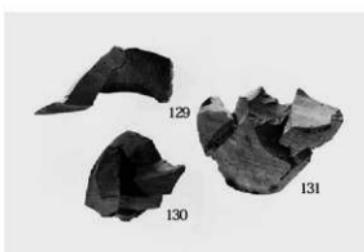
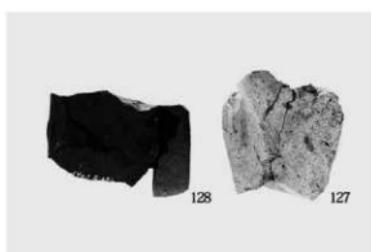
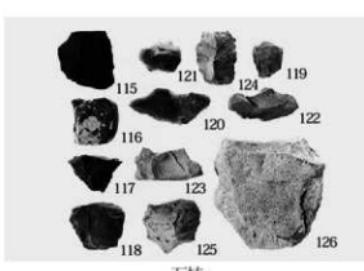
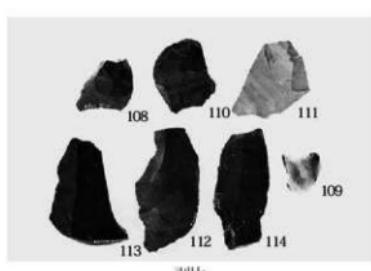
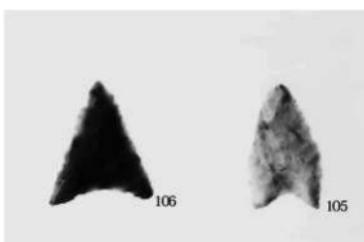
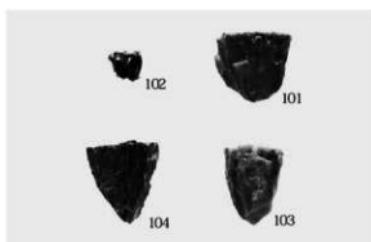
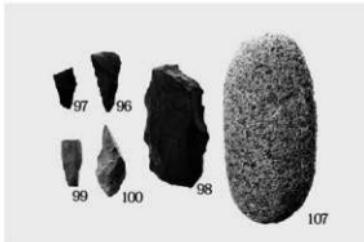
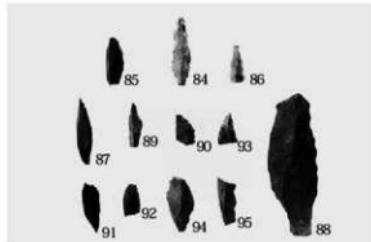


尾立3遺跡II層石器出土状況（西から）



朝草原G遺跡B区作業風景

図版 11



## 報告書抄録

ふりがな	あさくさばるいせき おだてだい3いせき							
書名	朝草原遺跡 尾立第3遺跡							
副書名	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 42							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第147集							
執筆・編集 担当者名	井上 美奈子							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那阿 4019 番地							
発行年月日	2007年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あさくさばるいせき 朝草原遺跡	みやざきけん 宮崎県 えびのくん 児湯郡 つのちやう 都農町 おおあさかわむら 大字川北 あさくさばるいせき 朝草原	45406		32° 15' 01"	131° 31' 36"	2005.9.1 2005.10.22	4430m <sup>2</sup>	東九州自動 車道（都農 ～西都間） 建設に伴う 発掘調査
おだてだい3いせき 尾立第3遺跡	みやざきけん 宮崎県 えびのくん 児湯郡 つのちやう 都農町 おおあさかわむら 大字川北 あさくさばるいせき 尾立	45406	1011	32° 15' 05"	131° 31' 29"	2005.9.1 2005.10.26	1,000m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
朝草原遺跡	集落跡	旧石器時代終末期 縄文時代草創期 縄文時代早期		礫群 2基 集石遺構 3基 土坑 3基		角錐状石器、ナイフ形石器、 細石刃核、石礫、 無文土器、剥片、石核		
尾立第3遺跡	集落跡	旧石器時代終末期 縄文時代早期		礫群 10基 集石遺構 2基		角錐状石器、ナイフ形石器、 台形石器、細石刃核、 石礫、剥片、石核		

---

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第147集

朝草原遺跡

尾立第3遺跡

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 42

2007年2月28日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地  
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 株式会社イースト朝日  
〒897-0122 宮崎市芳士字中原590-1  
TEL 0985(62)5055 FAX 0985(62)5054

---

---